【句釋】家父、家は氏、父は字なりと。或は云ふ家父の二字字ならんと、周の大夫たり、『古義』家父は周の大夫、何休、家を以て采地と爲す、因て以て氏と爲す。作誦は卽ち作詩なり、詩は聲に發するもの故に以て誦と言ふ。以究王訩、家父が此の詩を作る所以は、尹氏の惡を擧げんが爲めなり、王政の訩亂する原由を究めんとなり。式訛爾心、尹氏を指して爾と云ふ、爾が心念を改め化て、從來の如く專恣なる勿れとなり。以畜萬邦、畜は畜養なり、萬邦の民を撫し養へとなり。陳氏曰く、尹氏が厲威、人をして戲談するを得ざらしむ、而るに家父詩を作り、乃ち復自から其の己に出ることを表す、身を以て尹氏の怒に當る者は蓋し家父は周の世臣、義國と存亡を俱にする故なり。『雕題』曰く、此の說陳腐甚し。呂東萊曰く、篇終る故に亂の本を窮めて之を王心に歸す、亂を致す者は尹氏なりと雖も尹氏を用ふる者は則ち王心の蔽なり。慶源輔氏曰く、東萊謂ふ、篇終る故に其の亂本を究めて之を王心に歸すと、此の說當る。故に直ちに此の章に至りて、方に箇王字を說く、蓋し此に至るときは王も亦其の責に任せざるを得ざるを言ふ、前章嘗て尹氏の小人を用ふるを譏りて王に及ばずと雖も、然れども王の尹氏を用ふる所以の者、亦其の責を逃るる能はず。陳腐の說なるかは知らず、切當明白なり。『雕題』曰く、腐說削る可し、呂東萊の說、正章にあらず。今謂ふ『雕題』反て正意にあらずと。

【評論】節南山は八章八句を以て成る。（古ノ七、八、九、十ノ四章ヲ二章トス。）劉氏曰く、春秋隱公三年三月、平王崩ず、四月尹

氏卒す、桓公八年桓王家父をして來聘せしむ、十五年家父をして來つて車を求めしむ。計るに家父來聘の時、上、尹氏が卒を距ること方に十七年、恐らくは卽ち此の詩の尹氏家父ならん、且此の詩尹氏政を爲し平らかならざるを刺りて、國既卒斬、何用不監、喪亂弘多、憯莫懲嗟、降此鞠訩、降此大戾と曰ふの語、皆亂亾以後の詞に似たり、疑ふらくは此れ或は東遷後の詩ならん。

正月繁霜　我心憂傷　民之訛言　亦孔之將　念我獨兮　憂心京京　哀我小心
瘨憂以痒

正月繁霜あり、我が心憂傷す、民の訛言も、亦孔だ之れ將なり、念ふ我獨す、憂心京京たり、哀むらくは我が小心、瘨憂以て痒めること、

【句釋】正月繁霜、今日の西洋曆に就て正月霜繁きは普通なり、恠しむに足らず。然るに此の正月は夏の四月なり、之を正月と謂ふは純陽事を用ふるを以て、正陽月と爲す。（朱子ノ說）『雕題』曰く、四月之を正月と謂ふ、何の謂ひを知らず。或は曰く、寒ならず暑ならず、氣候暢通、四時の中を得、故に之を正月と謂ふ、理或は然らん、純陽の解の若きは斷斷從ふべからず。今謂く、四月の異名を已に正陽月と曰ふ、故に陽を舍て正を取て以て正月と謂ふ、孟陬の正月にあらざること知る可し、何の妨

か之れ有らん、若し之を陽月とせば、陽月は十月の異名益す通じ難し。朱子の解、理に於て當然たり、夏日に此の冬日の霜が降る、乃ち、我心憂傷する所以なり。民之訛言、訛は譌に同じ、又謬なり、舛なり、愚民共が種種の譌言を放つなり。亦孔之將、將は大なり、愚民を捨てては國家は成立せず、是を以て愚民の訛言も亦孔だ害の大なるを爲す。念我獨兮、繁霜を見て憂ふる者は我獨なり、愚民は憂へざるのみならず姦譌の言を放ちて以て相互に害を計るなり。京京は憂心の大なるを言ふ、事天下國家に關す、一身一家の利害にはあらず。哀我小心、瘨憂以痒、憂の切にして遂に病むに至る。瘨憂は朱子曰く、幽憂なり。子先曰く、憂ふる所のもの幽深にして人の見ざる所を言ふなり、繁霜を見て憂を生じ、民の訛言を聽て亦憂を生ずるなり。朱子は此の事を解して既と而との二字を文章中に用ふ。『雕題』曰く、既而の二字當を失すと、今謂ふ失當にはあらざるなり。

父母生我　胡俾我瘉　不自我先　不自我後　好言自口　莠言自口　憂心愈愈

是以有侮

父母我を生み、胡ぞ我を瘉ましむる、我より先ならず、我より後ならず、好言口よりし、莠言口よりす、憂心愈愈たり、是を以て侮ることあり、

【句釋】父母生我、胡俾我瘉、憂心の極、父母を呼出して我の苦痛を訴ふるなり。瘉は音ユ、訓ヤム病

なり。父母に何等の關する所にあらざるを知るも此の如き言を發するは人の常情なり。不自我先、不自我後、先か後かであれば此の瘉無からんも、正しく今日に生れたるを如何せん、過去か未來ならいざ知らず、現在なるを如何せん。好言自口、莠言自口、愚民の言ふ所、好も莠も唯口のみにして、至誠ふること無きなり、莠はハグサ狗尾草と稱する草の名、田中に生じ稷に似て實なきもの、卽ち醜と訓す。『通解』曰く、言、衷に由らざるときは、是非を顚倒し黑白を變亂す、是れ愚民の常なり。憂心愈愈。是以有侮、愈愈は心痛の甚激しきなり、愚民より見れば此の憂心は何の功も無きものなりとして反て之を侵侮すとなり。愚民の愚民たる心事、古今異ならずと謂ふ可し。

憂心惸惸　念我無祿　民之無辜　幷其臣僕　哀我人斯　于何從祿　瞻烏爰止
于誰之屋

憂心惸惸たり、我が無祿を念ふ、民の無辜なる、幷に其の臣僕たらん、哀む我が人斯、何れに從つて祿せん、烏を瞻るに爰に止まること、誰の屋に于いてせん、

【句釋】惸惸は憂意なりと、惸は惸獨と熟語してヒトリなり、字疊で憂意と爲る。念我無祿、朱子曰く、無祿は猶ほ不幸と言ふが如きのみ。俗語の薄倖の意なり。民之無辜、辜は罪なり、辜なき民も、辜なき我も國家が亡ぶ時に當つては、幷其臣僕、幷は民と我との二に係る。民も我も我が祖國を亡ぼしたる所

の人の臣僕と爲りて之に仕へざるを得ず。哀我人斯、我と人と共に哀しむなり。斯は助語。于何從祿、我も人も何處の人に從屬して祿を受けんや。瞻烏爰止、于誰之屋、烏も止まる所を知らず、我も亦止まる所を知らざるなり。輔氏曰く、民は下民を指し、人は則ち上下を幷して之を言ふ。朱氏曰く、念二我無祿一は己の不幸を傷むなり、幷其臣僕は斯民の俱に不幸を傷むなり。

瞻二彼中林一　侯薪侯蒸　民今方殆　視二天夢夢一　既克有二定　靡二人弗勝一　有二皇上帝一
伊誰云憎

彼の中林を瞻れば、侯薪侯蒸あり、民今方に殆し、天を視れば夢夢たり、既に克く定まること有らば、人に勝たずといふこと靡し、皇なる上帝あり、伊誰か云に憎まん、

【句釋】中林は林中の倒用。侯は維なり。薪蒸は巨木と細木。民今方殆、此の民は良民なり、殆は危殆なり。無辜の民、危殆に遭遇するなり。視天夢夢、天の明白ならざるを形容して夢夢と言ふ、天に訴へんと欲するも詮なきを言ふ。既克有定、靡人弗勝、人の勢盛なる時は天理に勝ち、理の勢定まる時は天人に勝つ。『疏義』に人の物を視る小大甚明なれど、天の人に於て善惡乃ち別無し、此れ人の有見を以て天の無知を興す、『史記』に吳、楚に入る、子胥平王の尸を鞭つ、申包胥人をして之に謂はしめて曰く、子が讐を報ずる其れ已甚しきか、吾聞く人衆きときは天に勝ち、天定まれば亦能人に勝つ。此詩より出

づる語なり。有皇上帝、伊誰云憎、皇は大なり、上帝は所謂公にして私無き最上至極の神を言ふ、此の無私公平なる上帝は特に今人を憎みて之に禍を降すにあらざるを以て、伊誰か云に憎まんと云ふなり。

謂山蓋卑　爲二岡爲陵一　民之訛言　寧莫二之懲一　召二彼故老一　訊二之占夢一　具曰予聖
誰知烏之雌雄一

謂ふ山は蓋し卑しと、岡爲り陵爲り、民の訛言、寧ぞ之を懲むること莫き、彼の故老を召び、之に占夢を訊ふ、具に曰へらく予聖なりと、誰か烏の雌雄を知らん。

【句釋】謂山蓋卑、爲岡爲陵、古訓に「山ヲ蓋シ卑シト謂ヘドモ、岡ト爲リ陵ト爲ル」とあり、今用ひず、山は卑きものなりと謂ふなり、岡陵たるに過ぎず、忽ち登り忽ち降る易易たるものなり。然るに民之訛言、寧莫之懲、民の訛言は底止する所を知らず、山は斷じて高しと言ふことを得ず。然るに王何ぞ之を懲しめざるや。朱子曰く、山蓋し卑しと謂へども、其の實は則ち岡陵の崇なり、今民の訛言此の如しと。是れ全く詩意を得ず。召彼故老、訊之占夢、王故老を召致して、之に向つて我が占夢を問訊して其の吉凶を卜せしむるを言ふ。故老は何人と指さず、年老て事理に見聞深き者を言ふ。具は二人以上にあらざれば用ひず、故に故老は二人以上召致したる者と知るべし。曰予聖、故老曰く、予は聖人なり、占夢の事豈知らざるあらんや。誰知烏之雌雄、凡そ禽鳥の類、毛色や大小を以て雌雄相知り易し、然る

に烏に至りては、首尾毛色、雌雄異ならず、人の別ち難き所、故に此の譬を引くなり、此の語は詩人よりして言ふなり、彼は是とし、此は非とし、相互に訛言を放つ、而かも孰を是とし、孰を非とする能はざるなり。

謂天蓋高　不敢不局　謂地蓋厚　不敢不蹐　維號斯言　有倫有脊　哀今之人
胡爲虺蜴

謂ふ天は蓋し高しと、敢て局まらずんばあらず、謂ふ地は蓋し厚しと、敢て蹐せずんばあらず、維斯言を號ぶ、倫あり脊あり、哀む今の人、胡爲ぞ虺蜴なる。

【句釋】●蓋の字義は嘗に類して、一旦人の口に上りし事の義を持つなり、又大凡の意を帶ぶ、敢て決せざるの辭を以て一般に通用す。●不敢不局、局は曲なり、身の壓せらるるを懼るる也、亂世、危害の身に及ぶを懼れ、天の高きも、曲躬して行かざるを得ず。●不敢不蹐、蹐は累足なり、身の陷いらんことを懼るるなり、地の厚きも亂世は厚しと言ふを得ず。●維號斯言、斯言とは謂天以下の四句十六字を指す。局天蹐地と號ぶ其の號ぶ言は、●有倫有脊、倫序あり、脊理あり、不倫の言にあらず、亦背理の言にあらず。●哀今之人、人は讒人を指す、哀む人は詩人なり。●胡爲はドウイフワケデの俗語に當る。●虺はクチバミなり。●蜴はヤモリ蜥蜴なり、共に毒蟲、今の訛言を放つ小人、何ぞ好んで此の虺蜴の如くなるぞや。

瞻彼阪田　有菀其特　天之扤我　如不我克　彼求我則　如不我得　執我仇仇
亦不我力

彼の阪田を瞻れば、菀たる其の特あり、天の我を扤かすこと、我に克たじとするが如し、彼我を求めて則とり、我を得じとするが如し、我を執へて仇仇とし、亦我を力めず。

【句釋】●阪田は朱子曰く、崎嶇墝埆の處、平田の反對、少し高處の田を言ふ。●有菀其特、菀は草の名、借て以て特卽ち苗の茂盛を形容す。阪田は地薄しと雖も、且能く物を生ず。●天之扤我、扤は音ゴツ、訓ウゴカス動なり。●如不我克、克は勝なり、天は私無し至仁ならざる可らず、而かも人を愛せずして却て我に勝んとする如きなり。我が苦辛する多きを悲しむの餘、覺えず天に之を訴ふるなり。●彼求我則、我は詩人なり、我を求めて我に則らんと欲したるときは、●如不我得、容易に我は得るに難き者と思へるが如し。然るに我を得し後は、●執我仇仇、亦不我力、我を得し後は我を執ること堅固にして、之を失せんことを恐るる者の如く、乃ち仇敵を執へし如く離さず、而かも我をして其の力を十分に發揮せざらしむ。『鄭箋』曰く、貪賢の名ありて、用賢の實無きなり、上を怨むる意彰彰然たり。

心之憂矣　如或結之　今茲之正　胡爲厲矣　燎之方揚　寧或滅之　赫赫宗周
褒姒威之

心の憂を、之を結ぶこと或るが如し、今茲の正、胡爲厲矣、燎の方に揚なる、寧ぞ之を滅すこと或らんや、赫赫たる宗周、褒姒之を威せり。

【句釋】心之憂矣、如或結之、詩人自から言ふ、我が憂心の解けざるは、恰も糸を以て結びたる如きなり、今茲之正、胡爲厲矣、今茲は今日なり、正は政、厲は暴厲、政治の暴厲なることを言ふ。燎は音レウ、訓ヤイガリ野狩なり、原野の草木を燒て、方揚非常の勢を以て野狩を盛揚するなり。寧は何なり。或滅之、勢力盛んなる時は他人が如何とも爲す能はざるなり。赫赫は王威の盛んなると、燎火の揚なると此の二者を兼て言ふ。宗周は大周とか巨周とか言ふが如し。周は萬國の宗とする所なればなり。西周と解し鎬京と解するは共に不可なり。褒姒威之、天人共に如何とも爲す能はざりし宗周も遂に褒姒なる一女子の爲め威びたるを言ふ、之を言うて之を傷む。褒姒は幽王の嬖妾なり、褒國の女、姒は姓なり、幽王は周室中興と稱せらるる宣王の子にして初め申后を納れ、太子宜臼を生む、後褒姒を嬖して申后及び宜臼を廢す、在位十一年にして、申侯犬戎を以て入寇し、王を驪山の下に弑す、晉、衞、秦、來り救うて、故の太子宜臼を立て洛邑に遷る、是を平王と稱す。鎬京の西周亡びて、洛邑の東周と爲る。武王、成王より幽王に至る十二王、三百五十二年なり。此の詩は乃ち西周亡び、平王の時の作とす。歐陽永叔曰く、此の上七章、皆王が訛言を信じて政を亂すを述ぶ、此に至つて始めて周を滅すを言ふ。褒姒を主

とする者は、王が女色に溺れて昏惑を致せるを謂ふ、其の禍亂の本を推て以て罪を歸するなり。豐城の朱氏曰く、桀の亡るや、湯之を滅すにあらず、妹喜實に之を滅すなり、紂の亡るや、武王之を滅すにあらず、妲己實に之を滅すなり、幽王の亡るや、申侯犬戎之を滅すにあらず、褒姒實に之を滅すなり、然して桀妹喜に亡びて天下遂に商と爲る者は、其の湯あるを以てなり、紂妲己に亡びて、天下遂に周と爲る者は、其の武王あるを以てなり、幽王褒姒に亡びて、天下姓を易るに至らざる者は、德湯武の如くにして以て之に繼ぐもの無きを以てなり、亦以て文武成康（文王、武王、成王、康王ノ四王ナリ）の遺澤其の人に在る者、未だ泯びざるを見る也、噫是の時に當て天命の周に眷眷たる者未だ釋ざる也、民心の周に眷眷たる者未だ散せざるなり、而して幽王則ち嬖妾を用ひて以て內に亂れ、羣小を用ひて以て外に亂れ、而して先自から天に絕つ、怨を民に結ぶときは、則ち以て其の身を滅すに足るのみ。顧氏曰く、胡爲厲矣、注疏、蘇子由集傳、讀詩記、詩緝、及び今晨舍の閔本、俱に胡然厲矣に作る、魯詩世學、胡爲厲之に作る、厲は集傳に叶力桀の反、威滅は洪武正韻に據るに、本是二字、滅は彌列の反、威は呼決の反、然れども『說通』姚說を引て云ふ、滅は水を用ひ戈を用ひ以て灰を成す、褒姒一婦人を以て實に滅國の本と爲る、而して人其の滅を見ず、故に滅の旁の水を去る、亦詩人此の意ありや否やを知らざるなり。

終其永懷　又窘陰雨　其車既載　乃棄爾輔　載輸爾載　將伯助予

終を其れ永く懷ふに、又陰雨に窘められる、其の車既に載せて、乃ち爾の輔を棄てつ、載ち爾の載を輸して、伯に予を助けよと將はん、

【句釋】終其永懷、終ヲと訓むも終ニと訓むも意義共に通ず、道路の艱難を永く懷ふなり。蘇子由曰く、終其永懷は倒句の法なり、君子之を思ふと謂ふも自から妨げ無し、但終其永懷、又窘陰雨の八字須らく一氣なるべし。所謂永く其の終を思ふは、卽ち此の陰雨の窘を思ふのみ、又二句を看て兩層と作す可らず。此の解甚だ妙。又窘陰雨、道路艱難なる上に又陰雨に窘められる、泥土益す深し、豈窘まざるを得ん、陰雨は久雨なり。其車既載、乃棄爾輔、其の車上に載すべき物を載せたりと雖も、所謂輔卽ち車の輻に木を夾み以て輪の力を輔る物を棄てたりとせば、其の車は終に運轉する能はざるなり。載輸爾載、將伯助予、『左傳』隱公六年の條下に曰く、鄭人來りて平を輸す、公羊傳に輸平は猶ほ墮成の如し、何を墮成と言ふや、其の成るを敗るなり、又寡君將に墮幣せん。服虔曰く、墮は輸なり。乃ち運轉の用を爲さざる車に物を載す、其の物墮墜するは當然なり。是の時に當りて救の人、卽ち伯を呼びたりとて則ち及ぶこと無きなり。此の章の意、王の淫亂度無きは、恰も亂路に向うて車を雨中に驅るが如く、唯是れ危うして、安からず、遂に身を亡し國を滅し、其の窮極に至りて人の助を求むるも、人の助くる者無きを述べたるなり。

無棄爾輔　員于爾輻　屢顧爾僕　不輸爾載　終踰絶險　曾是不意

爾の輔を棄つること無く、爾の輻を員し、屢ば爾の僕を顧みば、爾の載を輸さず、終に絶險を踰えて、曾て是意はざりしがごとけん、

【句釋】無棄爾輔、員于爾輻、爾が輔は卽ち賢臣を指す、賢臣を棄ること無く、又車を遣らんには爾の輻を益すべしとなり。員は音エン、訓カズ數なり、故に之を益と用ふ。一は輔を求め、一は輻を員せとなり、朱子は輔卽輻と解したり、詩意を得ず。屢顧爾僕、不輸爾載、僕は御者、屢ば顧みるは僕を眷顧するなり、僕を惠愛するなり。僕たる者亦心を用ふる大、是を以て車上の物、嘗て地に輸さざるなり。終踰絶險、曾是不意、主と僕と融和して車を將る、何ぞ絶あらん、何ぞ險あらん、之を踰ること易易たるのみ、此の如く易易と險路を踰るを得ることは王曾て意はざりし所ならん、初を謹しむときは、其の終の易きを言ふ、詩人が王の心を忖度して言ふなり。『雕題』の意に依れば「チツトモ是レ意ハヌ」に當る。一方の解は此の險難を踰て見れば、其の險は存外險では無いと、曾て意はざりしならんと。詩意孰れも不可無きが、余は雕題を取らざるなり。

魚在于沼　亦匪克樂　潛雖伏矣　亦孔之炤　憂心慘慘　念國之爲虐

魚沼に在り、亦克く樂むに匪ず、潛んで伏すと雖も、亦孔だ之れ炤けし、憂心慘慘として、國の虐を爲

すことを念ふ、

【句釋】沼は池と同じ。淇園曰く、水の流れこむやうにして、ひきいれたるは皆沼なり。亦匪克樂、魚の沼に在るは自分の棲家なり、克樂しむが本然たり。然るに克樂に匪ずと云ふは、何時人に捕獲せらるべきやも料られざればなり。潛雖伏矣、潛伏とせずして、潛雖伏と間に雖字を挾む。潛も伏も各別に動らかすが爲めなり、潛伏と熟語の上から言へば、潛に重きか伏に重きか區別すべからず、雖の字を中間に挾み、雙方共に重きこと知るべし。亦孔之炤、潛居して自から伏處すと雖も、必ず此の水底に魚が在ると人知るに於ては孔だ炤炤然たるものにあらずや、炤は潛とは反對の字、潛むと雖も炤たるに於ては潛の功は嘗て無し。賢者も亦魚と同じ、潛匿すと雖も、如何なる時、如何なる禍危及ぶとも知られざるを比するなり。憂心慘慘、念國之爲虐、國の虐政を行なうて、民其の害に罹るを念ふなり、(朱說)一人の私にあらず、天下の憂を爲すものなり。

彼有旨酒　又有嘉殽　洽比其鄰　昏姻孔云　念我獨兮　憂心慇慇

彼に旨酒あり、又嘉殽あり、其の鄰を洽せ比せて、昏姻孔だ云れり、念ふ我獨兮、憂心慇慇たり、

【句釋】彼は小人輩を指す。有旨酒、又有嘉殽、美酒と美肉とを併有せり。洽比其鄰、鄰は鄰家にあらず、同類同志を鄰と言ふ、同類と結托するを洽比と言ふ。昏姻は婚姻なり。云は旋なり、同類の徒、互

に昏姻を結んで宴飲怡懌して、一身の憂を知らず、亦國家の憂を知らざるなり。念我獨兮、憂心慇慇、憂の酷きを形容して慇慇と言ふ、朱子は孔叢子を引て曰く、昔人言ふことあり、燕雀堂に處し、母子相安んじ、自から以て樂と爲す、突決し棟焚けども、怡然として、禍の將に及ばんとするを知らず、其れ此の謂か。

佌佌彼有屋　蔌蔌方有穀　民今之無祿　天夭是椓　哿矣富人　哀此惸獨

佌佌たるも彼屋あり、蔌蔌たるも方に穀あり、民今の祿無きは、天夭して是れ椓へり、哿矣富る人、哀しむ此の惸獨、

【句釋】佌佌は『爾雅』に小也、注に材器細うして陋しと、卽ち小屋なり、小屋なりと雖も彼は屋ある なり。朱子曰く、佌佌然たるの小人、既に屋あり。佌佌を屋に付せず人に付す、謬なり。蔌蔌は「サク」「ソク」、「ソウ」の音あり、訓「ヤツヤツシ」、「イヤシ」、『字書』に寠陋の貌とあり、『雕題』に寡き貌とあるは何に由るを知らず。方有穀、穀は巨穀又美穀にあらず、寠陋なりと雖も方に之れ有るなり、小なる屋、陋なる穀を彼は有し彼は方に有するなり。朱子は小なる人、陋なる者と解したるも、是れは明白なる誤りにて疑ふべき餘地なし。民今之無祿、屋あり穀あるは天の人に與ふる分にして、理の方に當然たるもの なり。然るに今日の民は祿あることなし、衣と住とを言はざるは僅かに之れ有ればなり。天夭是

椓、屋無きも人は活く、穀粟無くんば人は活きず、天は天ひして民に此の生活の本を與へざるなり、椓は喪ふなり、正に饑饉の禍を降したるなり。哿矣、哿は喜也可也と訓してヨシなり。富人、饑饉に遭ふも、富人はヨシ。哀此惸獨、食ふこと能はず、生活を營む能はざる惸獨の人は良とに哀しむべしとなり。

【評論】正月は十三章、八章は八句、五章は六句を以て成る。十三章、章章悉く悲痛、字字皆凄慘なり、西周の末、此の如きものありとすれば、今日より見て古は尙く今は卑しと爲すに足らず、唯治世のみ尙く、時の古今は論ずるの要なきなり。

十月之交　朔日辛卯　日有ノ食之　亦孔之醜　彼月而微　此日而微　今此下民　亦孔之哀

十月の交、朔日辛卯、日食せることあり、亦孔だ之醜し、彼は月にして微け、此は日にして微けぬ、今此の下民、亦孔だ之哀し、

【句釋】十月之交、朱子曰く、日月の交會、晦朔の間を謂ふなり。或說に日月の交會にあらず、九月十月の交替の時なり、乃ち十月の朔日なり、朔は音「サク」、訓「ツイタチ」一日、「ハジメ」初なり、「ツクル」盡なり、而して晦も亦盡なり、盡ると同時に一方起るを以て朔に一日又初の義あり、是の故に九月

十月交替と謂ふも、日月交會と謂ふも二者共に妨げざるなり。朔日を一本に朔月に作る、今汲古閣本朔月に作る、誤なりと李庶常の『紬義』に辨ぜり。『鄭箋』に曰く、周の十月は夏の八月なり、八月朔日、日月交會して日食すと。『正義』に曰く、此れ朔月辛卯自から是れ食する所の月、如何なる所以に因て朔月と爲すやを知らず。『竹書紀年』は正確なる本と言へざるも往往取るべきものあり。曰く、幽王六年冬十月辛卯朔日、日有ノ食ノ之とあり。『雕題』は十月は夏の八月說も取らず、亦『竹書紀年』も取らず、强て朱子に反せんが爲めのみ、他に說あるにあらず。『紀年』は此の詩に依て言ふ所なるか、又他に據る所あるか、未だ遽かに知るを得ざるも、余は是を信ずるものなり。日有食之、後世は食を蝕に作る、漢人の說に依て之を記せば、日は高く月は低し、而して常に其の行道を異にし、每朔に至つて則ち日月經緯を同くす、而して相値ふときは月下に在て、日光を隔て掩ふ、故に日光を失す、相離るる時は元に復す、日蝕、陰曆に入るときは初め西北より虧て、正北に甚しくして東北に復す、陽曆に入るときは初め西南より虧て、正南に甚しくして、東南に復す、卽ち陽日が陰月の爲め食せらるるとして大に之を戒るむなり。亦孔之醜、日食も月食も自然の現象にして、美にもあらず、醜にもあらず、不祥の兆にも、不吉の兆にもあらざるが、天地人の三才を合一と考ふる漢人より之を見れば其の醜と爲すは亦恠しむに足らず、陰が陽を犯すは卽ち下たる者が上たる者を犯すと爲すなり、女が男を犯すなり、醜の醜たる所以洵とに

明白なり。彼月而微、微は虧なり、虧は食なり、彼の字は間接なれば月の方へ置く、是も漢人の說に月蝕は月望に至れば則ち日月正對して一線の如く、日地下に在り、地球、日光を障隔す、之を照すこと能はず、故に月其の光を失す。漸く地影の外に出れば、則ち日能く之を照して元に復す。月蝕、陰曆に入れば則ち初め東南より虧て正南に甚だしく、西南に復す、陽曆に入れば則ち初め東北より虧て正北に甚だしく、西北に復す。此日而微、今直接の要件は日食にあるを以て、此の字を此に置く、彼此の區別は直接と間接との相違のみ。今此下民、亦孔之哀、已に天變を見る、地異は暫く言はず、人に災害の生ずること必ずあらん、亦孔だ哀しむ所以なり。漢人が月食を嫌はず、日食を嫌ふ所以の理、詩に於て之を證すべし。

日月告凶　不用其行　四國無政　不用其良　彼月而食　則維其常　此日而食
于何不臧

日月凶を告げて、其の行を用ひず、四國政無うして、其の良を用ひざればなり、彼月にして食するは、則ち維其の常、此日にして食せり、于何ぞ臧からざる、

【句釋】告凶、日食は陰が陽を犯したるなり、是れ天、凶を我等に告す也。不用其行、行は日月の運行の度なり。四國は天下一般なり。無政は卽ち良政無きなり。不用其良、賢良を用ひず、何ぞ天下の太平

を望まん。彼月而食、則維其常、月食は月が光を掩はるるものなり、箇は凶事にあらず、是れ常事なり、女は男に從ひ、柔は剛に服し、陽は陰を厭すればなり。此日而食、于何不臧、臧は善なり、吉の字を用ふる處なれど、韻法は之を許さず、臧を以て吉に代ふ、韻法極めて今體に近し。

爗爗震電　不寧不令　百川沸騰　山冢崒崩　高岸爲谷　深谷爲陵　哀今之人
胡憯莫懲

爗爗たる震電、寧からず令からず、百川沸騰して、山冢崒崩す、高岸谷と爲り、深谷陵と爲る、哀しむ今の人、胡ぞ憯んで懲るること莫き、

【句釋】爗爗は電光を形容す、火の盛んなる貌。震電は雷なり。不寧不令、此の電光を見れば、人は安寧令善なる能はざるなり。百川沸騰、電光を言うて、風雨を言はざるも、風雨は自から此の中に在るなり、風雨に伴はざる電光は決して爗爗ならざればなり。百川の沸騰するは白風黑雨の爲めなり。山冢、冢音「チョウ」、訓「ヨカ」丘、「イタダキ」頂なり、今頂の義を取る、從來の本多く冢に作る、今之を正す、崒音「シュツ」、訓「サガシ」崒嵂なり。崩は毀なり、崒嵂たる山冢が白風黑雨の爲めに崩壞せるなり。高岸爲谷、深谷爲陵、高處は深處と變じ、深處は高處と變ずるなり。幽王の年間に有りし事實なるべし。哀今之人、胡憯莫懲、此の如き異變に遭遇しても今日の人卽ち幽王の如き人は、胡ぞ其の非

を改めざるやとなり。憯音「サン」、訓「イタム」痛なり、懲は前度の過を再度せざるの意義、然るに莫懲は再度も三度も戒畏せざるなり。

皇父卿士　番維司徒　家伯冢宰　仲允膳夫　棸子內史　蹶維趣馬　楀維師氏

豔妻煽方處

皇父は卿士、番は維司徒、家伯は冢宰、仲允は膳夫、棸子は內史、蹶は維趣馬、楀は維師氏、豔妻は煽にして方に處れり、

【句釋】皇父は朱子は曰く字なり。陳臥子曰く、氏なり字にあらず。後世、皇甫を氏とする者あり、卽ち皇父の後。是れ或は然らんか。卿士は朱子曰く、卿の士、『周禮』大宰の屬に上中下士あり、『公羊』に所謂宰士、『左氏』に所謂周公蔡仲を以て己が卿士と爲す是れなり、蓋し宰を以て屬して六官を兼總す、位卑うして權重し。番は氏。司徒は官名、地官にして敎化を掌る役なり、周代は司徒の官太師太傅の下に在るが、漢に至りて太尉と司徒と司空を以て三公と稱し、以て周の太師、太傅、太保の三公に比す。家伯は字ならん。冢宰は官名。邦治を掌ると言へば、農商務の事役を爲すものならん。仲允も字なり。膳夫は宮廷の食膳を掌る役ならん。棸子は氏なり。內史は中大夫、爵祿廢置殺生與奪の法を掌る役なりと。蹶も氏なり。趣馬は官名、馬政官なり。楀も氏なり。師氏は官名、亦中大夫、司朝得失の事を掌るもの

なり、以上七人、高官と卑官と同列に在り、而かも皆皇父や司徒と惡事を逞するの輩、一網に打盡したるものと見ゆるなり。豔妻煽方處、陳臥子曰く、妖豔、色を以て言ふ、煽は其の勢の盛んなる、火の煽なる如きを言ふ、方處は方に其の所に居て、其の寵方に固きを言ふ。豐城の朱氏曰く、后妃は內を主る者なり、當に窈窕貞淑を求めて以て君子の配と爲すべし、而るに豔妻を以て之を爲すときは嬖妾の焰熾なり、嬖妾あり以て內を蠱惑し、小人あり以て外を扇亂す、此れ災異の繁興する所以にして亂亡の救ふ莫き所以なり。豔妻は褒姒を指すとの說あり、今遽かに判じ難し。

抑此皇父　豈曰不時　胡爲我作　不卽我謀　徹我牆屋　田卒汙萊　曰予不戕

禮則然矣

抑も此の皇父、豈時ならずと曰はんや、胡爲ぞ我を作かさんとして、我に卽いて謀らざる、我が牆屋を徹て、田卒く汙萊とならん、曰く予戕はず、禮則ち然り矣、

【句釋】抑は前を承て後を發する語なり。此皇父、卿士の皇父なり。豈曰不時、皇父が向の地へ赴むかんとする時、農務正に閒隙の時なるを以て、赴く時の不可を曰ふにはあらずとなり、然るに胡爲我作、自身が赴むくは吾咎めず何故に我等まで作かして徙らしめんとするや。不卽我謀、居を民と共に徙さんとするには是非相議し、利害相謀りて以て己が欲する所を行なはざる可らず、然るに皇父は獨斷にて決

行するを民は怨むなり。徹我牆屋、徹は義を多く有する字、今はスツル除去の一義を取る、從來我が棲慣し屋宅を捨てて己と一所に徙らしむるなり。田卒汙萊、汙は水を停るなり、萊は草穢なり、田を治むるを得ずして、之をして荒蕪せしむるを怨むなり、一年畊かさざる田は翌年畊かすも平年の半作のみ、農人の能く知る所なり。曰予不戕、皇父が民の此言を聞て曰ふなり、予が戕ふ所にあらず。禮則然矣、我汝等を戕はんと欲する心は無し、君徙らば民の之に從ふは禮として普通なりと言ふ。橫暴の言、何人も首肯する能はざるなり。『雕題』曰く、曰予不戕は皇父の曰ふにあらず、民の言なり、言ふこころは民、徹屋汙田の禍を被むり、而かも肯て愬を訴へず、猶ほ云ふ予未だ害あらず、是れ下は上に供するの禮、然らざるを得ざるのみ、豈直ちに禍害無からんや。尤も哀矜すべき所なり、下章の黽勉從事、不二肯告一勞と相照す、今謂ふ若し之を民言と言はば我が牆屋を徹つとか、田卒く汙萊すとは言はざるなり。余は朱子及び王臨川に從つて『雕題』に從はず。

皇父孔聖　作二都于向一　擇二三有事一　禀侯多藏　不二憖遺一老一　俾二守我王一　擇二有車馬一　以居徂向

皇父孔だ聖なりとして、都を向に作る、三有事を擇ぶに、亶に侯藏を多くす、憖く一老を遺して、我が王を守ら俾ず、車馬有るを擇んで、居を以て向に徂かしむ、

【句釋】皇父孔聖、作都于向、天子の住する所を京都と曰ふ、天子以外に都を以て稱するを得ず、然るに皇父は自から孔だ聖なりと稱し、居を向に徙して都と稱す。『周禮』に畿內の大都方百里、小都方五十里、皆天子公卿の封ずる所、然りと雖も聖は容易に稱するを得ず、彼は聖と稱す、都は卽ち大都の意味ならん、向は今日の河南省懷慶府孟縣の地是れなり。『左傳』、桓王、鄭に十二邑を與ふ、向其の中に在り、則ち向は東都に在り、（東都ハ今日河南省河南府）西鎬を去ること千里にして遙かなり。擇三有事、三人の政事に力を有する者を擇ぶなり、三卿を用ふるは侯以上のみにして、臣は二人以上を用ふるを得ず、然るに皇父は此三卿を置き、列國の諸侯に擬す、而して此三人は何者ぞ。亶侯多藏、亶は信なり、侯は維なり、多藏は富有なるなり、所謂金權を有する小人にして位や德は全く無き徒輩なり、金力にて皇父に取り入し者なり。不憖遺一老、俾守我王、憖は音「ギン」、訓「ナマジヒニ」、「シバラク」且なり、普通の人間ならば己が向に徙るに就ては中京に於て王が定めし不便ならん、故に一人位は老人を遺して以て王を守らしめん、然るに皇父は此の如きことを爲さざるなり、憖は心に誠實あつて爲すにあらず、他の批難を畏れて强て爲す時の字なり、然るに皇父は其れすらせざるなり。九字を以て一讀法とす。擇有車馬、此の意は極めて富有な者を多く擇んで移住することを言ふ。以居徂向、以て向に居住せしめんとして車馬を多く有する者を徂かしむとなり、今日の批評家に言はしめば、前後矛盾を議すべし、前章に於ては我等が牆

屋を撤去し、田は荒蕪に歸せしめしを怨み、而して此の章に於ては富有の者のみ擇んで徂かしむと。是に於て乎言ふ、詩は一章毎に其の感情を發露すれば足る、必ずしも文章の如く脈路を求めて前後左右を探索せず、胸中の義を知らざる者は詩を解する資格無きものなり。

黽勉從事　不冒告勞　無罪無辜　讒口囂囂　下民之孽　匪降自天　噂沓背憎

職競由人

黽勉として事に從ひ、冒て勞を告げず、罪無く辜無けれども、讒口囂囂たり、下民の孽ひは、天より降るにあらず、噂沓背憎、職どり競むること人に由れり、

【句釋】黽勉、黽は蛙の屬の名、名詞を動詞に轉じて「ビン」と訓む、乃ち力の堪へざる所、心の欲せざる所、而かも勉强して之を爲すが黽なり、閔に作り敏に作る共に妨げず。從事、不冒告勞、我が作す事を作し、皇父に向つて勞苦を告示せず。無罪無辜、罪と辜との區別如何、法を犯して罰を得るが罪、罪を犯して應に死すべきが辜、乃ち罪は輕く、辜は重し、蓋し、單に罪辜と熟語するときは同一義なり、一字離して用ふるときは、上の如し。讒口囂囂、事實にあらずして、乙の爲めに甲に惡し樣に告げらるを讒口と云ふ。囂囂は多人數にて言ふ。下民之孽、匪降自天、孽は音「ゲツ」『說文』に庶子なり、妾隷の子を孽と曰ふ。罪あるの女、沒廢して之を役ふのみ、幸を君に得、生む所あり。木既に伐つて枿を

生ずるが故に文に於て子薛を孽と爲す、孽は辜（辜ト同ジ）なり、漢人が如何に正室を尊んで側室を陋とせしかは想像に餘りあり、「ワザハヒ」と訓するに至りては愈よ以て極まれり。民の孽は天之を降したるにあらず、皆讒口の致す所なり。噂沓は噂噂沓沓然たるなり、多人數が聚合して讒口を吐くなり。喈喈と記せば分明なり。背憎、順ずれば愛し、背けば憎む、昨日の順愛、今日の背憎と爲る、小人愚民の常態古今異ならず。職競上の如き事を主とし、上の如き事を勉むるが小人なり、我の孽を被むるは此等の人に由てなり、竟に天の所爲にあらざるなり。『說通』曰く、當時徙す所、必ず大家巨姓にして、皇父左右す、厠養の子に非るときは、嬖幸の人なり。

悠悠我里　亦孔之痗　四方有羨　我獨居憂　民莫不逸　我獨不敢休　天命不徹　我不敢傚　我友自逸

悠悠たる我が里、亦孔だ之痗し、四方羨り有れども、我獨り憂に居れり、民逸しまずといふこと莫し、我獨り敢て休はず、天命徹しからず、我敢て傚はず、我友の自から逸しむには、

【句釋】悠悠は憂なりと朱子注せり。悠悠なるが故に憂ふるにて、悠悠其のものが憂にはあらず。我里、徒らざりし前の故里なるや、今日の居處を指すやは不明なるも、今日の居處と定めて可なるが如し。亦孔之痗、痗は音「バイ」訓「ヤム」病なり、四方有羨、羨は餘なり、餘財ある人を言ふ。我獨居憂、他人

屋を撤去し、田は荒蕪に歸せしめしを怨み、而して此の章に於ては富有の者のみ擇んで徂かしむと。是に於て乎言ふ、詩は一章毎に其の感情を發露すれば足る、必ずしも文章の如く脈路を求めて前後左右を探索せず、胷中の義を知らざる者は詩を解する資格無きものなり。

黽勉從事　不冐告勞　無罪無辜　讒口囂囂　下民之孽　匪降自天　噂沓背憎
職競由人

黽勉として事に從ひ、冐て勞を告げず、罪無く辜無けれども、讒口囂囂たり、下民の孽ひは、天より降るにあらず、噂沓背憎、職どり競むること人に由れり、

【句釋】●黽勉、黽は蛙の屬の名、名詞を動詞に轉じて「ビン」と訓む、乃ち力の堪へざる所、心の欲せざる所、而かも勉强して之を爲すが黽なり、閔に作り敏に作る共に妨げず。●從事、不冐告勞、我が作す事を作し、皇父に向つて勞苦を告示せず。●無罪無辜、罪と辜との區別如何、法を犯して罰を得るが罪、罪を犯して應に死すべきが辜、乃ち罪は輕く、辜は重し、蓋し、單に罪辜と熟語するときは同一義なり、一字離して用ふるときは、上の如し。●讒口囂囂、事實にあらずして、乙の爲めに甲に惡し樣に告げらるを讒口と云ふ。囂囂は多人數にて言ふ。●下民之孽、匪降自天、孽は音「ゲツ」『說文』に庶子なり、妾隷の子を孽と曰ふ。罪あるの女、沒廢して之を役ふのみ、幸を君に得、生む所あり。木既に伐つて枿を

生ずるが故に文に於て子蘖を孽と爲す、孽は辜（辜ト同ジ）なり、漢人が如何に正室を尊んで側室を陋とせしかは想像に餘りあり、「ワザハヒ」と訓するに至りては愈よ以て極まれり。民の孽は天之を降したるにあらず、皆讒口の致す所なり。●噂沓は噂噂沓沓然たるなり、多人數が聚合して讒口を吐くなり。喈喈と記せば分明なり。●背憎、順ずれば愛し、背けば憎む、昨日の順愛、今日の背憎と爲る、小人愚民の常態古今異ならず。●職競上の如き事を主とし、上の如き事を勉むるが小人なり、我の孽を被むるは此等の人に由てなり、竟に天の所爲にあらざるなり。『說通』曰く、當時徙す所、必ず大家巨姓にして、皇父左右す、厠養の子に非るときは、嬖幸の人なり。

悠悠我里　亦孔之痗　四方有羨　我獨居憂　民莫不逸　我獨不敢休　天命不徹　我不敢傚　我友自逸

悠悠たる我が里、亦孔だ之痗し、四方羨り有れども、我獨り憂に居れり、民逸しますといふこと莫し、我獨り敢て休はず、天命徹しからず、我敢て傚はず、我友の自から逸しむには、

【句釋】●悠悠は憂なりと朱子注せり。悠悠なるが故に憂ふるにて、悠悠其のものが憂にはあらず。●我里、徙らざりし前の故里なるや、今日の居處を指すやは不明なるも、今日の居處と定めて可なるが如し。●亦孔之痗、痗は音「バイ」訓「ヤム」病なり、●四方有羨、羨は餘なり、餘財ある人を言ふ。●我獨居憂、他人

は餘財あり、我は然らず是を以て憂に居す。先儒曰く、我獨り貧しと云ふにあらず、唯困窮に居るを憂ふと。或は然らんも、下の句の逸の字より見れば、貧を憂ふと見て文意當るが如し。民莫不逸、我獨不敢休、他人皆逸豫し、我獨り勞苦す。天命不徹、徹は均、天命を承ること我と彼と均しからずとなり。我不敢傲、我友自逸、他人の餘財あり、且逸豫するを見るも、我は傲はず、傲はざる所以は人各の天命を承くればなり、我が友は我が友の天命に隨從して逸豫せよとなり。上章には匪降自天と言ひ、此の章には天命不徹と言ふ、前後矛盾するに似たり、而かも此の矛盾する所が詩人の詩人たる所以、理學者の知る所にあらず、我不敢傲我友自逸と點して八字の句と爲すも可。顧氏曰く、詩の八字なるものは此の句と十月蟋蟀入我牀下とのみ。『雕題』は是の說を是とす。余は本文の如くに點して、而かも意味は此の一讀法に在るなり。

【評論】十月之交は八章八句を以て成る。一章二章は天變の詩、三章は地異の詩、四章は人に就て皇父一人の事を敍し、五章以下彼に就て我の憂懷を敍す、秩序整然として紊れず、後世葩詩を學ぶ者の規範とすべきなり。

浩浩昊天　不駿其德　降喪饑饉　斬伐四國　昊天疾威　弗慮弗圖　舍彼有罪

既伏其辜　若此無罪　淪胥以鋪

浩浩たる昊天、其の德を駿にせず、饑饉を降喪して、四國を斬伐す、昊天疾威にして、慮らず圖らず、彼の罪あつて、既に其の辜に伏せるを舍かん、此の罪なきが若きも、淪胥以て鋪し、

【句釋】浩浩は廣大の貌。昊天も亦廣大の天の意。不駿其德、駿は大なり、德は惠なり、其の惠を大にするときは世上に不幸は無きなり。降喪饑饉、降も饑も饉も意義明白、饑は米粟の實ざるなり、饉は菜蔬の乏しきなり。喪の意義は何ぞ、朱子の注に不大其惠、降此饑饉とあり。中村惕齋は曰く、死喪饑饉の災を降して云云。二說共に窮したる解なり、今謂く降喪は下の斬伐と字を對す、是の故に斷じて此の字を以て解すべからず。降シ喪シと斬リ伐ツと對せざる可らず。故に今解す喪は亡又は失なり、亡は終るなり、饑饉を降し終るなり、徹底的に饑饉なるを言ふ。此の如く解せざれば詩意全く失す。朱子の此字を以てしたるは是れ全く謬なり。斬伐四國、此の斬伐は人の所爲にあらずして、天の所爲なり。昊天は詩多く秋天に用ふ、旻は閔なり、「アハレム」なり、仁下を覆ひ憫む、之を昊天と曰ふ。秋天に用ふるは秋は五穀實ればならん。疾威は猶ほ暴虐と言ふが如し、人を閔むが天の德なるに今は反對に此の暴虐を爲す。弗慮弗圖、天が此の如きは、嗚乎慮ざりき、嗚乎圖ざりきなり。舍彼有罪、既伏其辜、舍は置なり、有罪なる者が辜に伏し、誅戮せらるるは當然なれば、此の事は我が訴ふる所にあらず、故に舍

て置くが、との意なり、而かも若此無罪、無罪の者まで疾威を被むるは如何と怨むなり。淪は陷と同じ。胥は相と同じ、淪胥は相與に溺れ沈むことなり。鋪は徧と同じ。有罪無罪平等に淪胥するは是れ良とに怨むべし、怨を人に訴へずして天に訴ふ、此の章の意彰彰たり。

局宗既滅　靡所止戾　正大夫離居　莫知我勩　三事大夫　莫肎夙夜　邦君諸侯
莫肎朝夕　庶曰式臧　覆出爲惡

周宗既に滅ぶ、止まり戻まる所靡し、正大夫離居して、我が勩を知ること莫し、三事大夫も、肎て夙夜すること莫し、邦君諸侯も、肎て朝夕すること莫し、庶がつて式臧と曰へば、覆出して惡を爲せり、

【句釋】周宗は猶ほ周家と言ふが如きなり。既滅、靡所止戾、古訓には「既ニ滅ビントス」とあるも、今は滅ぶと斷ず、既と將とは字義異なるなり、既は過去に屬する字なり、現在と未來には關係なし、近時支那の羅氏が既の字義を解して曰く、人が熟食に背き立つて居るなりと、最早終りたるなり。周の名はあるも實無ければ滅ぶと斷ずるなり。然らば人が止戾する所靡きなり、戻を朱子は定なりと注す甚だ可。戻は身の曲戻するなりと『說文』にあり、身を曲げて容る處、卽ち棲家を言ふ。朱子の定と訓す其の據る所正し、蓋し後世は和の反對、卽ち乖戻、反戻、罪戻等の使用が多し。徂徠曰く、戻を定と訓ずるは格別のことなりと。徠翁も本原の意義に氣が付かざりしものなり。正大夫離居、正は長官なり、

大夫の長官なり、饑饉を以ての故に東西に離居するなり。莫知我勩、勩音「エイ」、訓「ツカル」疲勞なり、正大夫が知らずとせば又如何する。三事大夫、此の四字は三事卽大夫であるか、三事及大夫であるか。朱子曰く、三事は三公なり、大夫は六卿及び中下の大夫なり。徐安道曰く、周官に三事暨大夫と曰ふは三公及び大夫を擧ぐるなり。嚴粲も亦此の見を有す。『雕題』曰く『尙書』の立政に曰く任人、準夫、牧、三事を作す、任人は事に任ずるの公卿を謂ひ、準夫は法を守るの有司を謂ひ、牧は牧民の長を謂ふ、三事大夫は三事を宅くの諸人を指す。『傳』に三事を以て三公と爲す、大夫を別項と爲す、竝に非なり。『雕題』は『書』の文言を略取したるに過ぎざるが、此の說を以て可とすべし。莫肎夙夜、夙は曉天、大夫既に朝參せざるなり。邦君諸侯、莫肎朝夕、邦君は卽ち諸侯、諸侯は卽ち邦君なり、朝見も夕見もせず、周室の衰ふること知るべし。豐城の朱氏曰く、臣に離散の心あり、人臣の義、君と休戚を同うする者あり、國と休戚を同うする者あり、君と同うする者は、君憂ふるときは其の憂を同うし、國と同うする者は、國亡ぶときは之と其の亡を同うす、正大夫離居すと曰ふときは、特に國と休戚を同うする者無きのみならず、亦君と休戚を同うする者無きなり、然れども衆人皆去て、己獨り居るときは、衆人皆逸し、而して己獨り勞す、黽勉從事の功ありと雖も、孰か之を知らんや、大夫は官守ある者なり、而して肎て夙夜する無し、諸侯は民社ある者なり、而して肎て朝夕する無し、則ち未だ離居するに至らざるも、

已に其の責に任ずるものあらず、敗亡の兆、此に卽て見る可し。庶曰式臧、此の詩を作る人、大夫も諸侯も庶ふ其の道を臧くせんことをと。覆出爲惡、覆は反覆、益す以て惡を爲すとなり。周の東遷以後の詩なること明明白白なり。

如何昊天　辟言不信　如彼行邁　則靡所臻　凡百君子　各敬爾身　胡不相畏

不畏于天

如何ぞ昊天、辟言信ならず、彼の行き邁きて、則ち臻る所靡きが如し、凡そ百の君子、各の爾の身を敬せよ、胡ぞ相畏れざる、天を畏れざるなり、

【句釋】如何昊天は天を呼び出して以て我が情を訴ふるなり。辟言、辟は法なり理なり。不信、所謂人が憲法を信ぜざるなり。如彼行邁、則靡所臻、此の八字は一氣讀とす。如字下の臻を貫くなり、身の落處無きを言ふ、身の窮極するを言ふ、或は言ふ人の放恣にして反ることを忘る、我其の至る所を知らざるが如し、憲法信ぜられざる上に就て言ふことなれば、其の意義は大底察せらるるなり。凡百君子、君子は三事大夫の位に在る者を指す、羣臣を指すと見ても可なり。各敬爾身、各は百の字に對す、百の君子、各自に爾の身を自敬せよ、自敬せざるが故に、王に其の不敬を及ぼすに至るなり。胡不相畏、各の爾の身を敬するは、偖ち是れ相畏れて放逸ならざればなり、君子畏るるものは天下に無し、唯畏るる者

は父母と國王と天命とのみ、然るに今爾の身を敬せざる大夫等は、不畏于天、天命を畏れざるなり、天を畏れざる者、何ぞ君父を畏れん、夙夜匪懈の誡を竭し、朝夕惟寅の節を盡すが臣の職分、今君臣の分を守らず、詩人の痛嘆する所以なり。

戎成不退　饑成不遂　曾我蹔御　憯憯日瘁　凡百君子　莫肯用訊　聽言則答

譖言則退

戎成りて退かず、饑成りて遂からず、曾て我が蹔御、憯憯として日に瘁みぬ、凡そ百の君子、肯て用て訊ぐること莫し、言を聽くときは則ち答ふ、譖言すれば則ち退く、

【句釋】戎成不退、朱子曰く、兵寇已に成て、王の惡を爲すこと遏ず。張氏曰く、兵勢已に成て、復退ぞかざるなり。張氏の說は是にして朱子は非なり。饑成不遂、朱子曰く、饑饉已に成て、王の善に遷ること遂まざるなり。張氏曰く、饑歲已に成て、民生遂からざるなり、朱子非にして、張氏是なり。朱子は詩に重きを措かずして、敎に重きを措くが故に此の如き解を爲すのみ。朱子を奉ずる人は朱子の說を是と見るべし。曾我蹔御、蹔は蝶に同じ侍なり、王に隨從する侍人の事なり。舊板本蹔に作る誤なり。憯憯は憂ふる貌。日瘁、瘁は病なり、我等侍御の者をして、日に心痛以て瘁しむるに至る。凡百君子、莫肯用訊、兵戎は退かず、饑饉にして民遂らざるに於て蹔御の者は王の爲めに之を憂ふるも、羣臣大夫の

多くは是の事を以て、王に告訊する者莫きなり。訊は誶に作るべしとの説あり、韻法より之を正しとす。

聽言則答、偶ま王が此等の羣臣に時代の如何を聽くことあらば、答へざるを得ざるを以て答ふるも、譖言則退、譖は譖愬にて訴ふなり、讒譏なり、他人が旁より彼等の言に就て兎角譖言するときは、答辯せずして則ち退くなり。劉須溪曰く、聽言則答、譖言則退、八字臣下墮落の態を極む。朱豐城曰く、聽言則答は君に告ぐるに其の誠を盡さざるなり。譖言則退は身を引いて其の禍を遠避するなり、斯の人や君を愛すること身を愛するの厚きに如かず、國を憂ふること家を憂ふるの深きに如かず、其の自から計を爲すことは得たり、君臣の大義を以て之を責めば能く愧づること無けんや。

哀哉不能言　匪舌是出　維躬是瘁　哿矣能言　巧言如流　俾躬處休

哀しい哉言ふこと能はず、舌是れ出すに匪ず、維躬是瘁めり、哿矣能く言ふこと、巧言流るる如くして、躬をして休きに處せしむ、

【句釋】哀哉不能言、其の言ふことや、誠であるか、譌であるか、世上の愚徒解する所にあらず、是を以て忠誠者は言ふ能はざるなり、言んと欲して能はず、哀む所以なり。匪舌是出、愚徒の言ふ所、三寸の舌に在り、誠者の言ふ所、肺肝より出づ、三寸の舌頭より出るにあらず。維躬是瘁、言はんと欲して言ふ能はず、躬をして瘁しむるに至る。哿矣、哿は嘉と同じ。能言、三寸の舌頭を動かすの徒、肺肝と

何等の交渉なし。巧言如流、能は訥の反對、巧は拙の反對、上手に饒舌ことを巧言と云ふ、其の言を巧好にし、水の流の如く凝滯する所無きなり。俾躬處休、眞の君子は退けば躬を休に處するも、仕へては決して躬を休に處せず、鞠躬盡悴日夜國家の爲めにす、然るに佞人は仕へつつ躬を休に處せんと欲す。畢竟は暗君の罪なるも、彼等佞人は亦以て憎むべきなり。詩人の之を哀しむ所以なり。顧氏曰く、讀で此の末章に至り、唯之を責むるの意を見ざるのみならず、幷に去る者に代つて嘲を解くに似たり、愈よ遠くして愈よ近く、愈よ婉にして愈よ切なり、立言の妙此に至る。

維曰于仕　孔棘且殆　云不可使　得罪于天子　亦云可使　怨及朋友

維曰く于いて仕へんと、孔だ棘かにして且殆し、使ふ可からずと云ふは、罪を天子に得、亦使ふ可しと云ふは、怨朋友に及ぶ、

【句釋】維曰于仕、此に一人あり、于て王に仕んと曰ふ。孔棘且殆、棘は急なり、殆は危なり。云不可使、得罪于天子、亦云可使、怨及朋友、此の四句の解釋は見方に依て二樣となる。一は云の字を第三者に與へて見るなり、人が仕んと曰ふに依て、此の人に向つて其れは危殆なりと言うて、是を抑止するときは、天子に對して我は不忠となる、亦仕ふるが可と首肯するときは、怨を朋友に買ふととなる、此の人天子の爲めとなれば、小人輩の邪厲、小人輩の爲めとなれば、天子の爲めとならず。二は天子に向つ

て彼の者は使役すべき人間にあらずと云ふときは、天子が用ひんと思ふ者を阻止するが故に罪を天子に得、亦彼に向つて使役せらるるが可と云ふときは、朋友等に怨まるることとなる。蓋し一一字の上に就て論せざる時は朱子の如く輔氏の如く解釋するを以て可とす。曰く人往て仕ふることを曰ふ、而かも仕の急にして且危きを知らず、何ぞや、道を直うして盡言する者は罪を其の君に得、巧言以て人に徇ふ者は其の友に怨る、蓋し朋友は相切磋するを以て道と爲す、若し道を枉て以て君に從ふときは、朋友に必ず棄絕せらる、是れを以て之を言ふときは、當時の仕、又豈爲し易からんや、忠言罪を得、巧言休に處し、直道抑へられ、枉道容れらる、皆亂世の事なり。此の章の眞解は後賢の叱正を乞はんと欲す。『雕題』曰く、予仕は實に人あるにあらず、人を設けて以て言を發するのみ。實でも設でも非常なる異無し、深く是非せず。

謂爾遷于王都　曰予未有室家　鼠思泣血　無言不疾　昔爾出居　誰從作爾室

爾に王都に遷れと謂ふ、曰く予未だ室家あらず、鼠思泣血して、言疾からずといふこと無し、昔し爾の出でて居りしとき、誰か從つて爾の室を作れる、

【句釋】謂爾遷于王都、曰予未有室家、曾て離居せし者に向つて爾は王都に遷り玉へと謂ふなり。其の離居せし者の曰く、予王都に遷るとするも、予は未だ室家卽ち一家を成さざるの故を以て之を謝す。鼠

思は癙憂なり、古字は簡にあり、癙の正字卽ち鼠なり、癙音「ショ」、訓「ウレフ」憂なり、憂幽なり、鼠病を憂るときは穴內に在て人の知らざる所なり。泣血は哭泣なり、聲を出さずして泣く也。無言不疾、言を出せば愉快なる言を出す能はずして唯疾しき言のみなり。昔爾出居、誰從作爾室、爾は今室家無しと言ふが、昔し爾が住したるとき、爾の室家は誰が作りしぞやと、遷を勸める者が反問するなり。

【評論】雨無正は七章、二章は十句、二章は八句、三章は六句を以て成る。此の詩の首句を取て題とせば、浩浩昊天と題せざるべからず。然るに『集傳』に雨無正と題せり、今姑らく從がふ。朱子曰く、歐陽公曰く、古の人、詩に於て多く命題せず、而して篇名、往往義例無し、其の或は名を命ずる者、則ち必ず詩の意を述ぶ、巷伯常武の類の如き是れなり。今雨無正の名、『序』の言ふ所に據るに、詩と絕に異なる、當に其の疑ふ所を闕くべし。元城の劉氏曰く、嘗て韓詩を讀むに雨無極の篇あり。序に曰く、雨無極は正大夫、幽王を刺るなり、其の詩の文に至りては、則ち毛詩に比するに、篇首に雨無三其極一傷三我稼穡一の八字を書す。愚案ずるに劉說理あるに似たり。然れども第一二の章、本皆十句今遽かに之を增すときは、長短齊しからず、詩の例にあらず。又此の詩實に正大夫離居の後、暫御の臣の作る所にして、其の正大夫、幽王を刺ると云ふは、亦是にあらず。且其の幽王の詩と爲すも亦未だ考ふる所あらず。顧氏曰く、案ずるに此の正大夫離居之後の二句を觀るときは、大全豐城朱注、「冒て夙夜朝夕すると莫し、

必ずしも皆離居の者と爲さず」と謂ふ、其の說甚だ是なり。亦必ずしも俗家、詩柄を執定するが如きにあらず。去らざる者、去るを責め、優ち朝を擧げて遂に一人無しと謂ふなり。通篇亦惟末章のみ、正しく離居する者に對して說く。敬身用訊等は、尙冒て夙夜朝夕する莫き一輩に對して說く。詩柄亦是れ後人の補撰なれば、須らく看ること活動すべし。祈父の什、十篇六十二章四百二十六句終る。

小旻の什二の五

旻天疾威　敷于下土　謀猶回遹　何日斯沮　謀臧不從　不臧覆用　我視謀猶亦孔之邛

旻天疾威、下土に敷けり、謀猶は回に遹めり、何れの日か斯沮まん、謀の臧きには從はず、臧からざるをば覆つて用ふ、我謀猶を視るに、亦孔だ之邛し、

【句釋】旻天疾威の意義は前に辨せり。敷于下土、上天に對して下土を言ふ、國中を喪亂ならしむるを言ふ。謀猶は二字共にハカルなり、猶は猷と同じ、圖るなり、猶は元來獸名なり、疑慮多し、每に人の聲を聞て輒ち木に登る、人無うして後下る、須臾にして又上る、此の如くなること一にあらず、故に決せざるを猶豫と曰ふ、猿の一種なり。回は邪、遹は僻、邪謀の徒に惑うて王が覺る時無きなり。遹音「イツ」、訓「クルフ」狂「ヨル」自「シタガフ」循「ヒガム」僻、今僻の義を取る。何日斯沮、沮は止なり遏なり、旻天の疾威、此の饑饉喪亂は何れの日にか沮んとなり。謀臧不從、謀の善なるは反て從はず。不臧覆用、不善は覆て用ふ。我視謀猶、我は此の詩を作る人。亦孔之邛、邛音「キヨウ」、訓「ヤマシ」病なり。朱子曰く、王、大夫の爲め惑うて、善に從ふ能はず、不善者に從ふ、故に我視て以て甚だ病む

と。『雕題』曰く、是の章の意、天方に禍を降して、下民窮厄せざるは莫し、是の時に當りて、當に深慮遠猷、天意を回らし斯民を救ふべきを謂ふなり、而して王の謀猶邪僻、其の止まる所を知らずと謂ふは深く疑ふべきのみ。『雕題』強て此の如き說を爲す、詩意に反て遠ざかるを知らざるなり。

滃滃訿訿　亦孔之哀　謀之其臧　則具是違　謀之不臧　則具是依　我視謀猶

伊于胡底

滃滃たり訿訿たり、亦孔だ之哀し、謀の其れ臧きは、則ち具に是れ違ひ、謀の臧からざるは、則ち具に是れ依る、我謀猶を視るに、伊于に胡ぞ底らん、

【句釋】滃滃は水の流るる聲の形容が根本、今以て和する貌とす。訿訿は不善なり毀るなり、順ずる時は和し、違する時は毀る、小人を言ふ。亦孔之哀、哀しむ者は小人外の詩人なり。謀之其臧、則具是違、謀の善なるは小人之に從がはざるなり。謀之不臧、則具是依、謀の不善なるは小人之に從がふなり。前章の謀臧不從と不臧覆用と意義同じ、前章は王を主とし、此章は小人を主とす。我視謀猶、伊于胡底、上の如きを以て小人の態とす、何れの日か其の定まり至るものあらんや、底は至なり。

我龜既厭　不我告猶　謀夫孔多　是用不集　發言盈庭　誰敢執其咎　如匪行邁謀　是用不得于道

我が龜既に厭きぬ、我に猶を告げず、謀夫孔だ多し、是を用て集らず、言を發して庭に盈つ、誰か敢て其の咎を執らん、行邁に匪ずして謀るが如し、是を用て道に得ず、

【句釋】我龜既厭、龜は龜卜、卽ち卜筮なり、既厭、數する我は厭かざれども神既に厭くなり。不我告猶、神は我に曾て吉凶共に告げざるなり、其の占ふ所、一も中ること無し。謀夫孔多、是用不集、『易』に曰く、再三すれば瀆る、瀆るるときは告げず。神既に我に告げず、人に謀るの止むを得ず、而かも謀夫は多しと雖も、決斷すること能はず、則ち議論の定まらざるに惑ふ。是を以て就る有る能はざるなり。發言盈庭、誰敢執其咎、謀夫孔だ多きは發言の庭に盈る所以なり、然も事中れば可なり、中らざれば咎を受けん、其の咎を執るを畏れて眞實を言ふ者無し、直言する者無きなり、王の明睿を缺くが此の總ての原因を爲す、而も王は之を知らざる也。如匪行邁謀、是用不得于道、朱子曰く、行かず邁かずして坐ながら適く所を謀るが如し、之を謀ること審らかなりと雖も、亦何ぞ道路に得んや。後世の語に陸上の水練、爐頭の兵講あり、此等の詩より來る語とす。

哀哉爲猶　匪先民是程　匪大猶是經　維邇言是聽　維邇言是爭　如彼築室于道謀　是用不潰于成

哀しい哉猶を爲す、先民に是れ程るにあらず、大猶を是れ經とするにあらず、維邇き言是れ聽き、維邇

き言是れ爭ふ、彼の室を築かんとして道に謀るが如し、是を用て成るに潰げず、

【句釋】哀哉爲猶、是れ亦上章の意を承て言ふ、何程謀を爲すも皆惡謀、詩人是を以て哀哉と歌ふ。匪先民是程、民は人を代表す、先民は卽ち先賢なり、程は程法、今先賢の程法に據らざるを哀しむ。匪大猶是經、猶は猷なり道なり、大猷は卽ち古聖の道なり、經は經緯、古聖の敎へし經緯なり、此の經緯にも據らざるを哀しむ。維邇言是聽、眼前小人輩が云爲する言をのみ聽き、維邇言是爭、此の眼前の小人輩の云爲する言に就いて爭ふ。如彼築室于道謀、我が室を築かんと欲するに何の關係なき路旁の人に就いて謀るが如しとなり。是用不潰于成、潰は「トグル」遂なり。徐光啓曰く、如彼築室于道謀は韓退之が衣食于奔走の祖とする所、盤庚殺二越人于貨一亦同じ。

國雖靡止　或聖或否　民雖靡膴　或哲或謀　或肅或艾　如彼流泉　無淪胥以敗

國止まること靡しと雖も、或は聖或は否、民膴きこと靡しと雖も、或は哲或は謀、或は肅或は艾、彼の流泉の如く、淪胥以て敗れしむること無かれ、

【句釋】國雖靡止、止は定。朱子曰く、國論定らざるなり。『雕題』曰く、國事無章を謂ふ、『雕題』を以て是とす。或聖或否、或は聖人あり、或は否卽ち愚人あり。民雖靡膴、饑饉頻りに至りて戶口虛耗するの謂ひなり、膴は韓詩に腜に作る、無幾と義同じ、膴は大と多との二義を帶ぶ。或哲或謀、或肅或艾、

哲人あり、謀士あり、肅者あり、艾士あり。『六帖』曰く、貌恭しきときは、氣象嚴整、頑を警れ懦を起しむ、故に肅なり、言從ふときは令行はれ人順ず故に艾なり、視明らかなるときは知見徹す故に哲なり、聽聰なるときは多く聞て善斷ず故に謀なり、睿は微に通ず、微に通ずるときは通せざるもの無し故に聖なり、五事の德、王如し之を用ふるときは聖者は以て啓沃を資す可し、哲者は以て論思を識る可し、謀者は以て計議を集む可し、而して肅者艾者以て威儀を範し顧問に備ふ可し。『洪範』に貌と言と視と聽と思との五德を說く、此の聖と哲と謀と肅と艾は卽ち是れに當る。如彼流泉、無淪胥以敗、上の如き五德の人は國の寶なり、然るに亂世に遭遇して、愚者と同一に淪胥するは遺憾言ふ可らず、是を以て流泉の如く、一度流れて回らざると同じく、敗沒せしむる無かれと、亂世賢愚同一穴なるは哀むべし、而して特に賢者を惜むなり。

不敢暴虎　不敢馮河　人知其一　莫知其他　戰戰兢兢　如臨深淵　如履薄冰

敢て暴虎せず、敢て馮河せず、人其の一を知つて、其の他を知ること莫し、戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄冰を履むが如し、

【句釋】不敢暴虎、暴虎は徒手にて虎を打つなり、千人中一人は或は空拳徒手にて虎を搏する者もあらん、九百九十九人は到底虎を搏する能はず。不敢馮河、馮河は徒涉卽ち舟に乘らずして河を涉るなり、

是れ亦容易なることにあらず。人知其一、莫知其他、暴虎せず馮河せざることは、聖人にあらざる人も知る、蓋し唯其の一を知るのみ、其の他の大問題、所謂國家興亡の事に就ては知ること莫し。戰戰は恐るる貌。兢兢は戒しむる貌。如臨深淵、戰戰と恐るるは卽ち深淵に臨むが如くす、墜落せんことを恐るるなり、兢兢と戒しむるは、如履薄氷、陷溺せんとを恐るるなり。國家を憂ふるの詩人、衆人の憂の及ぶ能はざる處に於て之を憂ふ。詩人忠厚の旨、此等の詩に於て亦其の一端を知る可きなり。

【評論】小旻は六章、三章は八句、三章は七句を以て成る。『朱注』に曰く、蘇氏曰く小旻、小宛、小弁、小明の四詩皆小を以て篇に名く、其の小雅たることを別つ所以なり。其の小雅に在る者、之を小と謂ふ、故に其の大雅に在る者、之を召旻、大明と謂て、獨宛弁闕く、意ふに孔子之を刪りしならん、其の大を去ると雖も、其の小なる者、猶ほ之を小と謂ふ、蓋し卽ち其の舊を用ふるなり。

宛彼鳴鳩　翰飛戾天　我心憂傷　念昔先人　明發不寐　有懷二人

宛たる彼の鳴鳩、翰ち飛んで天に戾る、我が心憂傷す、昔の先人を念ふ、明發まで寐ねられず、二人を懷ふことあり、

【句釋】宛は宛宛として轉ずる貌。鳴鳩は字の如く鳩が鳴く也、朱子は鳩の名詞の如く解して斑鳩なりと云ふ。『雕題』に笑はるる所以なり。翰は羽なり、戾は至なり、羽を搏て飛ぶなり。我心憂傷、鳩は飛で天に戾ることを得、我は能はず、依然として危亂の世に處す、憂傷する所以なり。念昔先人、既に逝きて世に亡き家大人を言ふ。明發は明の發する時、乃ち明曉と同じ。不寐、有懷二人、人の夜熟眠するは意に關すること無ければなり、聊かも意に關することあらば寐られざるが尋常なり、此の詩の作者は二人卽ち父と母とを懷うて一夜寐ざりしなり。

人之齊聖　飲酒溫克　彼昏不知　壹醉日富　各敬爾儀　天命不忒

人の齊聖なる、酒を飲むとも溫にして克てり、彼の昏うして知らざるは、醉を壹らにして日に富し、各の爾の儀を敬しめ、天命又せず、

【句釋】人之齊聖、齊肅聖明なる人。飲酒溫克、酒は醉ふべき物なり。聖人も賢者も愚者も生理上異なるべき理無し。然るに齊聖なる人、之を飲んで猶ほ能く溫然として克己の志を失はざるは、畢竟其の量を超えざればなり、量の多少に依て然るのみ、他に何等の理由あるなし。彼昏不知、昏昧にして無知なる人と惕齋解せり、是れ然らず、齊聖の反對であるから、酒を飲み昏惑して前後自他を知らざる人を言ふ、生來無知なる人を言ふにあらず。壹醉日富、壹は專なり、富は多量に飲むなり、終日飲酒三昧の人、此の如き人に齊聖を求む、亦難からずや。各敬爾儀、天命不忒、兄弟互に相戒しめて各の爾の風

儀を敬しめよと言ふ。朱子曰く、天命已に去は、將に復來らざらんとす、以て恐懼せざるべからず。『雕題』曰く、天命は人人の禍福上に就て言ふ、受る所の命を謂ふにあらず。朱子の語中、禍福上の事含まざるにはあらず、但泛に天命を解したるのみ、破する所以を見ず。是に由て之を觀るに、後世唐代に曠世の詩人出世す、一は李白、一は杜甫とす、此二詩聖共に酒を好む、一は飲んで天下を雄視し、眼中王公貴人有ること無し。一は飲んで國家を慨慷し、皇上を思うて止まず。之を彼の多くの飲ずして終日昏暗、各の爾の儀を失する者に比すれば、信に天地の相違あり、人の齊聖なる、酒を飲めども溫にして克てりは、其れ此の二聖に在り、其れ此の二聖に在り。

中原有菽　庶民采之　螟蛉有子　蜾蠃負之　敎誨爾子　式穀似之

中原に菽あれば、庶民之を采り、螟蛉子あれば、蜾蠃之を負ふ、爾の子を敎誨し、穀を式て之に似せ、

【句釋】中原は原中の倒用、菽は大豆なり。庶民采之、菽は食ふべき物、故に庶民之を采る、道は履むべきもの、庶民必ず履まざるべからず。螟蛉は桑上の小青蟲なり、故に「クハムシ」と稱す、步屈卽ち尺取り蟲に類す。有子、蜾蠃負之、蜾蠃は土蜂、細腰蜂なり。『本草注』曰く、土蜂と名くと雖も、土中に就て窟を爲らず。土を糎て房を作るを謂ふなり、此の土蜂は雄ありて雌無く、皆靑蟲を取り敎祝して變じて己が子と成す、嘗て寨を折て之を視る、子生る半粟米の大の如し、負ふ所の蟲却て子の下に在り、

『法言』に螟蛉の子殪れて果蠃に逢ふ。之を祝して曰く、類我類我と、久うして之に肖たり。實は螟蛉の子を取て以て其の子の食と爲すなり、蓋し古來の傳說は此の如し。敎誨爾子、式穀似之、式は用、穀は善、似は示なり、敎誨の力は惡は善と化し、愚は智と爲る、眼前に彼の好手本あり、之を興として以て人の戒と爲す。

題彼脊令　載飛載鳴　我日斯邁　而月斯征　夙興夜寐　無忝爾所生

彼の脊令を題れば、載ち飛び載ち鳴く、我日に斯邁く、而月に斯征け、夙に興き夜に寐ねて、爾の生む所を忝しむること無かれ、

【句釋】題は視なり、睇なり。脊令は他鳥と異なり。載飛載鳴、且飛び且鳴く、鳥の飛ぶ時多くは鳴かざるものとす。我日斯邁、而月斯征、兄弟相互に勤勉するのみ、我は日、而は月と定めたるにあらず、相互に日月を空過せず、其の邁征を期せんとなり。夙興夜寐、無忝爾所生、忝は辱しむるなり、所生は父母なり、我も爾も共に夙夜勤勉して、以て彼の脊令の雌雄相和する如く、兄弟相和して、彼の口翼俱に勞する如く、我等も邁行共に勞を辭せず、以て父母の名を辱しめざらんとなり。今韻八庚の韻にして極めて分明の作法とす。

小雅　小旻

交交桑扈　率場啄粟　哀我塡寡　宜岸宜獄　握粟出卜　自何能穀

交交たる桑扈、場に率つて粟を啄む、哀しむ我が塡寡、岸に宜し獄に宜し、粟を握りて出でて卜ふ、何に自てか能く穀けんと、

【句釋】交交は飛去飛來する貌。桑扈は鳥の名、一名竊脂、一名青雀、背曲り肉を好む、穀粟を食はず、人の脂膏を竊むを以て竊脂の名あり。率場は穀粟を乾かして居る人の場に來るなり。啄粟、桑扈は脂肉を食ふが其の性なり、然るに今我が粟を食はんとす。塡は瘨と同じ、病者なり。寡は夫に別れし婦。岸は韓詩に犴に作る、犴は豻なり、胡地の犬なり、野犬は守る所以、故に獄を以て犴と爲す、鄉亭の繫を犴と曰ひ、朝廷を獄と曰ふ。桑扈は粟を啄まず、病寡は犴や獄に繫がれざるが本然なり、然るに今や世は顚倒せり、桑扈は粟を食ひ、病寡は犴獄に繫がる。眞政行なはれず、刑法正しからざればなり。握粟出卜、自何能穀、粟を握て卜ふ者は其の卜中るとの傳說に依て、今兄弟が其の古轍を履むなり、何に由てか穀からんとなり。朱子曰く、其の貧窶の甚だしきを見はす。顧氏曰く、握粟も亦點景の語、必ずしも自から貧窶の甚だしきを言はず。顧は多く朱子を奉ずる人、然れども此の言あり、朱子亦如何ともする無し。

溫溫恭人　如集于木　惴惴小心　如臨于谷　戰戰兢兢　如履薄冰

溫溫たる恭人も、木に集るが如し、惴惴として心を小むるも、谷に臨むが如し、戰戰兢兢として、薄

冰を履むが如し、

【句釋】溫溫恭人は謙和の人なり、如集于木、木上は地上と異なるに謹愼せずんば墜る憂あり、恭人は地上に在るも常に此の木上に集るの態度なり。惴惴は畏謹の貌。小心、心を放たず心を小む、小むは自から修むるなり。如臨于谷、深谷に臨んで猶ほ闊步する如き不謹愼者は遂に隕る憂あり、是を以て小心なるなり。戰戰兢兢、如履薄冰、此の句義前に辨ぜり、此の詩は讀者の考に依りて種種の解を爲す餘地あり、一は恭人と小心の人と戰戰の人と合して三人此の中にありとする說、一は恭人一人の事にして他人の事は無しとする說、一は恭人と小心の人と二人の事なりとの說、朱子は明言せず。輔氏曰く、恭人と小心は他人を指して言ふ、戰戰兢兢は則ち自から謂ふなり。其の意は今亂世に處す、溫柔恭敬の人は則ち木に集りて墜ちんことを恐るるが如くす、惴惴小心の人は則ち谷に臨んで隕んことを恐るるが如くす、我其れ戰戰兢兢として、薄冰を履むが如くせざる可んやと。顧氏曰く、輔氏の說に依れば前篇の不敢暴虎、不敢馮河、人知其一、莫知其他、の四句は亦他人を謂ふ、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰の三句は則ち自から謂ふなり。疑ふらくは是れ一人の作、要するに一人なりや二人なりや文字の上決して分明ならず、姑らく三人說に從ふのみ。衰亂の世、賢人君子、罪なしと雖も、猶ほ恐懼すと鄭氏言へり、洵に然らん、事實哀しむべきなり。

【評論】小宛は六章六句を以て成る。朱子曰く、此の詩、最も明白にして意極めて懇至なり、説者必ず王を刺るの言と爲んと欲す、故に其の説穿鑿破碎、理無きこと尤も甚し、今悉く改定す、讀者之を詳かにせよ。小宛は小雅の義なり。

弁彼鸒斯　歸飛提提　民莫不穀　我獨于罹　何辜于天　我罪伊何　心之憂矣
云如之何

弁たる彼の鸒斯、歸り飛ぶこと提提たり、民穀からずといふこと莫し、我獨り于に罹ふ、何ぞ天に辜ある、我が罪伊何ぞ、心の憂ある、云に之を如何、

【句釋】弁は鳥の飛で翼を拊つの貌。鸒は音「ヨ」、訓「ハシブト」鵯鵙なり。朱子曰く、雅鳥なり、小にして羣多し、腹下白く、江東呼で鵯鳥と爲すと。卽ち「ハシブトノカラス」なり。歸飛提提、羣飛安閑なるを形容して提提と言ふ、歸處あるが故に安閑なり。民莫不穀、穀は善なり、鸒と比較するにはあらざるも、他人は皆不幸にあらずして善なりとの意、何故に善なりと言はば他人は父子の親あればなり。我獨于罹、罹は憂なり、他人は善、我は惡なり。何辜于天、我罪伊何、我は辜を天に得しこと無し、而かも此の罹あり、果して何の罪ぞや、乃ち罪を父に得て憂ふるを謂ふなり。心之憂矣、云如之何、其

の奈何すべき無きを知て、之を安んずるの詞と舊説解せり、安んずる詞にはあらず、如何して安んぜんやとの詞なり、歎の極發する言なり、何ぞ之を安んずると言ふことを得ん。幽王の太子宜臼、廢せられて作りし詩なり、宜臼は申后の子、褒姒の爲めに寵を奪はれて母子共に除ぞけらる、而して幽王は褒姒生む所の伯服を立てんとしたるなり、太子の傅が太子に代りて作るとの説もあり、今に於て明白の證無し。

踧踧周道　鞫爲茂草　我心憂傷　惄焉如擣　假寐永嘆　維憂用老　心之憂矣
疢如疾首

踧踧たる周道、鞫まつて茂草と爲る、我が心憂傷し、惄焉として擣くが如し、假寐して永嘆す、維憂へて用て老いぬ、心の憂矣、疢しきこと首を疾むが如し、

【句釋】踧踧は自から安んぜざるの貌。恭謹にして足を斂めて小足する、蓋し此の如くなるときは斷じて倒蹶する憂無し、是の故に周道の平易なるに譬ふ。周は國の周にあらず、大道なり。鞫は窮なり。爲茂草、道は人の通行を以て用を爲す、其の用を爲さざるときは唯草萊のみ茂盛する。我心憂傷、惄焉如擣、惄は飢に依て起る憂なり、憂甚だしきに依て胷が舂づくごとく、惻怛の貌を惄焉と言ふ。謝疊山曰く、深悲至痛、物の其の心を擣あるが如きなり。假寐は俗語の「ウタタネ」なり、衣帶の儘にて寐るを言ふ。永嘆、假寐の中にも永嘆する、精神が慣眊たればなり。維憂用老、憂の深き、是を以て未だ老ず

して老いたるなり。輔氏曰く、特に能く人を老しむるのみにあらず、又能く人をして病しむるに至る。心之憂矣、疢如疾首、疢は音「チン」熱病なり、頭は寒なるべし、熱なるべからず、今憂心の極、此の如く頭痛するなり。周道は必ず茂草と爲ることを知る、是の故に其痛强きなりと姚承菴曰へり。

維桑與梓　必恭敬止　靡瞻匪父　靡依匪母　不屬于毛　不離于裏　天之生我
我辰安在

維桑と梓と、必ず恭敬止、瞻ること父に匪ずといふこと靡し、依ること母に匪ずといふこと靡し、毛に屬ならずや、裏に離かずや、天の我を生みたる、我が辰安んか在る、

【句釋】桑梓、桑は蠶食に給する樹、梓は器用に供する樹。朱子曰く、古は五畝の宅、之を牆下に樹ゑ、以て子孫に遺す也、梓は梓楸、木の王と稱す。『說文』に椅は梓なり、梓は楸なり、楸は楩なり、一物にして四名あり、又書を刻むを繡梓、鍥梓と曰ふ。必恭敬止、父母が子孫を思ふの餘、資產を作りて遺留す、子孫たる者其の桑や梓に對し等閑視せず、之を恭敬せざる可らず。靡瞻匪父、靡依匪母、瞻は尊んで之を仰ぐなり、依は親んで之に倚るなり、桑は卽ち父なり、梓は卽ち母なり、樹已に其の恩を有す、況んや生存の父母に於てをや。不屬于毛、不離于裏、父母の毛と我の毛と屬るが當然なり、離は麗なり著なり、父母の心腹に我は著かざる道理なきなり。孔氏曰く、人體皆毛表に生じて、裏其の內に在り、

毛外に在るは表、裏內に在るは陰、父は陽、母は陰を以ての故に表裏を假つて父母を言ふなり、屬は父子相連屬す、離は離歷する所を謂ふ。父の氣を稟け、母を歷て生るるを言ふなり。天之生我、我辰安在、父母と言はずして天と言ふ、咎を歸する所無きを以てなり。辰は朱子は誕辰の時と解す。我が『雕題』は時世と解す。其の意は天何ぞ我を生ずるの不時なるや、若し稍や蚤ければ此の如きの難に遭ず、稍晩ければ此の如きの難に及ばざらんとなり、本命吉凶の事、當時恐くは此の妄說無からんと。今謂く本命吉凶の事、當時無しとは斷ずべからず、既に占卜の事あり、占卜の事一種の妄說なり、蓋し信ずる者より之を觀れば妄說にあらざるなり。是の章に於ては時世と解するが至當と思はるるなり。宜曰、父の爲め放たれ、母之を放つにあらず、而して併せて母を言ふ、人皆父母の恩を得るを以ての故に連屬して之を言ふ、其の意申后を怨むにあらず。

菀彼柳斯　鳴蜩嘒嘒　有灌者淵　萑葦淠淠　譬彼舟流　不知所屆　心之憂矣
不遑假寐

菀たる彼の柳斯、鳴蜩嘒嘒たり、灌たる淵あり、萑葦淠淠たり、彼の舟の流れて、屆る所を知らざるに譬ふ、心の憂矣、假寐に遑あらず、

【句釋】菀は茂盛の形容、鬱と同じ。柳が青青として茂るなり。鳴蜩嘒嘒、蜩は蟬なり、楚國に蜩、宋

衞に蟪蛄、陳鄭に蜩蜩、秦晉に蟬。『楚辭』に蟪蛄出づ、此の蜩なりと言ふ、其の鳴聲を嘒嘒と曰ふ。有灌者淵、灌は水の深き貌、莘と同じ又鮮明なり。淵は水底の外より見えざるもの。『荀子』に積水成レ淵とあり。萑葦は水草「アシ」。淠淠は萑葦の多く生ずるを言ふ。水聲の形容にも用ひ、今茂なり多なりの訓を取る。譬彼舟流、不知所屆、岸上には菀然たる柳あり、嘒嘒たる蜩あり、水上には淠淠たる萑葦あり、物皆依る所あり、然るに今我獨り棄てらる、舟の水中に流れて歸著する所無きが如きに譬ふるなり、人物に如かざるを以て興を起す。

鹿斯之奔　維足伎伎　雉之朝雊　尚求其雌　譬彼壞木　疾用無枝　心之憂矣
寧莫之知

鹿の斯之奔る、維足伎伎たり、雉の朝に雊く、尚其の雌を求む、彼の壞木の、疾みて用て枝無きに譬ふ、心の憂矣、寧ぞ之を知ること莫き、

【句釋】鹿斯之奔・斯之の二字は語助のみ。伎伎は鹿の奔る形容、乃ち伎伎然として舒かなり。雉之朝雊、雄雉の鳴くなり。『說文』に雄雉鳴くや、雷始めて動き、雉鳴て其の頸を雊すと。雊を鳴くと訓するも他の鳥には通用せざるものの如し。尚求其雌、雄雉が雌を求むるを以て、我は女を求むと言ふに非ず、唯我の舍てられて倚る所無きことを敍す。孔氏曰く、鹿に牝を言はず、鹿足遲と言ふは、之を得るの勢を爲す、獸走る故に遲を以て相待つ、鳥飛ぶこと疾し、故に鳴を以て相呼ぶ、皆互に見す。譬彼壞木、疾用無枝、二句を以て一意とす、我は彼の壞木の生氣盡きて用て枝無きが如きに譬ふる也。心之憂矣、寧莫之知、傷病の木、憔悴して枝無きは我と恰かも似たり、而かも此の憂は他人知ること莫し、寧は猶と見る、他人の知る莫きを怪しみ咎むる辭。

相彼投兎　尚或先之　行有死人　尚或墐之　君子秉心　維其忍之　心之憂矣
涕既隕之

彼の投兎を相れば、尚ほ先之ことあり、行に死人あれば、尚ほ墐之ことあり、君子心を秉ること、維其れ忍之、心の憂矣、涕既に隕之、

【句釋】相は視。投は奔。尚或先之、兎が何者にか逐はれて人に投ずる場合は、人は其の窮狀を憫みて之を救はんと欲するなり、或は有と同じ、先は逐ふ者より先にする意味なり後るれば及ばざればなり。行は道傍なり。有死人、尚或墐之、墐音「キン」、訓「ウヅム」埋なり、道傍に死人あるを見るときは、貴賤親疎を問はず、之を埋葬するは人の常情なり。君子秉心、秉は秉持なり、心を放たずして之を秉り持つ、善意義にも用ひ、惡意義にも用ふ、今此の君子は心を秉ること、殘忍なれば惡意義と見るべし。維其忍之、兎を殺すに忍びず、人を埋めざるに忍びざるが人情なるに、今や君子は之を殺すも忍び、之

を埋めざるも忍ぶなり。心之憂矣、涕既隕之、是れ詩人が此事を見て心に憂ふるなり、悲の實を表はすものは涕より外有ること沒し。顧氏曰く、以上の諸章注中（朱子ヲ指ス）父母愛を失なひ、讒を信じて棄逐す、今皆之を標出するもの、其の主意在る所を見はすなり、然れども其の實蘊含して甚だ說き出さざるを以て佳と爲す、然らざれば詩以て怨む可し、其の指に非ず、且讒を信ずるの字、下章に在り、尤も露はすべからず。

君子信讒　如或醻之　君子不惠　不舒究之　伐木掎矣　析薪杝矣　舍彼有罪
予之佗矣

君子讒を信じて、之に醻ゆること或るが如し、君子惠しまずして、舒く之を究めず、木を伐るには掎を、薪を析くには杝をみる、彼の罪あるを舍て、予に之れ佗へたり、

【句釋】君子信讒、君子は幽王を指すこと論なし。如或醻之、醻音「シウ」、酬と同じ、讒を信ずるが故に僞なりと言はずして、其れを實行し、讒せらるる者に向つて必ず害を加ふるを言ふ也。徐光啓曰く、飲酒するや、一獻一酢、往ば必ず返る、爵を醻ゆるに至りては、來れば必ず受く、往て返らざる無し。君子の讒言に于る、若し能く舒緩究察して還て以て相質すときは、其の奸立どころに見る。故に曰ふ人の言を爲す、苟も亦信ずる無れ、旃を舍け旃を舍け、苟も亦然りとする無れ。今乃ち受けて舍てず、

石を水に投ずる如く、泛焉として疑はず、土を地に委する如く、莫然として間無し、全く阻却推委、核實考驗い意無し。故に曰く、之に醻ゆるある如しと。四句一順に說く、不舒究之は正に上二句の意を足す也。君子不惠、君子卽ち幽王は讒を信ずるに依て太子を惠愛せざるなり。不舒究之、舒は緩なり究は謀なり、王太子を愛せざるが故に讒言を聞くが儘に直ちに之を放ち、舒緩に其の源由を究謀ざるなり。伐木掎矣、『傳』に木を伐る者は其の巔に掎す。『箋』曰く、其の巔に掎すとは妄りに之を踣すことを欲せざるなり、其の伐る所の木の踣れざらんが爲め、寄せ木を以て之を禦ぐなり。析薪杝矣、杝は音「チ」、訓「モクメ」木目なり、薪を析く者は其の理に隨ふ、妄りに之を挫折せざるなり、木目を見て以て薪を析く、析くの法正しく亦能く析けるなり、王の太子を遇する、伐木析薪の匹夫にも及ばざるなり。舍彼有罪、予之佗矣、有罪者卽ち僞證を爲すの讒人を罰せずして、罪の無き予に罪を佗ふぞや、大人君子は理に於て聰明、讒を信ずることを爲さず、小人劣士は理に於て暗冥、情のみ動らく、是を以て愛憎に於て其の殘忍を敢て爲す、色に迷ふの愚王特に此事多し、幽王の如きは第一流の愚王と謂ふ可し。

莫高匪山　莫浚匪泉　君子無易由言　耳屬于垣　無逝我梁　無發我笱　我躬不閱　遑恤我後

高くして山に匪ざるは莫し、浚くして泉に匪ざるは莫し、君子易く言を由ふること無れ、耳垣に屬けり、我

が梁に逝くこと無れ、我が筍を發くこと無れ、我が躬すら閲れられず、我が後を恤ふるに遑あらんや、

【句釋】莫高匪山、莫浚匪泉、山より高き者有ること無く、泉より浚き者有ること無し、高きもの危、浚きもの險。君子無易由言、此の君子は誰を指して言ふなるや。王を指すと言ふものあり、朱子及び嚴粲是れなり。泛く他人を稱し、而して意は實に伯服に在りと言ふは『雕題略』なり。雕題の說を以て正しとす。高山浚泉を以て王の危險に比す。而かも此の句に至り猶ほ王を指すとは斷じて見るべからず、羣臣や伯服が王に就て不滿なる事あるも、容易に言を由てすること無れ。耳屬于垣、人は我が言を聞かざりしならんと思へども、何ぞ料らん耳は垣牆に在り、其の言を聞く者之を王に讒言せずとも計られず、請ふ其の言を愼めよ、若し愼まざる時は或は我の如く放逐せらるるの運命を招かんとなり。無逝我梁、無發我筍、廢せられし太子宜臼の言なり、公等は要するに我に傲ふこと無かれ、梁及び筍の文字に泥むの要なし。我躬不閱、遑恤我後、我既に安心の地を失す、何ぞ人に安心の地を敎ふるの遑あらんや。徐光啓曰く、此の詩讒を信ずるの後に作る、而して無二易由一言と尙ほ戒勉の說を作す、正に他委婉處ぞ見る、周宗既に滅ぶは、未だ然らざるに、已に然るの語を爲す、臣の君に於る、危言を爲して以て之を激するなり、君子易く言を由ふ無かれ、耳垣に屬くは、已に然るに、未だ然らざる語を作す、子の親に於ける、微言を爲して以て之を諷するなり、文の變幻此の如し、才人の致を極むと謂ふ可し。

【評論】小弁は八章八句を以て成る。幽王申に娶りて太子宜臼を生む、後褒姒を得て之に惑ひ、子伯服を生む、其の讒を信じて申后を黜け、宜臼を逐ふ、宜臼此を作り以て自ら怨むなり、『序』に以爲らく太子の傅、太子の情を述て以て是の詩を爲ると、其の據る所を知らず。『傳』に曰く、高子曰く、小弁は小人の詩なり。孟子曰く、何を以て之を言ふ。曰く怨めり。曰く固なるかな、高叟の詩を爲るや、此に人あり、越人弓を關て之を射るときは談笑して之を道ふ、他無し之を疏んずるなり、其の兄弓を關て之を射るときは己涕泣を垂れて之を道ふ、他無し之を戚でなり。小弁の怨は親を親しむなり、親を親しむは仁なり、固なる夫高叟の詩を爲るや。曰く凱風は何を以て怨みざる。曰く凱風は親の過ち小なる者なり、小弁は親の過ち大なる者なり、親の過大にして怨みざるは是れ愈よ疏ずるなり、親の過小にして怨むは是れ磯す可らざるなり、（磯ハ水ノ石ニ激スルナリ不可磯トハ微シク之ヲ激シ遽カニ怒ルヲ言フナリ）愈よ疏んずるは不孝なり、磯す可らざるも亦不幸なり。孔子曰く、舜は其れ至孝なり、五十にして慕ふ。（孟子告子章句下）『箋』曰く父を念ふは孝なり、太子、王將に讒言を受け止まざらんとするを念ふ、我が死するの後、復讒せらるる者あるを懼る、亦之を如何ともすること無し、故に自決して云ふ、我躬すら閲られず、何ぞ其の後を恤ふるに遑あらんやと。豐城の朱氏曰く、小弁の詩は父子の變に處す、白華の詩は夫婦の變に處す、聖人備に經に錄し、周室禍敗の由を著して又以て天理民彝の泯ずべからざるを見す所以なり、然れども曾て之を攷ふるに小弁の詩は、

其の前六章皆興、白華の詩は其の八章皆比、小弁の詩は婉にして切、猶ほ之を望むの意あり、父子の間に處するときは然るなり、白華の詩は簡にして莊、之を責むるの意無んばあらず、夫婦の間に處するときは然るなり、小弁の詩は其の哀痛迫切の意、首章に具はる、其の下は此れよりして之を推に過ぎざるのみ。又曰く、舜の怨は、己が親に得ざるを怨む、小弁の怨は、親の己を容ざるを怨む、怨む所同じからずと雖も、然も孟子の言を以て之を推に親の過大にして怨みざるときは是れ恝然として情無きなり、恝然として情無きは、其の至親を視ること猶ほ路人の如く、其の罪たる愈よ大ならずや、宜臼は中人の資、聖人亦姑らく其の一節の觀る可きを取るのみ、固より敢て大舜の事を以て之を望まざるなり。

悠悠昊天　曰父母且　無罪無辜　亂如此憮　昊天已威　予慎無罪　昊天泰憮

予慎無辜

悠悠たる昊天、曰く父母且、罪無く辜無きに、亂此の如く憮なり、昊天已威あり、予慎に罪無し、昊天泰憮なり、予慎に辜無し、

【句釋】悠悠は遠大の貌。昊天を呼んで之を訴ふるなり。曰父母且、昊天は我等の父なり母なり、且は語助。無罪無辜、亂如此憮、父母は其の子を惠愛するが自然の理なり、然るに無罪無辜の人を刑戮して、

亂を爲すこと此の如く甚だ敖慢にして法度無きや、憮は愛と媚と悵との義を含む、憮然と用ふる場合多し、今は大の義とす、亂が大なるを憮なり。昊天已威、威は威怖なり。予慎無罪、慎は眞の煩文、昊天は已威怖すべし、罪の無き予を罪に處す、予は眞に罪なきなり。昊天泰憮、予慎無辜、昊天は泰大なり。予は眞に辜なきなり。顧氏曰く、『集傳』前後、且辜憮を以て一韻と爲す、五六威罪を以て一韻と爲す。古文『尚書』注に古威畏同じ。

亂之初生　譖始既涵　亂之又生　君子信讒　君子如怒　亂庶遄沮　君子如祉

亂庶遄已

亂の初めて生れるは、譖の始に既に涵るればなり、亂の又生れるは、君子讒を信ずればなり、君子如し怒らば、亂庶はくば遄沮まん、君子如し祉ばば、亂庶はくは遄已まん、

【句釋】亂之初生、治に反するものは悉く亂なり、兵亂とのみ解す可らず、生は「ナル」と讀むも「シヤウズ」と讀むも同じ。譖は『傳』に數とあり。『箋』に不信とあり。不信は即ち「イツハリ」なり。涵は容受なり。如何なる譖も之を容受する人無きときは其の功を成さず、若し容受する人あるときは是れ良に畏るべきなり、今は容受せられて畏るべきなり。亂之又生、君子信讒、又は初に對す、又繼きて亂が生ずるは君子卽ち在位の大夫等が曲直を正さず、讒言を信ずればなり。君子如怒、如は若なり。朱

子曰く、君子讒人の言を見て、若し怒りて之を責ば。『雕題略』曰く、怒は當に讒を怒るなるべし、然れども經文の語氣、只是れ好惡を明らかにするを要するなり、大率衰世の朝、大惡とする所無く、大好とする所無し、顯然の功罪知て紬ぐけず、事に陟り皆因循苟且、則ち小人自から進み、君子自から退き、讒姦日に甚し、詩人の意、玆に在り、故に其の怒る所あるを願ふのみ、未だ賢を讒するに言及せず。『雕題』の說を以て勝れりと爲す。亂庶遏沮、庶は庶幾なり、遏は疾なり、沮は止むなり、好惡を明かにする君子上に在るときは、世の紛亂は疾く止んとなり。君子如社、亂庶遏已、社音「チ」訓「サイハヒ」福なり、又「ヨロコブ」喜なり、讒人に對しては怒り、賢人に對しては社ぶ、社べば其の言を容る、其の言を容るれば天下は何ぞ治まらざるを憂へん、悠悠昊天の以下五章は大夫が讒言を被むり控告する所無く、之を天に訴ふるなり、此の意を以て此の六章を讀むべきなり。

君子屢盟　亂是用長　君子信盜　亂是用暴　盜言孔甘　亂是用餤　匪其止共
維王之邛

【句釋】君子屢盟、盟は會盟、凡そ國に疑ひあれば會同し則ち盟を用て相要す、牲を殺し血を歃り神に

告げ、以て相約束す、其の事を屢する所以は世衰亂し、多く相背違するに由る、時見に會と曰ひ、殷見に同と曰ふ。此の時にあらずして盟ふ之を屢と謂ふ、一盟にて足る、然るに屢盟するは天下治まらざる所以なり。亂是用長、屢ばせざるとを屢ばす、民之を疑ふ、亂の增長する所以なり。君子信盜、亂是用暴、盜は財を盜む者のみ指すにあらず、是れ讒人を指して言ふ、讒人の言を信じて王虐を恣にす、是れ亂の暴戾を致す所以なり。盜言孔甘、亂是用餤、讒人の言ふ所、孔だ甘くして王の耳に稱ふ、是を以て亂益す進むなり、餤音「タン」、訓「ススム」進「カフ」餌なり、甘言を餌として王の歡心を買ふなり。匪其止共、己が職事を供する能はざるのみならず、却て王の疾痛を增しむるなり。維王之邛、邛は病なり。朱子曰く、良藥は口に苦うして病に利あり、忠言は耳に逆うて行に利あり、維其の言甘くして悅ぶときは、其の國豈殆からずや。

奕奕寢廟　君子作之　秩秩大猷　聖人莫之　他人有心　予忖度之　躍躍毚兔
遇犬獲之

奕奕たる寢廟、君子之を作る、秩秩たる大猷、聖人之を莫む、他人心あり、予之を忖度す、躍躍たる毚兔、犬に遇うて之を獲らる、

【句釋】奕奕は大なる貌。寢廟は和語に譯すればヤシロ祠なり、寢も廟も同義なり、前を廟、後を寢と

曰ふ、寢を先にし、廟を後にするは文を偃にするのみ。字書に廟は貌なり、先人(先祖)の容貌を彷髣する所以なり、儒者の所謂神主、佛者の所謂位牌を納めて四時祭祀する處、先人の衣冠等遺物を之に安じ、其の孝道を竭す處、然れば人の住室にあらざること分明なり、蓋し廟廊とか廊廟とか用ふる廟の字は朝廷の事にて、神主や位牌を置く處にあらず、議二政于廊廟一など常語として之を用ふ。然りと雖も寢廟と熟語するは大底位牌堂なり(『毛傳』と『鄭箋』は其の意分明ならず、朱子は位牌堂說たるなり。履軒先生曰く、寢廟は人居なり、鬼室を指すにあらず。其の證左を示さざるを以て今遽かに此の說を信じ難し、余は姑らく朱子に從がふ。乃ち高大なる寢廟は、制作する者誰ぞ。君子作之、此の君子は指す人あるか、又泛稱なるや分明ならず、誰と指すにあらず、寢廟を作りし人は君子ならずば能はずとしての君子、卽ち泛稱なり。秩秩は序次あるを言ふ。大猷は卽ち大道なり、人の履むべき大道なり、其の大道の指導者は誰ぞ。聖人莫之、君子と同じく聖人も泛稱にして誰と指す人はあらず。孔氏曰く、君子の人、聖德の人、强て言へば、文王又は周公を指すと見て可なり。莫は定なり、萬世の法と定めたるなり。他人有心、讒に會ふ人より讒人を指して他人と言ふ、彼に佞心あることは。予忖度之、予が忖度して能く彼が心情の佞劣なるを知る。躍躍は跳る貌。毚は狡獪なり。兎の狡獪なる、捕へんと欲する者は、反て兎の爲めに愚弄せらる、是を以て狡兎の熟語ある所以なり。遇犬獲之、兎は人を愚にするも、犬を愚にする能は

ず、犬の爲めには其の命を授けざるべからず、讒人も要するに此の兎の類、今日我を讒して己が身を謀れども、後來必ず彼を捕ふる犬が出でんとなり。此の章は二句を以て一事と爲す。『箋』に曰ふ合して四事と爲る、各の其れ必ず能くする所を言ふ、君子は作を能くす、聖人は大猷を能くす、予は忖度を能くす。犬は兎を捕ふるを能くす。孔氏曰く、四事、尊卑を以て先後と爲す。大猷は是れ常法と雖も、宗廟の尊たるに如かず、故に寢廟は大猷の先に在り、兎は走獸なり、故に他人の後に在り。顧氏曰く、此の章『箋疏』四事の說最も妙、主とする所讒人に在りと雖も、而かも語只平敍す、大段六義、亦是れ後人、名目を看出す、必ずしも古人、先興後比を以て硬く一體の拘拘を爲さず、但他人の句上に在り、而して躍躍の句下に在るときは、理照應無し、故に前を判じて興と爲し、後を判じて比と爲すのみ、今或は遽かに此の說を信ずること能はずんば、亦當に詩人雋永に於て別に一解を進むべし。窗蠅紙を鑽たんとして了に出路無きが若きは、卽ち讀書の一事、且交涉沒し。

荏染柔木　君子樹之　往來行言　心焉數之　蛇蛇碩言　出自口矣　巧言如簧

顏之厚矣

荏染たる柔木は、君子之を樹う、往來の行言は、心に之を數ふ、蛇蛇たる碩言は、口より出でん、巧言簧の如きは、顏の厚きなり、

【句釋】荏染は柔弱なる貌。柔木ヤハラカナル木なり。『毛傳』に桐梓漆とあるが、桐梓に限らず、總じて柔かなる木を指す。君子樹之、樹は植なり、物の用に供せんと志して樹し人、君子にして小人にあらず。往來行言、大道を往來して種種の言を吐く者、虛もあり實もあり、善もあり惡もあり。心焉數之、聞く者は我が心に於て其の可否を辨せよとなり。『鄭箋』に依れば曰く、此れ君子善木を樹る、人心に善言を思ひ數へて之を出すが如きを言ふ。善言なる者は、往も亦行ふ可く、來も亦行ふ可し、彼に於ても亦可、己に於ても亦可、是れ之を行言と謂ふなり。箋は善木と善言とを以て此の四句を解したるが、前章の作法、或は四句一意なるあり、二句の意と三句四句との反對なるあり。是を以て解者の意の如くに詩は構成しあらざることを知る可し、余は姑らく朱說に據る。蛇蛇は『毛傳』に淺意なりと。『朱注』に安舒なりと。吳師道曰く、蛇蛇は安舒、正に顏厚に對して言ふと。毛傳の如く淺意にして碩言は意義を爲さざる感あり。碩は卽ち大なり、大は大小の大にあらず、善言の謂なり。出自口矣、口より出るものは正しと爲す。『傳』と『箋』との意は朱子と少しく異なる。淺意なる大言は、其の行を顧みず、徒らに口より出で、心に由るにあらず。乃ち此の口を以て惡人と解す。要するに傳箋の意は荏染の四句十六字を以て善人と解し、蛇蛇の四句十六字を以て惡人と解す。朱子は善惡を雙方の句を隔句して解す、今姑らく隔句解に從がふ。口より出るは所謂心情のまま、飾らざる言と見れば可なり、非常に功あるとは言へざるも善言ゆゑ猶ほ可なりとなる。巧言如簧、簧は笙なり、言を飾りて宛轉自由、人を悅ばしむるもの。顏之厚矣、顏の厚きは心の厚きと異なる、頑にして恥を知らざる徒輩を謂ふ。

彼何人斯　居河之麋　無拳無勇　職爲亂階　既微且尰　爾勇伊何　爲猶將多

彼れ何人斯、河の麋に居る、拳無く勇無けれども、職ら亂階を爲せり、既に微やみ且尰たり、爾の勇伊何ぞ、猶を爲すこと將に多し、爾の居る徒幾何ぞ。

【句釋】何人は讒者を指す、賤んじて之を惡む、故に何人と曰ふ、斯は語助なり。『毛傳』に何人斯は蘇公、暴公を刺るなり、暴公王の卿士と爲て、蘇公を讒す、故に蘇公、是の詩を作り之を絕つ。居河之麋、讒者の住居する處。『傳』に水草の交はる之を麋と言ふ。麋音「ビ」、訓「シシ」鹿の屬、澤獸なり、此の獸は叢澤に集まり、其の場を食うて泥と成す、名て麋暖と曰ふ、民之に隨て稻を種う、其の收百倍すと。乃ち借りて以て涯の意義に用ふ、又湄の音通にも由る。無拳は外形の力無きを言ふ。無勇は無形の精神も無きなり、要するに木偶に等しき人間なり。職爲亂階、其の力勇無き人間が主として爲す業は何ぞ、力勇の亂を爲す能はざるが故に、讒口交鬪、專ら亂の階梯を爲すのみ。既微且尰、微は骨瘍を言ふ、骨は脚脛、瘍は創なり、尰は腫足なり、瘡の爲め足が腫たるなり、此の人、下濕の地に居る、故に微腫の

疾を生ず、此の如き身疾の人間、乞丐も同然なり、一擊以て其の驅除し易きなり。爾勇伊何、口にて勇ある如く饒舌とも爾の脚の腐敗を如何するぞや。爲猶將多、『箋』に猶は謀なり、將は大なり、此の腐敗の人間、讒佞の謀を作すこと大だ多きなり。爾居徒幾何、爾が謀計を助ける人間の數は定めし少なからうとの意にはあらず、力勇無くして此の謀計を爲すには定めし幾何かある。要するに一人や二人にはあらざるべしとの意なり。徐光啓曰く、此の章朱傳を玩するに居河の十二字是れ一意、既微の十二字是れ一意、爾居の一句は二意を承けて之を言ふ、然れども凡そ詩體皆二句を以て節と爲す、此の章の如きも亦只宜しく疊疊として說去以て義を見るべし、割裂破碎して以て其の說を就すべからず。顧氏曰く、此の章亦通章を以て一韻と爲す。此の章二句一節を以て讀むときは、四段俱に是れ之を鄙しむの辭、河、湄、微、尰、特に形容を爲し、以て賤惡を見はす、亦實事にあらず。

【評論】巧言は五章八句を以て成る。悠悠昊天を以て名けず、巧言を以て稱するは其の重き事に從ふならん、蓋し最後の居河之麋章は巧言の中に入るべきものにあらず、下の部へ移すべきものなり、何れの時代に於てか誤て巧言の部へ收め遂に今日に及べるなり。履軒先生千載の妄を破して之を辨ず、良とに敬服すべきなり。巧言は大夫が讒に遇うて幽王を刺る詩なること明明、辨ずるの要なし。

彼何人斯　其心孔艱　胡逝我梁　不入我門　伊誰云從　維暴之云

彼れ何人斯、其の心孔だ艱む、胡ぞ我が梁に逝て、我が門に入らざる、伊誰と云し從す、維暴と之れ云ふ、

【句釋】其心孔艱、彼の暴公は安心の狀なく、甚だ艱むが如きなり。胡逝我梁、不入我門、『箋』曰く、梁は魚梁なり蘇國の門外に在り、彼何人ぞは暴公と俱に王に見る者を謂ふ。其の心を持する甚だ知り難し、其の性堅固にして不妄に似たるを言ふなり。暴公己を讒するの時、女之に與かるか、今我が國を過ぐ、何の故に近く我が梁に之て、入て我を見ざるや、其の之に與るを疑うて而も未だ察せず、其の姓名を斥すを大切と爲す、故に何人と言ふ。平たく言へば君は我が梁の近處へ來たではないか、來たならばなぜ我が家を訪はざるぞ、我が家を訪はぬのは、自身に後暗い處があるからだらうとなり。伊誰云從、維暴之云、我を讒する者是れ誰ぞと言へば、是れ乃ち暴公が言ふ所なりと言ふ、彼の人が云ふにあらず、此の方で判斷して我を讒言せしものは暴公なりと知るなり。『孔疏』に蘇は忿生の後、成十一年左傳に曰く、昔周、商に克つ、諸侯をして蘇忿生を撫封せしむ、溫を以て司寇と爲す、則ち蘇國は溫に在り。杜預曰く、今河內の溫縣、是れ蘇、東都の畿內に在るなり、春秋の世、公たる者多くは是れ畿內の諸侯、徧く書傳を簡するに未だ畿內に暴國あることを聞かず、今暴公、卿士と爲る、明かに畿內なり、故に皆畿內の

國名と曰ふ、春秋の時、蘇、子と稱す、此に公と云ふは蓋し子爵にして三公と爲る也、暴公、卿士と爲る、亦公と稱す、當に卿士、公官を兼べし、又暴公、卿士と爲りて蘇公を譏するときは、蘇公卿士と爲るか、可否未だ知る可らず、但何人か暴公の侶たる、二人從行と云ふときは亦卿士なり、故に王肅云、二人俱に王の卿たり、相隨て行く、下に云ふ及ㇾ爾如ㇾ貫と、鄭云ふ俱に王臣たり、蘇公亦卿士たり。

二人從行　誰爲二此禍一　胡逝二我梁一　不二入唁一我　始者不ㇾ如　今云不二我可一

二人從ひ行く、誰か此の禍を爲す、胡ぞ我が梁に逝て、入て我を唁はざる、始は今の我を可ならずと云ふが如くならざりき、

【句釋】二人從行、暴公と其の侶との二人なり。從は同の意味に見よ、同行して以て王に見え讒言せしなり。誰爲此禍、此の二人が王に見え讒言せしに由て蘇公は其の位を退けられしなれば、誰か此の禍を爲ししやと詰問的の言を爲すなり。胡逝我梁、不入唁我、唁音「ゲン」、訓は「トブラフ」、普通の問と異なり、失國を弔するを唁と曰ふ。輔氏曰く、大抵讒人は自から是れ面目の以て人に見ゆる無し、然れども其の自から解く所以の者は、則ち必ず曰はん、我の此の人を見ざる所以のものは、此の人の見るに足らざるを以てなり。始者不如、今云不我可、交際せし始めは寧ろ今日の如くならんとは思はざりしならん、若し今日の如く我を讒して失國せしむるの惡を爲さば、當時交際せしは何故ぞと詰るなり。二句を

以て一讀法とす。

彼何人斯　胡逝二我陳一　我聞二其聲一　不ㇾ見二其身一　不ㇾ愧二于人一　不ㇾ畏二于天一

彼れ何人斯、胡ぞ我が陳に逝ける、我其の聲を聞けども、其の身を見ず、人に愧ぢず、天を畏れず、

【句釋】陳は『爾雅』に堂除を陳と曰ふ、本義は門內なれども、今門前の途と解して可なり、拘泥すべからず。我聞其聲、不見其身、身を見ざるも聲を聞て其の人を知る。不愧于人、不畏于天、人に愧ぢざるも、天を畏れずや、と訓ましたる本あり、人は輕く、天は重しとする說ならんも、輕重を分つ必要は斷じて無し。『雕題』の說を以て正しとす。

彼何人斯　其爲二飄風一　胡不ㇾ自北　胡不ㇾ自南　胡逝二我梁一　祇攪二我心一

彼れ何人斯、其れ飄風たり、胡ぞ北よりせざる、胡ぞ南よりせざる、胡ぞ我が梁に逝て、祇に我が心を攪す、

【句釋】飄風は『傳』に暴起の風とあり、彼の人の來去や何ぞ其れ飄風の如く速疾なるや。胡不自北、胡不自南、北と定めて入らず、亦南と定めて入らざるや。胡逝我梁、祇攪我心、我が梁に來りしかと思ふ暇も無き中に既に去る、我が心を攪亂する所以なり。『雕題』曰く、飄風は回風なり、回旋して定方なし、亦北よりにあらず、亦南よりにあらず、亦西東よりにあらず、此は是れ飄風なり。意に謂ふ南北

の定方あるときは、相値の端あり、今定方なし、則ち相見に由なし。此の說大に誤る、回旋の風なりとすれば、亦相値ふことあるなり、暴かに來りて暴かに去る飄風ゆゑ、亦如何ともするに由なきを言ふ。『雕題』は考に過ぎて却て失するなり。

爾之安行　亦不レ遑レ舍　爾之亟行　遑レ脂二爾車一　壹者之來　云何其盱

爾の安行も、亦舍ふに遑あらず、爾の亟に行く、爾の車に脂さすに遑あり、壹は之れ來れ、云何ぞ其れ盱しむる、

【句釋】爾之安行、亦不遑舍、舍は舍息なり、安かに行く時も、悠悠と我が舍に休息する事はせざるに、爾之亟行、遑脂爾車、其の疾行する時を見るに、車に脂は十分洒ぎある如きなり、然らば急ぐと言ふは其の信にあらざるべし、脂さす遑あればなり。壹者之來、云何其盱、一度は必ず來れよ、來らずして云何ぞ予をして徒らに其れを盱ましむるや。盱音「ク」、訓「ミアグル」目を擧げて望むなり。『鄭箋』に盱に作り曰く病なり、我をして何ぞ病しむると。盱は日始めて出るなり、病の義は何より來るか知るを得ず、盱を以て正しとす。

爾還而入　我心易也　還而不レ入　否難知也　壹者之來　俾二我祇一也

爾還さに入ば、我が心易也、還さにしても入らずば、否知り難也、壹は之れ來れ、我をして祇せ

俾よ。

【句釋】爾還而入、爾は爾の家へ還るならんが、其の還る際に入り來らば。我心易也。易は悅なり說なり。我が心の易び幾何なるぞ。還而不入、還るに臨んで我が期待に背き爾は遂に入り來らず。否難知也、ドウイフ譯だか判らぬの意味。壹者之來、俾我祇也、祇は安なり、一度は必ず來つて我に安心させよとなり。董氏曰く、是の詩此に至りて其の詞益す緩、其の譏を爲すを知らざるに似たり。

諒不二我知一　出二此三物一　以詛レ爾斯

伯氏吹レ壎　仲氏吹レ篪　及レ爾如レ貫　諒不二我知一　出二此三物一　以詛レ爾斯

伯氏壎を吹き、仲氏篪を吹く、爾と貫けるが如し、諒に我を知らず、此の三物を出して、以て爾に詛斯、

【句釋】伯は兄なり。仲は弟なり。壎は土製の笛、大は鵝子の如く、小は雞子の如し、上鋭り底平らかなり。篪は竹製の笛、長さ尺四寸、圍三寸、七孔にして一孔は上に出づ、横に之を吹く。兄弟朋友の和するは、宛かも壎篪の和する如くならざる可らず。及爾如貫、爾の壎と我の篪と相和して情而して六孔あり。好の厚きこと嘗て一貫して乖離せしこと無し。諒不我知、我を知て居ることは當然なり、而も我を知らざる人の如く我を譏するは何ぞ、諒に我を知らざる故なり。出此三物、三物は豕と犬と雞となり。此の三物を屠りて以て血を歃り以て誓ふ。以詛爾斯、詛は盟詛と熟語す。盟は將來を盟ひ、詛は過往を詛ふ。陳祥道曰く、盟之に繼に詛を以てすることあり。詛、盟に繫らざることあり、大事は必ず盟て或は詛す。

一事に三物悉く用ふるにはあらず、或は犬、或は豕、或は雞と各の其の便に任すものの如し、又將來を盟ふには牛を以てするが普通なり。又『毛傳』に依れば、民相ひ信せざるときは之を盟詛す、君は豕を以てし、臣は犬を以てし、民は雞を以てす。『釋文』の禍福の言を以て相要するを詛と曰ふ、今此の章の意は爾に於て我を知らずと言はば、此の三物を出して爾と此の事を誓はんとなり。誓ふは神明に誓うて二人の中を明らかにす、彼の讒者を責むること急なり。

爲鬼爲蜮　則不可得　有靦面目　視人罔極　作此好歌　以極反側

鬼たり蜮たらば、則ち得べからず、靦たる面目あり、人を視ること極まり罔し、此の好歌を作りて、以て反側を極む、

【句釋】爲鬼爲蜮、則不可得、鬼も蜮も名ありて其の實、人の肉眼にて見るべきものにあらず、是を以て得べからずと言ふ。蜮は音「ヨク」、訓「イサゴムシ」。『洪範』五行傳に鼈の如くにして三足、南越に生ず。陸璣曰く、一名射影、人岸上に在り、影水中に見る、人影を投ずるときは之を殺す、故に射影と曰ふ。南人將に水に入らんとす、先瓦石を以て水中に投じ、水を濁らしめ、然して後入る。或は曰く、含沙人の皮肌を射れば、其の瘡、疥の如し。『毛傳』に蜮は短狐なり、江淮の水皆之あり。『埤雅』に曰く、長角あり、横に生じて口の前に在り、弩檐の如く、其の角端に臨んで、曲て上弩の如く、氣を以て矢と

爲し、水勢に因て以て人を射る、俗に水弩と呼ぶ、鵝能く之を食ふ。此の如き者ならば到底得べからざるなり、鬼も蜮も暗處のものなればなり、有靦面目、視人罔極、爾は鬼や蜮の如く隱れて居るものと全く反對、靦然たる面目を呈露して人を視て或は詭り、或は讒し、其の惡を爲す究極する所罔きなり。作此好歌、以極反側、自ら好歌と曰ふ皮肉的の意味あること明白なり。古人は皮肉と曰はずして、好歌は善歌なりと曰ふ。我歌を作り以て爾の反側を極めんとなり。極の字、字に拘泥せず、見とか示とかの意味に見よ。『洪範』に無反無側、王道正直とあり。反側は不正直の代名詞なり。故に反覆偏側と熟語す。

【評論】何人斯は九章、一章は八句、八章は六句を以て成る。『說通』曰く、按ずるに桓王八年、王、蘇の忿生の田を以て鄭人に與ふ、是れ蘇公讒せられて國を失なふ、當に桓平の際に在るべし。只末章、以極反側の一言之を盡せり。暴公の人と爲り、是の反側の二字に過ぎず、蘇公一篇の旨、極の一字に過ぎず、但其の詞氣微婉、末章始めて之を發す。其の實章章皆な是れ此の意、或は某章を以て疑と爲し、某章を以て諷と爲し、某章を以て責と爲すは詩意を失す。章中、胡逝我梁等の語、俱に托して言ふ、伊誰云從二人同行、皆婉詞にして實事にあらず、通詩、只其の見ざるを言うて其の譖を言はず、六章言詛爾斯と言うて、斯の何事を指ず、末章其の反側を言うて、亦正しく其の譖の反側を言はず、之をして言を聞て愧ぢ使め、明言して言に甚だしうせず、安行の章、彼未だ暇無きに托せずして、其の暇あるにあ

らざることを窮む、爾還の章、彼必ず來らざることを知て、而して顧て其の來を望む、皆依違の詞を設爲し、小人をして轉動することを得ざらしむるのみ。伯氏の章、復平素相與して以て之を窮め、壎篪して以て國を謀るを提さげて言ふ、此便ち是れ貫く如くなる處、其の相知ざるにあらざることを信ずるときは、今日の事、必ず爲にする所ありて、我を知らざるにあらず、如然らずと曰ふときは請ふ之を詛はんと斯は卽ち此の事を指す、末章始めて直指して之を言ふ、前七章に通じて所謂極なり。

萋兮斐兮　成是貝錦　彼譖人者　亦已大甚

萋たり斐たり、是の貝錦を成せり、彼の人を譖する者も、亦已に大甚し、

【句釋】萋も斐も小さな文彩ある貌。卉木萋止の萋の如く、斐然成ㇾ章の斐の如し。成是貝錦、貝は水中の介蟲、錦文貝の如し。『孔疏』に錦にして貝を連ぬく、貝の文たることを知る、貝が錦文を成すにあらずして、錦文が貝を成すなり、貝文は錦に似て、實は錦にあらず、南箕は箕に似て、實は箕にあらず、故に以て讒言無實の喩と爲すなり。（陳臥子ノ說）彼譖人者、亦已大甚、譖は讒と同じ、人を譖する者は、針の小なる、棒の如く大と爲さざるを得ず。然れども譖せらるる者に於ては其の害を被むる大甚なり。『毛傳』曰く、巷伯は幽王を刺るなり、寺人讒を傷む、故に是の詩を作る。『箋』曰く、巷伯は奄官、寺人は內小

臣なり、奄官は上士四人、王后の命を掌る、宮中に於て近侍と爲す、故に之を巷伯と謂ふ、寺人の官と相近し、讒人、寺人を譖す、寺人又其の將に巷伯に及ばんとするを傷む、故に以て篇に名く。

哆兮侈兮　成是南箕　彼譖人者　誰適與謀

哆たり侈たり、是の南箕を成せり、彼の人を譖する者、誰を適として與に謀る、

【句釋】哆は音「シヤ」侈は音「シ」、哆は口を張るなり、侈は大なり、言を鋪張すること大なるなり。『傳』に曰く、斯の人自から謂ふ、嫌を避くるの審ならざるなり。昔は顏叔子、室に獨處す、鄰の嫠婦（夫ナキ嫠ナリ）又室に獨處す、夜暴かに風雨至り室壞る、婦人趨りて至る、顏叔子之を納る、而して燭を執しめて旦に放る。而して蒸盡くれば屋を搯きて之に繼ぐ、自から以て嫌を避くるの審ならずと爲す。其の審なる者の若きは、宜しく魯人の若く然るべし。魯人、男子室に獨處する者あり、鄰の嫠婦、又室に獨處す、夜暴かに風雨至り室壞る、婦人趨りて之に托す、男子戶を閉て納ず、婦人牖より之と言うて曰く、子何爲ぞ我を納ざるか。男子曰く、吾之を聞く、男子六十ならざれば閒居せず、今子も幼、吾も亦幼、以て子を納るべからず。婦の曰く、子何ぞ柳下惠の若く然らざる、門に逮ばざるの女を嫗めて、國人其の亂を稱せず。男子曰く、柳下惠は固より可、吾は固より不可、吾將た吾が不可を以て柳下惠が可を學ばんや。孔子曰く、柳下惠を學ばんと欲する者は、未だ是に似たるもの有らず。成是南箕、東方七宿の

中に箕星あり、俗に「ミボシ」と言ふ。此の星南方に見ゆる時を以て正體とす、故に南箕と稱す。四星あり二を踵と爲し、二を舌と爲す、踵は狹くして舌廣きは則ち大に張るなり、箕は名にして星が箕其の物にはあらず、然るに譖者は以て箕と定む、乃ち哆然侈然たる所以なり。虛を以て實とし、針を以て棒と爲すが譖者の常なり。彼譖人者、誰適與謀、譖者は定めし自己の一料見ならず、必ず主謀者あらん、其の主謀者は果して何人であるぞや、適は主の意味。

緝緝翩翩　謀欲譖人　慎爾言也　謂爾不信

緝緝翩翩として、謀つて人を譖せんと欲す、爾の言を慎しめ、爾を信あらずと謂はん、

【句釋】緝緝は『傳』に曰く、口舌の聲。『解頤』に曰く緝緝は麻の績、繼續して已まざるが如きなり。翩翩は『傳』に曰く、往來の貌。『解頤』に曰く、鳥の飛ぶ往來して自得するが如きなり、譖者が辨舌を縱横自由にして、其の往來の頻繁なるを言ふ。謀欲譖人、此の四字の意味前句に於て判る。慎爾言也、謂爾不信、慎は謹慎、妄言詐言譖言などする者は畢竟口に謹慎なき所以に由る、其の非を改め早く謹慎せずんば、遂に何人も爾を信認せざるに至らんとなり。

捷捷幡幡　謀欲譖言　豈不爾受　既其女遷

捷捷幡幡として、謀りて譖言せんと欲す、豈爾を受けざらんや、既にして其れ女に遷らん、

【句釋】捷捷幡幡、前章の緝緝翩翩と意義同じ、捷捷は俗に惡利口の義、幡幡は反覆の貌。豈不爾受、譖者の言を始め一度は、人之を受けん、二度三度に至れば人之を怪しむを以ての故に遂に爾を信用せざるに至らん。既其女遷、受けざるのみならず、翻て女の身に其の禍が遷らんとなり。『說通』曰く、前章の慎爾言也の二句は令終の道を以て之を敎へ、豈不爾受の二句は術中の禍を以て之を懼す、此の意無くんば是れ深く惡んで、其の及ばるるを幸ふの詞（其ノ禍ニ彼ガ罹ルヲ幸フナリ）猶ほ今人の、也須らく仔細にすべし、亦時あり女に輪著せんと曰ふがごときのみ、今謂く之を敎ふると、之を惡むと詩人に於て其の本旨孰れに在るや、研究すれば、此の詞義明白と爲るなり、一に解者の意に在り。

驕人好好　勞人草草　蒼天蒼天　視彼驕人　矜此勞人

驕人好好にして、勞人草草たり、蒼天蒼天、彼の驕人を視て、此の勞人を矜れめ、

【句釋】驕人は己が讒行を得意として氣勢の揚揚たる人。驕は「オゴル」なり。好好は喜ぶ形容。勞人は譖に遇て痛心する人。草草は憂ふる形容。箋』曰く、好好なる者は讒言の人を喜び、草草たる者は妄りに罪を得んことを憂ふと。此の好好の說大に誤る、驕人卽ち好好にして、好好の者は第三者にあらず、別に好好爺と稱する語あり馬鹿の代名詞とす、今の好好は此の意味にあらず。蒼天蒼天と呼ぶ者は、讒せらるる方のもの卽ち勞人なり。視彼驕人、矜此勞人、勞人が自から哀矜を天に求むるなり。

彼譖人者　誰適與謀　取彼譖人者　投畀豺虎　豺虎不食　投畀有北　有北不受

投畀有昊

彼の人を譖する者、誰を適として與に謀れる、彼の人を譖する者を取りて、豺虎に投げ畀へん、豺虎食はずんば、有北に投げ畀へん、有北受けずんば、有昊に投げ畀へん、

【句釋】彼譖の二句八字は前語を重言す、是れ詩の常なり。朱子曰く、甚嫉之なりと、語を重ること種種の詩にあり、是れ詩の常法として見よ、決して甚だ之を嫉む爲にはあらず。投畀豺虎、投は棄るなり、畀は付與なり、豺は狼の類、豺も虎も猛獸にして惡食のみを爲すを好む性なり。譖者を此等の惡獸に食はしめんとなり。有北は人煙の起らざる北方の蠻地を言ふ。有はヅケ字、意味なし。有昊は昊天なり、豺虎に與ふるも豺虎食はず、有北に棄つるも有北受けず、昊天に畀ふるも昊天も遂に受けず、何處へ投畀するも受くる者曾て無きなり。二句にて一意を成す句法、說明を待ずして知らるるなり。

楊園之道　猗于畝丘　寺人孟子　作爲此詩　凡百君子　敬而聽之

楊園の道、畝丘に猗はる、寺人孟子、此の詩を作爲せり、凡そ百の君子、敬しんで之を聽け、

【句釋】楊園之道、『傳』に楊園は園名とあり。朱子は曰く、下地なり、『疏義』に水に近き木、下隰に宜し故に楊園を下地と爲す。猗于畝丘、『傳』に畝丘は丘名とあり。朱子曰く、畝丘は高地なり、猗は加な

り。『疏義』曰く、加は其の楊園の上に出るなり、畝は田の壟なり、丘は田壟の如し故に畝丘と曰ふ。『箋』曰く、楊園の道に之んと欲せば、當に先づ畝丘を歷べし、以て此の讒人、大臣を譖せんと欲する故に近小の者より始まるを言ふ。寺人は內侍の官、王の正內に五人あり、極めて卑官、讒に遭うて寺人と爲るか、寺人の職中に讒に遭ふかは不明なり。孟子は寺人の字なり。『箋』に既に寺人と言ひ、復自から孟子を著はす者とあり。孟軻と混雜したるかの疑ひあり、孟子は字と見て可なり。此詩は卽ち孟子の作爲せる也。凡百君子、敬而聽之、此詩は或る者を戒むる爲めに作爲したるなれども、決して一人の爲めならず、總ての君子、此詩に於て聽く所あれとなり。劉氏曰く、其後王后太子及び大夫果して讒を以て廢する者多し。『雕題略』曰く、是詩の時世的知すべからず、劉氏の說は詩後の事なり、宜しく刪る可し。

【評論】巷伯は總て七章。四章は四句、一章は五句、一章は八句、一章は六句を以て成る。巷は是れ宮內の道名、秦漢に所謂永巷是れなり、伯は長なり、宮內の道を主どる官の長卽ち寺人なり、故に以て篇に名く。班固、司馬遷が贊に云ふ其の自から傷悼する所以を迹るに、小雅巷伯の倫。其の意亦巷伯本譖を被むり以て刑に遭ふを謂ふ。而して楊氏曰く、寺人は內侍の微者なり、王の左右に出入し王に親近して日に之を見る、宜しく間の伺ふべき無かるべし、今や亦讒に傷るるときは疎遠なる者知る可し。故に其の詩に曰く、凡百君子、敬而聽之と。在位をして戒しむるを知らしむ。其の說同じからず、然れど

も亦理あり、姑らく此に存す。

習習谷風　維風及雨　將恐將懼　維予與女　將安將樂　女轉棄予

習習たる谷風、維風と雨と、將に恐れ將に懼る、維予と女と、將に安んじ將に樂めば、女轉て予を棄つ、

【句釋】習習は『箋』に和調の貌とあり。谷風は東風なりとあり。東風なれば春風なること勿論なり。『雕題略』曰く、谷風は谷より出る風なり、盛怒の風習習然として續き斷えざるなり。邶風に詳なり。今謂ふ邶風の習習谷風、以陰以雨は『傳』に言ふが如く陰陽和して谷風至り、夫婦和して室家成り、室家成りて繼嗣生ず、是を以て黽勉同心、不宜有怒と次ぎに敍し來る。『傳』及び『箋』及び朱子は黽勉として夫婦同心なるが東風の習習と吹き、或は陰り、或は雨ふりて一家睦しと爲すものの如し。履軒先生は第三句の不宜有怒の方へ此の風雨を以て來る。若し夫婦和調して怒らざるときは、習習たる谷風の以て陰り以て雨ふること無きなりと爲すに在り。其の反すること唯千萬里ならず、然れども單に此の一二句に依て案ずれば漢土諸子の說是に似たる意もあるが、前章後章を反覆熟讀するときは漢土の諸子皆誤りて我が日本の履軒先生の說獨可なるを見るなり。維風及雨、『箋』曰く、風にして雨あれば、則ち潤澤行はる、朋友志を同うすれば、則ち恩愛成るに喩ふ、此の說の誤は前條の如く論ずるの要なし、盛

怒の惡風が、惡雨を吹送し來る、之を如何かせんや。乃ち將恐將懼、尋常和調の東風なれば誰か之を恐懼せんや、谷より出る風、盛んに怒るが如し、何ぞ恐懼せざるを得ん。維予與女、將安將樂、女轉棄予、朋友なりせば、如何なる惡風惡雨に遇ふも互に相扶けざる可らず、然るに女は獨、安樂にして予をして獨患艱に居らしむるやとなり。

習習谷風　維風及頽　將恐將懼　寘予于懷　將安將樂　棄予如遺

習習たる谷風、維風と頽と、將に恐れ將に懼る、予を懷に寘けり、將に安んじ將に樂めば、予を棄つること遺るるが如し、

【句釋】頽は「ツチカゼ」風の焚輪する者なり。『正義』曰く、頽は風上よりして下るもの。焚輪は旋轉の貌、乃ち回風なり、暴風なり。此の暴風に遇ふ、誰か恐れ誰か懼れざるものあらんや。或は曰く、頽風は上よりし、回風は下よりす、力薄くして耍に升ること能はず、谷風と相遇ふ、二風力を併せて乃ち相扶けて上る、以て朋友二人心を同うし、相率ゐて成るに喩ふと。谷風の外に頽風と廻風との二種の風あるが如く思へるの解は聊か恠しまざるを得ず、谷より出るの風が廻風と成り、頽風と成るなり。三種の風が箇箇別別に吹くものにあらざるなり。寘は置と同じ。懷は「フトコロ」なり。彼の恐懼すべき惡風に出會したる時は予を懷に寘くが如く愛惠して親しかりしが、己安樂の境界と成りし時は、棄予如

遺、予は本の惡風に苦しめらるるも、女は曾て顧みざるとなり。遺は遺忘なり。

習習谷風　維山崔嵬　無草不死　無木不萎　忘我大德　思我小怨

習習たる谷風、維山の崔嵬、草として死れざるは無く、木として萎まざるは無し、我が大德を忘れて、我が小怨を思ふ、

【句釋】維山崔嵬、山の高くして平らかならざる處を崔嵬と言ふ。崔嵬を習習然として吹く風、何ぞ和柔ならん、其の荒きこと知るべし。乃ち無草不死、無木不萎、草木共に此の猛烈なる風の爲め生長する能はず、草は死れ木は萎む。忘我大德、我は女が爲めに曾て恐懼する時に大德を施せり、今や女は安樂に處して、昔の我が恩を忘れたるか。思我小怨、我に怨ありと女は言はんも、其れは極めて小怨なり。

【評論】谷風は三章六句を以て成る。『毛傳』に谷風は幽王を刺るなり。天下俗薄く、朋友道絶ゆ。官人幽王に棄てられ、其の王を諷するに此の詩を以てしたるものならん、然れども確たる證左は無し。習習谷風は唐以後の詩人大底單に春風の意に用ひたるもの亦少なからず、『毛傳』に誤まられたるものなり。

蓼蓼者莪　匪莪伊蒿　哀哀父母　生我劬勞

蓼蓼たるは莪、莪にあらずんば伊蒿、哀哀たる父母、我を生みて劬勞せり、

【句釋】蓼蓼、蓼は一字にすれば「タデ」と稱する草、音「レウ」と爲る、今は二字の成語として音「リク」卽ち物の長大なる形容とす。何物か長大なる曰く莪和名「ヲハギ」又「コノフスマ」と稱する草なり、美草とす。匪莪伊蒿、蒿は和名「カラヨモギ」是れ賤草とす。蓼蓼たるものが若し莪にあらざれば則ち蒿、蒿にあらざれば則ち莪、此の二者の中であるとなり。朱子曰く、昔し之を莪と謂て、而して今は莪にあらず、特に蒿のみ、以て父母我を生み、以て美材と爲し、賴て以て其の身を終ふ可し、而して今乃ち其の養を得ずして以て死するに比すと。甚だ誤る。哀哀父母、生我劬勞、歐陽永叔曰く、周人勞役に苦しみ、其の父母を養ふを得ざる者、彼の蓼蓼然として長大なる者を見る、莪にあらずんば卽ち蒿、皆草木の微なるもの、其の茂盛此の如きもの天地生育の功に由る。思ふ我の生るるや、父母養育して亦劬勞す、而して我終養以て報ゆるを得ざるなり。陳臥子曰く、此の詩孝子役に行き其の親を喪ふ者の作る所、而して其の終養を得ざる者は時の不淑に遭へばなり、必ずしも行役一路のみならず、流離顚沛皆是れなり。

蓼蓼者莪　匪莪伊蔚　哀哀父母　生我勞瘁

蓼蓼たるものは莪、莪にあらざれば伊蔚、哀哀たる父母、我を生みて勞瘁せり、

【句釋】蔚は音「キ」訓「メハジキ」と稱する草、一名牡蒿、三月始めて生じ、七月始めて華、胡麻の

華の如くにして紫赤、八月角を爲す、小豆に似、角銳にして長し。嚴粲曰く、蔚は馬薪蒿なり、蒿の尤も麤大なるものなり。郭璞曰く、子無きもの故に牡蒿と曰ふ。瘁は病なり、劬勞の極病むに至るなり。朱子曰く、詩人義を取る多く首章に在り、次章に至りては、韻を變じて以て章を成す、此れ蔚を擧げて以て蒿の麤大を言ふのみ。

餅之罄矣　維罍之恥　鮮民之生　不如死之久矣　無父何怙　無母何恃　出則銜恤　入則靡至

餅の罄矣、維罍の恥、鮮民の生けるは、死せるの久しきに如かず、父無くんば何をか怙まん、母無くんば何をか恃まん、出でては則ち恤を銜み、入れば則ち至ること靡し、

【句釋】餅之罄矣、維罍之恥、餅音「ヘイ」訓「カメ」、罍音「ライ」訓「モタヒ」なり、瓦を以て製する酒器、餅は小にして、罍は大なり、罄音「ヘイ」、訓「ツクル」盡なり、「ムナシ」空なり、小なる餅に酒の罄るは大なる罍の恥なり、何故に罍は餅に恥づと言ふに、大にして盈るは畢竟小に分たざればなり、民貧にして王富むは、民の恥にあらずして、王の恥なり、小は子に喩へ、大は父母に喩ふ、子の窮厄は偸ち父母の恥なり。鮮民之生、不如死之久矣、鮮民は寡民とか、孤獨の民とか云ふの類、勞役の者が自稱しての言なり、生れて父母を供養するを得ずんば、生きんより寧ろ死するに如かずとなり。無父何怙、

怙は賴なり。無母何恃、恃は負なり、人生るれば怙恃するもの父母以上の者有ること無し、而して今我は此の怙恃する父母無し。出則銜恤、入則靡至、門を出づれば則ち恤卽ち憂を銜むより外無く、門に入れば則ち歸する所無し、終天の恨を抱き、歸投する所無し、故に死するに如かず。安成の劉氏曰く、餅を以て父母に比し、罍を以て子に比す、但其の相資の義を取て、義を餅罍の大小に取らざるなりと。是の說も亦通ず。

父兮生我　母兮鞠我　拊我畜我　長我育我　顧我復我　出入腹我　欲報之德

昊天罔極

父や我を生めり、母や我を鞠へり、我を拊で我を畜み、我を長じ我を育す、我を顧み我を復し、出入我を腹にせり、之の德を報せんと欲すれども、昊天極り罔し、

【句釋】父兮生我、母兮鞠我、此の八字は一一の字句に拘泥すべからず、要するに父母我を生鞠せりの意味なり、鞠は養ふなり、拊は撫摩なり、打の反對。畜は養なり。長も育も皆同じ、畜は之を乳哺するなり、長は南風の萬物を長養するが如く、其の身體を調和して、其の血氣を滋養し、日夜其の長大を望む是れなり。育は覆育なり。『孔疏』に曰く、其の寒暑、或は身體にて之を煦嫗し、覆近して愛育するを謂ふ、『禮記』に所謂、煦嫗覆育是れなり。顧は旋視なり。『孔疏』曰く、之を去て反顧するを謂ふ。謝氏

曰く、父母行て兒隨はざるときは之を回顧する是れなり。復は反覆なり。嚴氏曰く、之を顧み又顧み、反覆して暫くも能はざるを謂ふ是れなり。腹は懷抱なり、父母の子に於る、一時も暫舍する能はざるを謂ふ、或は出、或は入、往として之を懷抱ざるは無きなり。欲報之德、昊天罔極、父母が此の如く我を育せし功德の大に報いんと欲するも、父母の德は昊天の極まり罔きが如く其れ大なりとの意なり。古義や新義にて云云する說は今用ゐざるなり。

南山烈烈　飄風發發　民莫不穀　我獨何害

南山烈烈たり、飄風發發たり、民穀からざること莫し、我獨何の害かある、

【句釋】南山は終南山なり。烈烈は屹然として立る形容なり。飄風は忽然として來る風、乃ち發發を以て其の形容とす、共に氣象の凄慘を言ふ、王の我を使役する甚だしきを興す。民莫不穀、『箋』は穀を養と注す。曰く民皆其の父母を養ふを得、我獨何の故に此の寒苦の害を覩ると。朱子は穀を善と注す、善は則ち父母を養ふを得るを以ての故に善なり、是を以て養も善も其の義共に通用して可なり。我獨何害、民皆穀きに我獨此の害に遭ふは何ぞや。

南山律律　飄風弗弗　民莫不穀　我獨不卒

南山律律たり、飄風弗弗たり、民穀からざること莫し、我獨卒へず、

【句釋】律律は烈烈と同じ。弗弗は發發と同じ。不卒は不終なり、上章の意を重敍して、其の養を終ふることを得ざるの意を言ふ。

【評論】蓼莪は六章、四章は四句、二章は八句を以て成る。幽王、民を驅役して、其の父母を養ふを得ざらしむ、民乃ち此の詩を作り之を刺る。晉の王哀、父が非罪に死せしを以て詩を讀む每に哀哀父母、生我劬勞に至り、三復して涕を流す、業を受る者、爲めに此の篇を廢すと。羅氏曰く、魏の嘉平四年、司馬昭に詔して監軍と爲し吳を攻しむ。吳の大將諸葛恪之を破る、死する者數萬人。昭問て曰く、今日の事、誰か其の責に任ぜん。司馬王儀對て曰く、責元帥に在り。昭怒つて曰く、司馬は罪を孤に委んとするか。遂に之を斬る。子の哀、父の非命を痛み、隱居して敎授す。三たび徵す、皆就かず、墓側に廬して、旦夕常に墓所に至り、拜跪悲號す、司馬昭が子、炎（仲達）魏を簒うて晉と爲す、哀終身未だ嘗て西向して坐せず、以て臣たらざることを示す。

有ㇾ饛簋飧　有ㇾ捄棘匕　周道如ㇾ砥　其直如ㇾ矢　君子所履　小人所視　睠言顧之
潸焉出ㇾ涕

饛たる簋の飧あり、捄たる棘匕あり、周道砥の如し、其の直きこと矢の如し、君子の履く所、小人の視

る所、睠みて言に之を顧み、潸焉として涕を出す、

【句釋】有饛簋飧、饛は滿なり、簋は簠簋と熟語して祭器なり、簠は外圓にして內方、簋は內圓にして外方なり、飧は熟食なり。熟食とは曹氏曰く、人旦には飯を食ひ、夕には飧を食ふ。蓋し水を以て飯に澆ぐ是れなり。有捄棘匕、捄は曲なり、棘は棘木、匕は匙なり、飯を盛る爲めか、食ふ爲めか、是れ必ず食ふ爲めならん。周道如砥、砥は礪石なり、平かなる物、周道卽ち大道は平かなるものなり。其直如矢、矢は直ならざれば用を爲さず、周道は礪石の如く平に、且矢の如く直ぐなり。君子所履、小人所視、君子は在位の官人、小人は在野の庶民、周道は官人も庶民も同じく履き同じく視る、履と視とは韻字の爲めなり別に區別なし、古も今も異ならず。睠言顧之、睠は反顧乃ちふりかへりみる。潸焉出涕、涕の下る形容を潸焉と曰ふ。此の章の意、饛簋は不平なり、捄棘は不直なり、而して周道は平且直なり。詩を說く者の所謂反興なり。亂を刺る詩、東國は役に困しみ財に傷る、譚國の大夫、是の詩を作りて其の憂懷を敍ぶ。魯の莊公十年、齊の師譚を滅す、周道は平直古の如くなるも、時正に平直ならず、今古を俯仰すれば、誰か潸焉と涕を出さざる者ぞ、譚は當時に在て小國、今日の山東省萊州地方なり。

小東大東　杼柚其空　糾糾葛屨　可以履霜　佻佻公子　行彼周行　既往既來

使我心疚

小東も大東も、杼柚其れ空し、糾糾たる葛屨、以て霜を履む可し、佻佻たる公子、彼の周行を行く、既に往き既に來れり、我が心を疚ましむ、

【句釋】小東大東、小國も東に在り、大國も東に在る意味、此の時周の都は洛邑卽ち今日の河南省河南府、前代の鎬京卽ち陝西省西安府に比すれば是れ東方なり。然れども諸侯の國は此れより猶ほ東に多く在るなり。「小モ東大モ東」と訓むも亦通ず。『箋』に曰く、小大は賦斂卽ち租稅の多少を謂ふなり、小も大も東に於てし、大も亦東に於てし、其の政偏に砥矢の道を失するを言ふ、小國の租も大國の稅もの字を加ふれば猶更に可。杼柚、杼は緯を持する者、柚は經を受る者。譚は小國にて他の財無し、唯絲麻のみ、其の絲麻も今日は其空遂に盡きたり、苛斂の結果なり。糾糾は「アザナフ」絞なり、屨の製作を形容す。葛屨、葛の皮を以て製せるクツ夏日に用ふるものなり。可以履霜、夏日の屨を以て、之を冬日に用ふ、其の勞苦の甚大なるを言ふ。佻佻は堂堂の反對、身體の軟弱を言ふ。公子は伯爵とか子爵とか稱する貴族の子を言ふ。未だ嘗て臥薪嘗膽の苦を知らざる人なり。行彼周行、周行は大路の意。『箋』曰く、公子葛屨にして、霜を履み轉餫を送る、（食料チ運搬ス）因て周の列位に有る者に行かしめ幣を發するを見る、困乏と雖も猶ほ止ことを得ざるを言ふ。既往既來、使我心疚、疚は病なり、此の公子が此の勞苦に當り、彼此を往來す、我卽ち大夫をして病ましむるに至る、憫惜に堪へざるなり。公子此の如し、賤民の勞苦は

勿論のことなり。

有ㇾ洌沈泉一　無ㇾ浸ニ穫薪一　契契寤歎　哀ニ我憚人一　薪是穫薪一　尚可ㇾ載也　哀ニ我憚人一

亦可ㇾ息也

洌たる沈泉あり、穫薪を浸すこと無かれ、契契として寤めて歎ず、我が憚人を哀しむ、是の獲薪を薪とせば、尚はくは載す可し、我が憚人を哀しむも、亦息はしむ可し、

【句釋】洌は洌寒。沈泉は側出を言ふと解して、水の湧く可き處にあらずして湧き出る水を言ふ。無浸穫薪、山より穫來る薪を積みし處を漬すことなかれ、漬すときは薪腐ればなり。契契は憂苦を形容する文字。寤歎、寐る間は憂苦を忘る、寤れば歎息するなり。哀我憚人、憚は癉に同じ、勞なり、我國の勞動する者を大夫が視て以て哀しむなり。薪是穫薪、履軒先生曰く、上の薪字は浸の誤ならん、音近きを以て誤ると、洵に然り。是の穫薪を浸すはと、前語を再用して始めて下の尚可載也の意味が生ずるなり。惕齋曰く、既に穫たる薪を舍て置かずして、則ち薪とせば尚はくは車に載せ還り貯へ置く可きなり。誤字に氣が付かざるの說、深く咎むべからず。薪は浸したるも車に載せ還り之を乾かせば乃ち用ふべきなり。哀我憚人、亦可息也、此の哀我憚人は第四句を再用したるに依ても浸我穫薪の再用は毫髮も疑ふ餘地無きなり。浸漬せる薪も亦其の用を爲す、我が勞苦の人も時には其れ休息して、平生の勞を

慰めよとなり。『疏義』曰く、此れ物を愛する心を以て、人を愛するの心を興す、則ち上章の意を承けて又憫惜すべき人を擧げて、願望の詞を致すなり。徐光啓曰く、徵發の煩、供億の困、皆勞と言ふ可し。人力を盡さず、人財を盡さず、皆息と言ふ可し。顧氏曰く、上下各の四句、一正一反の詞、此れ又興の一體なり。

東人之子　職勞不ㇾ來　西人之子　粲粲衣服　舟人之子　熊羆是裘　私人之子

百僚是試

東人の子、勞を職にすれども來らはず、西人の子、粲粲たる衣服せり、舟人の子、熊羆是れ裘とす、私人の子、百僚に是れ試ひらる、

【句釋】東人之子、東人は譚國の人を言ふ。西人は京師の人を言ふ。所謂周の民は西人なり。職は專主、來は慰撫、東人は勞役に從事し、勉强して倦まざるも曾て慰撫されず。西人は粲粲卽ち美麗なる衣服を衣て逸樂す。舟人は舟楫の人、極めて賤民なり。此の賤民も周民の故を以て熊羆是裘、大人君子の著する服は是の熊裘なり羆裘なり、然るに舟人身賤しくして是の盛妝を爲す、以て其の富るを知る。私人は私家卑隷の屬、極めて親近者の子。百僚是試、僚は官なり、試は用なり、親近の徒輩は無能なるも猶ほ登用せらるるなり。舟人私人を擧げて猶其の他の者を含む。我邦にて明治中興後、長閥とか、薩閥とかの

外は才あるも用ひられざるが新らしき例なり。周代之れありとすれば末劫恠しむに足らず。首二句が東人にて、三四以下盡な西人を言ふ。

或以其酒　不以其漿　鞙鞙佩璲　不以其長　維天有漢　監亦有光　跂彼織女
終日七襄

或は其の酒を以てすれども、其の漿を以てせず、鞙鞙たる佩璲も、其の長を以てせず、維天に漢あり、監みて亦光あり、跂たる彼の織女、終日七襄せり、

【句釋】或以其酒、不以其漿、朱子は此の二句を解して曰く、東人或は之を饋るに酒を以てすれども、西人曾て以て漿と爲さず。履軒先生曰く、是れは西人と東人とを比較するなり、各の其の有無に就て言ふ、西人は用ふるに酒あるも、東人は漿すら無きなり、東人が西人に酒を饋るにあらざる可し。鞙鞙は玉の長き貌。佩璲、佩は帶なり、璲は玉なり、西人は之を帶ぶるも、東人は之を佩ばず。不以其長、西人は長佩あるも、東人は之長からざるなり。維天有漢、無數の星が聚まり河の如きの形を爲す、之を漢と言ふ、雲漢、河漢、星漢と連用す。監亦有光、漢は瞥見光なきが如きも熟視すれば亦其の光あるを知る。跂は跂踵と成語すれば、「ハヒアルク」なり。然るに古人隅貌と注す。乃ち漢隅に處る也。織女は三星鼎足の如く跂然隅の如し。彼織女、星の女性を織女と言ふ。終日七襄。七襄は古人未だ之を審にせず。

履軒先生曰く、曉る可らず、或は襄は登なり、一日にして七回機に登りて織るか、豈流俗是の言あるや、未だ當否を知らず。豐城の朱氏曰く、貧富勞逸の均しからず、吾將に曷に愬へんや、亦唯之を天に愬へんのみ、漢の光ある、其れ亦能く我を監視せんや、織女の七襄其れ亦能く文章を成して以て我に報せんや、其の詞の婉にして迫らざること此の如し、詩の忠厚亦見る可し。

雖則七襄　不成報章　睆彼牽牛　不以服箱　東有啓明　西有長庚　有捄天畢
載施之行

則ち七襄すと雖も、報章を成さず、睆たる彼の牽牛も、服箱を以てせず、東に啓明あり、西に長庚あり、捄れる天畢あり、載ち之を行に施せり、

【句釋】雖則七襄、前章にて此の意を知れ。不成報章、一日に七度機を織るも、未だ嘗て我が報章を織成せず、古人の書牘帛を用ふること知るべし。『箋』曰く、織女は織の名のみ、則ち西あるも東なし、人の織や相反報して文章を成すが如くならず。睆彼牽牛、睆は星の光を形容す、牽牛は男性の星。不以服箱、『傳』に服は牝服なり、箱は大車の箱、睆然たる牽牛も亦名のみ、既に牛を牽かず、況んや我が車を牽かんや、此の星も到底牝服の箱に用ふ可らず、牛の用ふる所を以て牝服と曰ふ、平地載任の車を大車と曰ふ、車內に物を容る處を箱と曰ふ。東有啓明、西有長庚、啓明は太白星なり、又俗に曉星と喚ぶ、

長庚も太白なり、俗に黄昏星と喚ぶ、或は日に先つて出で、或は日に後れて入る。顧氏曰く、曉星、黄昏星、一星たること疑ひ無し、但二句實に一時に竝に有るにあらず、偶然に對待して之を言ふ。『箋』曰く、啓明長庚、日を助るの名あれど實は光なき也。有捄天畢、天畢は西方七宿の畢星、此の星兎を掩る畢の如き狀を爲せば此の名ありと言ふ。捄は曲なり。載施之行、羣星の行列する中に交はり施くのみ、決して兎を掩るの用を爲さずとなり、織女星も牽牛星も曉星も黄昏星も天畢も、日を助けて晝と爲し我をして營作せしむること能はざるなり。

維南有箕　不可以簸揚　維北有斗　不可以挹酒漿　維南有箕　載翕其舌　維北有斗

維れ南に箕有り、以て簸揚す可からず、維れ北に斗有り、以て酒漿を挹む可からず、維れ南に箕有り、載ち其の舌を翕く、維れ北に斗有り、西に柄を之れ揭ぐ、

【句釋】箕斗共に星名。朱子曰く、夏秋の間を以て南方に見る、北斗と云は其の箕の北に在るを以てなり。或は曰ふ北斗は常に見はれて隱れざるものなり。不可以簸揚、農具としての箕は米の穅を揮ひ落す物なり。簸は卽ち「ヒル」なり、然れども此の箕は星の名にして、簸揚するの用と爲らず、星は名のみにして實無し。不可以挹酒漿、斗は酒や漿を計る器具なり、此の斗は星なれば亦名のみにして實無し。

載翕其舌、翕は引なり、箕星は上星に向つて其の舌を引て反て呑噬する所あるが如き狀なり。西柄之揭、北斗は西に向つて其の柄を揭げ、反て東に向つて挹取所あるが如き狀なり。此の二星共に西人を助けて、東人を困しむるが如し。怨を極め恨を盡くす詞なり。

【評論】大東は七章八句を以て成る。國の將に滅びんとするに會うて、大夫の心情良とに憫憐する所あり、詩の巧妙なる遂に後世能言の士の能く及ぶ所にあらず。千載の下、猶ほ其の怨恨を想像せしむ。

四月維夏　六月徂暑　先祖匪人　胡寧忍予

四月維夏、六月徂暑なり、先祖人に匪ずや、胡ぞ寧く予に忍べる、

【句釋】四月維夏、三月を以て春は盡く、四月を以て初夏とす、余月、除月、維夏、正陽月、共に四月の異名とす。六月徂暑、九十日を以て一夏又は三夏と稱す、六月三十日を以て暑は徂き去るなり。且月、遯月、徂暑、溽暑、共に六月の異名なり。先祖匪人、人は仁愛を以て人たるの本能とす、我が先祖は何者ぞ。胡寧忍予、人たるの道は忍び難き所に在て、人の人たる本能を見る、然るに先祖は予をして此の禍亂に遭うて困厄せしむるに忍びたるなりと。怨言を發するに所なく、先祖を喚起して悖慢の言を出すに至る、夏日は炎熱怖る可し、然れども其の怖る可き炎熱も六月に徂き去る、而して我の禍亂は容易に

徂き去る無し、禍亂の酷烈は、炎熱の酷烈よりも猛なり、怨恨を遺るに所無く、遂に之を天と父母とに遺るは、詩人の常なり、孔子亦深く之を責めず、其の罪にあらずと爲す。

秋日淒淒　百卉具腓　亂離瘼矣　奚其適歸

秋日淒淒たり、百卉具腓みぬ、亂離に瘼矣、奚にか其れ適歸せん、

【句釋】秋日淒淒、七月は初秋、八月は仲秋、九月は晩秋、淒淒は涼風と解すれども晩秋を以て其の最と見るべし。百卉具腓、卉は『毛傳』及び『集注』共に草と言ふ。履軒先生曰く、偏に木を指す、草を兼ず。今謂ふ卉は元來卉にて三十の合字なり。『字書』に𡿧ありて卉なし、而して𡿧は草木を通じて言ふ。『詩』に山有嘉𡿧、侯栗侯梅、此の字艸に從ふ、今人多く三十の卉を以て之に代ふ便に趨るなり。『法華經』に卉木叢林の語あり、草にも木にも通用の說は極めて正しからん、今此の卉は草木具に腓の意味、草と偏せず、木と偏せずして可なり。腓は音「ヒ」、訓「コブラ」、脛の腨なり、脛腨は肉の肥たる處、肉瘦るに至りては乃ち病なり。亂離瘼矣、亂は亂世、離は離憂、瘼は病。奚其適歸、奚は何、適は之なり、何處に我之き歸らんやと歎くなり、秋の肅殺威を用ふるときは何物か免る可き、亂離害を爲すときは何處にか安んず可き、草木の病皆然り、人民病む者亦然り、亂世の氣象、秋の凋衰と同じ、故に以て興を起すなり。

冬日烈烈　飄風發發　民莫不穀　我獨何害

冬日烈烈たり、飄風發發たり、民穀からずといふこと莫し、我獨何を害へる、

【句釋】冬日、十月は初冬、十一月は仲冬、十二月は晩冬。烈烈は三冬の中仲冬より晩冬の間の酷寒を言ふ。飄風以下の句は前に辨あり。『疏義』曰く、日寒ときは風疾し、其の氣相似たり、民穀して我害あり、其の情何ぞ相似ざるや、但亂るるときは俱に害あり、而かも然云ふは自から傷むの甚しきのみ、亂世の物情、冬の慘憾と同じ故に以て興を起す。

山有嘉卉　侯栗侯梅　廢爲殘賊　莫知其尤

山に嘉卉あり、侯栗侯梅、廢りて殘賊を爲す、其の尤を知ること莫し、

【句釋】山有嘉卉、侯栗侯梅、山中の栗や梅は徹底して嘉卉たるなり、變じて惡木とは成らず。廢爲殘賊、廢は廢改、初め善なるものが後に惡と改まる、其の善臣たるものが殘賊卽ち不善臣と廢るなり。『疏義』曰く、物の美は其の美を全うすること見るべし、人の善なる者變じて惡なる者、知る可らず、物性常あり、人性常無し、此れ人物に如かざるを以て興を起す。昆湖曰く暗に王を指すと。

小雅　小旻

相彼泉水　載清載濁　我日構禍　曷云能穀

彼の泉水を相れば、載ち清み載ち濁る、我日に禍に構ふ、曷か云に能く穀けん、

【句釋】相は視なり。載清載濁、『箋』曰く、泉水の流、一は清み一は濁ると。泉水は一なるも、流出して一方は清、一方は濁と成ると解したる也。朱子曰く、時あつては清み、時あつては濁る、朱説を以て可とす。我日構禍、曷云能穀、構は遭なり。『箋』に合集と解す。今用ひず。日日禍に遭ふを言ふ。泉水の如く時に清み時に濁るの狀と異なり、害に遭ふの已む時無きなり、反對して以て興を爲す。

滔滔江漢　南國之紀　盡瘁以仕　寧莫我有

滔滔たる江漢は、南國の紀、盡瘁して以て仕ふ、寧ぞ我を有りとすること莫き、

【句釋】滔滔は大水の貌。江漢は大江と漢水なり。南國之紀、江は源を星宿海より發し、漢は源を甘肅に發するなれば、共に南方なり、紀は綱紀、諸川の綱紀と爲るものなり。盡瘁以仕、「一」寧莫我有、『箋』曰く、瘁は病なり、仕は事なり、今王盡く其の封畿の内を病しむるに兵役の事を以てす、羣臣の土地を有する者をして、曾て自から保有する者無からしむ、皆危亡を懼るるなり。吳楚舊貪殘と名く、今周の政反つて如かず。履軒先生曰く、江漢猶ほ南國の紀たり、暗に王若し能く我を用ひば當に王國の紀と作らんを伏するなり。朱子曰く、今や盡瘁して以て仕ふ、而して王何ぞ其れ我を有とせざるや。『箋』の說を以て最下とす。

匪鶉匪鳶　翰飛戾天　匪鱣匪鮪　潛逃于淵

鶉に匪ず鳶に匪ず、翰ち飛んで天に戾らんや、鱣に匪ず鮪に匪ず、淵に潛逃せんや。

【句釋】鶉は鵰、卽ち大鷲を言ふ。鳶は鷲の屬、鷲より小。翰飛を高飛と解する說は今用ひず、翰を張て飛ぶなり。鱣は「オホシビ」と訓す大魚なり。「ウナギ」も亦鱣と稱す。鮪は「シビ」一は高く天に戾り、一は深く淵に入る、我は天にも地にも逃るる所なきを言ふ。慶源の輔氏曰く、此の章亦興體、但托する所の物ありて、興する所の辭無し、故に之を興と謂ふ可らず、又四箇の匪字あり、故に亦之を比と謂ふ可らず、只以て賦と爲すを得。顧氏曰く、鱗案ずるに六義一定の目あるにあらず、皆是れ後人看出す。嗚乎顧氏の卓見、迂儒の膽を奪ふべし。

山有蕨薇　隰有杞桋　君子作歌　維以告哀

山に蕨薇あり、隰に杞桋あり、君子歌を作り、維以て哀を告ぐ、

【句釋】山有蕨薇、隰有杞桋、此の解前にあり、桋は赤棟なり、和名「タルキ」樹葉細にして枝銳、山中に叢生す。君子作歌、維以告哀、蕨薇は山、杞桋は隰と、各の其の所を得て、以て欣欣たり、以て蒼蒼たり、我獨其の所を得ず、是を以て歌を作り、我が哀痛の心情を告白す。

【評論】四月は八章四句を以て成る。大夫幽王を刺るなり、在朝の臣貪殘にして、在野の者禍亂に苦しむ、章章此の意を以て一貫す。小旻の什、十篇六十五章、四百十四句、此に至りて終る。

北山の什二の六

陟彼北山　言采其杞　偕偕士子　朝夕從事　王事靡盬　憂我父母

彼の北山に陟り、言に其の杞を采る、偕偕たる士子、朝夕事に從がふ、王事盬きこと靡し、我が父母を憂へしむ、

【句釋】偕偕は强壯の貌。士子は此の詩を作る人の自稱なり、大夫役に行て此の詩を作る、自から言に北山に陟り杞を采て食ふ者は、皆强壯の人にして朝夕事に從ふ者なり、蓋し王事以て勤めずんばあるべからざるを以て、是を以て我が父母の憂を貽す。（以上朱子ノ說ナリ）陟彼北山、言采其杞、言の字は「ココニ」にあらず我なり、我が北山に陟りて杞を采る、食ふ可きの物に非ず、己行役して其の事を得ざるに喩ふ、（鄭箋ノ說ナリ）是れ他人の采るのを言ふにあらずして自から采ると爲す、杞は枸杞とすれば食ふべき物なり。畢竟食ふ爲めに采るならん。余故に謂ふ、言は我にあらず他なり、彼は北山に陟りて杞を采るなり、我は王事の爲め朝夕他の事に從ふなり、朱子の說乃ち箋に勝る、王事云云の解は前にあり。

溥天之下　莫非王土　率土之濱、莫非王臣　大夫不均　我從事獨賢

溥天の下、王土に非ざるは莫し、率土の濱、王臣に非ざるは莫し、大夫均しからず、我事に從うて獨賢

なり、

【句釋】溥は大なり。率は循なり。濱は涯なり。王の有する土地は廣大なり、王の使役する臣民は又衆し、何を求めて得ざらん、何を使うて行なはれざらん。大夫不均、王の人を用ふる均しからざる意なり、王を稱せずして大夫を稱す、大夫は爲政者なればなり。我從事獨賢、我を賢才なりと稱して我一人をして事に從はしむ。他人皆逸樂して、我獨勞苦するを恨むなり。

四牡彭彭　王事傍傍　嘉我未老　鮮我方將　旅力方剛　經營四方

四牡彭彭たり、王事傍傍たり、我が未だ老いざるを嘉し、我が方に將なるを鮮なりとし、旅力方に剛しとして、四方を經營せしむ、

【句釋】四牡彭彭、壯なる貌を彭彭と言ふ、四馬を驅て奔走の壯なるなり。王事傍傍、多事の貌を傍傍と言ふ。四馬を驅て東奔西走、王事の爲め勞役するなり、息ふを得ず、已むことを得ざるなり。嘉我未老、嘉は嘉稱にて我が年猶ほ老いざるを王が嘉稱するなり、嘉稱する所以は用ひて以て勞役せしめんが爲めなり。鮮我方將、此の如く將なる者は其の人鮮少なりと稱す。旅力方剛、旅は膂の本字、膂は脊骨なり、脊骨の健なる者は力强きなり。經營四方、四方を巡回せしめて經策營作し、息ふに暇あらしめざるなり。謝疊山曰く、此の詩本役使均しからず、獨王事に勞するが爲めに作る。此の章乃ち曰ふ天子

我が未だ老いざるを嘉し、我が方に壯なるを善とし、我が旅力方に剛しとして、以て四方を經營せしむ、故に獨任使せられ反つて王を以て知己と爲す、忠厚の至りなり。

或燕燕居息　或盡瘁事國　或息偃在牀　或不已于行

或は燕燕として居息し、或は盡瘁して國に事へ、或は息偃して牀に在り、或は行に已まず、

【句釋】或る一人は燕燕として安居休息し、或る一人は盡瘁して國家に從事するとなり。前章の王が人を用ふる不平等なるを重ねて敍するなり、燕燕は安逸なる形容、盡瘁は勞苦する意味、努力と見て可なり、瘁は病なりなどと解すべからず。或る一人は偃臥して牀に在り、或る一人は行役して已まざるなり、一句と三句は彼なり、二句と四句は我なり、燕燕たる者は牀に在り、盡瘁する者は行に在るなり。

或不知叫號　或慘慘劬勞　或棲遲偃仰　或王事鞅掌

或は叫號を知らず、或は慘慘として劬勞す、或は棲遲して偃仰し、或は王事に鞅掌す、

【句釋】或不知叫號、朱子曰く、深居安逸して人聲を聞かざるなり。叫號を解して普通の人聲と爲す、誤りの甚だしきこと言語に斷ゆ。叫號は字の如く悲痛に發する聲なり、不平にて叫號する者もあらん、貧にて叫號する者もあらん、要するに或る一人は人生の苦痛を知らずに安逸に身を處すと云ふことなり。或慘慘劬勞、是れ卽ち叫號を發する人なり、此の慘勞の人を彼は知らざるなり。或棲遲偃仰、棲遲は悠悠

閒居の意味、偃は偃仰、又は偃臥、又は偃息と熟語して、身の安逸としては最第一の墮落なり、俗に「アフムキテ臥ス」事なり。或王事鞅掌、王事は卽ち天下の事、鞅掌は鞅は荷なり、掌は捧持なり、脊に荷を負ひ、手に物を持つ、是れ以上の活動は出來ず。『傳』に失容なりと注す、身手此の如し、容儀を爲すの暇なければなり。叫號を知らざる者は偃仰し、劬勞する者は鞅掌する。一句は三句の人、二句は四句の人なること前章と同じ。

或湛樂飲酒　或慘慘畏咎　或出入風議　或靡事不爲

或は湛樂して酒を飲み、或は慘慘として咎を畏れ、或は出入風議し、或は事として爲さざること靡し、

【句釋】湛樂は逸樂と同じ。畏咎、事に從ひながら錯誤あるときは其を罪過として咎めらるるを畏るなり。或出入風議、逸樂の一人は閒散なるまま小人の常として他人の噂を爲す、是を風議と言ふ。『箋』に風は放なりと。甚だ神解とす。履軒先生曰く、風議は從容議論なり。舊說の範圍を脫せず、噂と云ふ意味に氣が付かざりしなり。或靡事不爲、咎を畏るる我は何事も爲さざるは靡きなり、是れも前章と同じく湛樂の徒は風議し、慘慘の者は事として爲さざるは靡きなり。唐詩に於て隔句對なる法あり、此等の詩章より來る法とす。

【評論】北山は六章。三章は六句、三章は四句。幽王の人を用ふる私あるに依て、辛勞する者、此の詩

を作り以て諷刺するなり。詩としての妙は甚だしく怒罵に至らず、忠厚の旨を存し、讀む者をして自から痛嘆を發せしむ。詩の一書匪字多く非字少なし、此の章に於て始めて之れあり、留意して讀む可し。

無將大車　祇自塵兮　無思百憂　祇自疧兮

大車を將くること無かれ、祇に自から塵されん、百憂を思ふこと無かれ、祇に自から疧まん、

【句釋】無將大車、大車は百貨を運搬する車、荷車を言ふ、將は扶進なり、賤者の爲す事は賤者が扶くるが普通なり、君子は君子の爲すべき事多多あり、賤者を扶くるに及ばざるなり。若し扶くるときは祇自塵兮、祇は適なり、彼は扶けられし恩を思はず、我は自から衣を塵さんのみ、周の大夫、小人を推擧して、却て小人の爲め讒せられしを悔いて以て此の詩を作る、今日も猶ほ此の類の小人多くあるなり。無思百憂、自分で自分を抑へるなり、種種の憂思を爲すことは已むべしとなり。徐光啓曰く、百憂の思ふ可らざるを言ふは、正に其の憂の深きなり。明解と謂ふ可し。何氏曰く、憂へて敢て思ふは猶ほ言ふ可し、憂へて敢て思はざるは言ふ可らず。神解と謂ふ可し。祇自底兮、憂へて思ふときは病を生ぜんとなり。劉氏曰く、疧は當に痯に作るべし、音「ミン」唐の石經此の字痯に作る、唐人大宗の諱を避け民字皆省きて氏と爲す、今人昏を昏と書す、猶ほ其の遺法なり、然らば疧又は痯を以て正字と心得べし、

小人を扶くるときは塵れ、百憂を思ふときは疧となり。

無將大車　維塵冥冥　無思百憂　不出于頮

大車を將くること無かれ、維塵冥冥たり、百憂を思ふこと無かれ、頮に出でず、

【句釋】冥冥は人目の明を蔽ひ、見る所無からしむるなり、猶ほ小人を推擧して己が功德を蔽傷するが如きなり。無思百憂は前と同じ。不出于頮、頮は耿と同じ、『箋』曰く、衆小の事を思うて以て憂と爲す、人をして蔽闇し、光明の道に出ることを得ざらしむ。朱子曰く、頮は小明なり。(小サク明ナ)憂中に在て耿耿然として出る能はざるなり。徐光啓曰く、頮は小明と訓す、凡そ人一事心に關することあるときは、此の心全く此の處に向つて芥蔕し、只此の一事あるを見るなり。『箋』の意は明處に出る能はざるなり、朱と徐とは我が心に明處があるなり、自他大に異なる。今案ずるに徐說を以て可とすべし、如何に百憂すとも何の詮も無し、只此の事のみ頮として明なるのみ、別に明處に出るを欲するにはあらず。

無將大車　維塵雝兮　無思百憂　祇自重兮

大車を將くること無かれ、維塵雝はん、百憂を思ふこと無かれ、祇に自から重はさん、

【句釋】雝は音「ヨウ」、訓雝渠、鳥の名。朱子曰く、雝は猶ほ蔽のごとし。『雕題略』曰く、擁の本字なり。今謂く雝渠は「ニハタタキ」の和名ある如く、頻りに塵を揚ぐる鳥ならん。是を以て朱子の蔽を以

て訓したるは極めて妙と思ふ、擁の本字説は未詳。重は累、卽ち煩累なり、百憂を思ふことは徒らに煩累にて何の詮も無きなり。呂東萊曰く、王氏云ふ、凡そ物の行く、物の爲めに累せられざるときは輕うして速か、物の累する所となれば重うして遲し。顧氏曰く、今俗重を謂て累と曰ふ。

【評論】無將大車は三章四句を以て成る。大人は小人を扶くるも、小人は大人を恩とせず反つて之を仇と變ずることあり、濟度し難きは小人なり。

明明上天　照臨下土　我征徂西　至于艽野　二月初吉　載離寒暑　心之憂矣
其毒大苦　念彼共人　涕零如雨　豈不懷歸　畏此罪罟

明明たる上天、下土を照臨す、我征て西に徂き、艽野に至る、二月初吉、載ち寒暑を離たり、心の憂ある、其の毒大だ苦し、彼の共人を念うて、涕零ちて雨の如し、豈歸を懷はざらんや、此の罪罟を畏る、

【句釋】明明上天、『箋』曰く、王者當に光明日の中する如くなるに喩ふ。照臨下土、『箋』曰く、王者當に天下の事を察理すべきに喩ふ。王者は此の如くなるべきに幽王は然らず、是を以て之を刺る。我征徂西、至于艽野、艽野は地名なることは勿論なり。然れども『地理志』に記載なし、其處を詳にせず、然れども西戎卽ち蒙古地方なるは疑ひ無し。二月初吉、一日を初吉と云ふ。載離寒暑、離は麗なり、罹なり、二月出途して寒暑を歷るとすれば、一年以上なること知るべし。心之憂矣、其毒大苦、心に憂ある、其の憂は卽ち毒となれば大に苦痛を感ぜざる能はず。念彼共人、共は恭なり、恭人は人に對する敬稱、今は同心の僚友を稱するなり。涕零如雨、西戎の地、語る可き人無く、依て京に在る恭人を念うて慕ふ餘りに涕淚するなり。豈不懷歸、畏此罪罟、罟は網なり、京へ歸るを懷はざるに非ず、而かも歸らざるは罪の網に罹らんことを畏るればなり。歸任の辭令無き以上、自由に歸れば罪せらるるを畏るなり。

昔我往矣　日月方除　曷云其還　歲聿云莫　念我獨兮　我事孔庶　心之憂矣
憚我不暇　念彼共人　睠睠懷顧　豈不懷歸　畏此譴怒

昔し我往きしとき、日月方に除けり、曷か云に其れ還らん、歲聿に云に莫れぬ、念ふ我獨にして、我が事孔だ庶し、心の憂ある、我を憚むるに暇あらず、彼の共人を念うて、睠睠として懷顧す、豈歸を懷はざらん、此の譴怒を畏る、

【句釋】昔我往矣、昔字の使用法は廣し、昨日も昔、去年も昔なり、十年以上なれば尙亟の事なり、此の昔は何年なるや未詳。日月方除、朱子曰く、二月初吉を謂ふ、二月は舊を除き新を生ずれば也。『箋』に曰く、四月を除と爲す、今の『爾雅』余に作る、余は舒なり。履軒先生曰く、除は猶ほ新のごとし、泛に春首新年を指すの辭、卽ち初吉爲り、十二月の朔皆除、豈特に二月のみならん、今謂ふ四月の異

名を余月とも除月とも稱するに依て見れば、『箋』の說を以て正しと思ふ、然れども前章明白に二月初吉とあり、是に由て之を證すれば、履軒の春首新年說可なるが如し、往は新年にて、還は莫年、意義洵に明白なり、姑く是の說に從ふ可し。曷云其還、歲聿云莫、曷か京に還らんかと思ふこと久し、歲聿に莫るるも猶ほ歸還するの辭令來らず、莫は暮の正字。念我獨兮、我事孔庶、一人にして事は多し、我が爲す事なれば他人に委ぬる能はず、勞苦想ふ可し。心之憂矣、憚我不暇、『箋』曰く、我を勞するに暇あらず、皆王政均しからず、臣事同じからざるを言ふ。念彼共人、睠睠懷顧、睠睠は人を顧る貌。朱子曰く、勤厚の意と。未詳。豈不懷歸、畏此譴怒、結末の意、前章と同じ、譴は謫問なり、怒は譴なり。

昔我往矣　日月方奧　曷云其還　政事愈蹙　歲聿云莫　采蕭穫菽　心之憂矣

自詒伊戚　念彼共人　興言出宿　豈不懷歸　畏此反覆

昔し我往きしとき、日月方に奧なり、曷か云に其れ還らん、政事愈よ蹙れり、歲聿に云に莫れぬ、蕭を采り菽を穫る、心の憂ある、自から伊の戚を詒れり、彼の共人を念うて、興きて言出でて宿す、豈歸を懷はざらんや、此の反覆を畏る、

【句釋】奧は後世燠と書す、煖なり、二月日煖なるなり。政事愈蹙、蹙は『傳』に促とあり、朱子は急なりと注す。『箋』に曰く其の還るとき乃ち政事更に益す促急するに至らん。采蕭穫菽、歲聿に莫て、人

の正に蕭を采り菽を穫るときに至る。自詒伊戚、詒は遺なり、戚は憂なり。我亂世に遭うて官人と爲る、此の憂を詒る所以、自身を怨むの語。朱子曰く、自から其の機を見て遠く去ること能はず、而して自から此の憂を遺す、安寢すること能はず出て外に宿するに至ることを咎む。楊見宇曰く、自詒伊戚は只是れ義命自から安んずるなり、機を見て遠く去る能はずと言ふは、恐くは渾厚の旨にあらず。是の楊氏の說良とに然り、朱子は脫線せる形あり。興は起なり、言は我なり。出宿は憂を散せんが爲め居處の改まるを求む、內に宿する能はざるなり。畏此反覆、朱子曰く、反覆は傾倒無常の意なり。

嗟爾君子　無恆安處　靖共爾位　正直是與　神之聽之　式穀以女

嗟爾君子、安處を恆とすること無かれ、爾の位を靖共して、正直是れ與けよ、神之れ之を聽き、穀を式て女に以へん、

嗟爾君子　無恆安息　靖共爾位　好是正直　神之聽之　介爾景福

嗟爾君子、安息を恆とすること無かれ、爾の位を靖共して、是の正直を好せば、神之れ之を聽き、爾の景福を介にせん、

【句釋】嗟の嘆稱常に說くが如し。爾君子、『箋』に其の朋友未だ仕へざる者を指す。無恆安處、安處とは安心の場處と云ふにはあらず、安逸の閒處を云ふ。人安逸なるときは必ず不善を爲す、宜しく道の爲

め勉むべきなり、其の安逸を戒しめたるなり。靖共は靜恭なり。謝疊山曰く、靖は自靖自獻の靖の如く、共は溫共朝夕の共の如し。爾位、位は正なり列なり莅なりと訓して古は立と通用す。當に立つ可き所のもの皆位と曰ふ、故に位は靖ならざる可らず、恭ならざる可らず、然らずんば位の位たる德を失するなり。今朋友に對して戒しむる所以見るべし。正直是與、與は扶助なり、相互に正直を以て扶助す。神之聽之、神は上天、上天は卽ち神、天を人格化したる者が神なり、其の神は邪曲を嫌うて正直を愛す。式穀以女、式は用なり、以は與なり、穀は人生第一の要素、是を以て福と訓す、末章の安息は安處と同じ。介爾景福、介も景も大なり。

【評論】小明は五章、三章は十二句、二章は六句を以て成る。亂世に遭うて官と爲りし非を悔い、賦する所、周末の衰微察するに餘あり。

鼓鍾將將　淮水湯湯　憂心且傷　淑人君子　懷允不忘

鍾を鼓すこと將將たり、淮水湯湯たり、憂心且つ傷む、淑人君子、懷うて允に忘れず、

【句釋】鍾は鐘なり。將將は其の鐘聲を言ふ、我邦の半鐘の如き物。淮水は河南省汝甯府正陽縣より出で南流して信陽を經以て潁川に入る。湯湯は沸騰の貌。幽王、音樂を用て德と比せず、諸侯を淮水の上

に會し、其の淫樂を鼓し諸侯に示す、賢者之が爲め憂ふ。『箋』曰く、嘉樂は野合せず、犧象は門を出でず、今乃ち淮水の上に於て、先王の樂を作す、禮を破る尤も甚しと。淑人君子、淑は善なり、何人を指すや不明なるも、『通解』曰く、文王、武王、成王、康王の盛王を指すなり。或は然らん。懷允不忘、之を懷うて允とに忘る能はず。通解曰く、實に我が心を勞するの謂なり。徐光啓曰く、但其の人を懷うて、其の懷の在る所を言はず、含蓄盡くること無し。歐陽永叔曰く、詩書史記を考ふるに幽王東巡の事無し、其の未詳なる所を闕くべし。何玄子曰く、昭王南游して、淮水の上に宴樂す、君子憂傷して是の詩を作ると、亦確據無し。

鼓鍾喈喈　淮水湝湝　憂心且悲　淑人君子　其德不回

鍾を鼓らすこと喈喈たり、淮水湝湝たり、憂心且悲しめり、淑人君子、其の德回まならず、

鼓鍾伐鼛　淮有三洲　憂心且妯　淑人君子　其德不猶

鍾を鼓らし鼛を伐つ、淮に三洲あり、憂心且妯れたり、淑人君子、其の德猶ならず、

【句釋】喈喈は將將と同じ。湝湝は湯湯と同じ、將と喈と湯と湝と字音既に異なる、然るに同と解するは何ぞ、察するに或は堂上、或は堂下にて鼓聲の變じ、或は石上、或は石下にて水聲の變ずるは是れ恠むに足らず、然れども古人は未だ其の辨無し、單に韻法として解するのみ。且悲、傷より悲は一層

深しと先輩言ふ、字義に於て本來輕重無し。不囘、囘を邪と訓す。鼛は大鼓長け八尺、徑四尺以上のもの。三洲は三箇の洲島か、又三洲なる地名なるかは不明。呂東萊曰く、三洲は詩を作るもの、當時見る所を賦するなり、見る所なれば事實之れあること勿論なり、然れども其の事は詳ならず、妯は音「チク」、訓「アニヨメ」、又音「イウ」、訓「ミダルル」擾なり、今後の義、乃ち憂心が擾るるなり。朱子曰く、動也と。動では詩に響きなし。不猶は不レ如レ此と同じ意味、此の如くならざるなり、古の淑人君子は決して此の如く放逸ならず、其の德を修めしなりとの意。

鼓鍾欽欽　鼓レ瑟鼓琴　笙磬同音　以雅以南　以籥不僭

鍾を鼓らして欽欽たり、瑟を鼓し琴を鼓す、笙磬音を同じうす、以て雅し以て南す、以て籥すること僭れず、

【句釋】欽欽は聲の形容。瑟は二十五弦。琴は五弦、十弦、二十弦あり。笙は小なるもの十三簧（舌ナ）大なるもの十九簧。磬は鐵、玉、石等にて製る。同音とは音異なるも、調子が合するを言ふ。以雅以南、『毛傳』に曰く、雅南は四夷の樂を舞ふ、大德の及ぶ所なり、東夷の樂を雅と曰ひ、南夷の樂を南と曰ひ、西夷の樂を朱離と曰ひ、北夷の樂を禁と曰ふ、以て籥舞を爲すこと是の若し、和して僭れざるなり。『箋』曰く、周樂は武樂なり、籥舞は文樂なり。朱子曰く、雅は二雅、南は二南、（大雅ト小雅、召南ト周南、）なり。朱

子の如く言はずして傳の如く言ふを宜しとす。以籥、俗に高麗笛と稱する物が籥なり、吹處を除き六孔の物是れなり。不僭は不亂なり、種種の音が相和して亂れざるなり。蘇子由曰く、幽王の不德、豈其の樂古にあらずや、樂は則ち是にして人は則ち非なり。徐光啓曰く、末章の辭、愈よ隱れて其の意愈よ微なり。蘇氏が注は是れ言外の意、今日の樂音は猶ほ古の樂音、今日舞樂の正は猶ほ古の舞樂の正と異ならざるを言ふ。

【評論】鼓鍾は四章五句を以て成る。新安の胡氏曰く、歐公云ふ鼓鍾の序、但幽王を刺ると言ふ、何事を刺るを知らず、詩に據れば樂を淮上に作す、然れども詩書に幽王東巡の事無し。『書』曰く、徐夷竝に興る。蓋成王の時より、徐夷及び淮夷已に皆周臣と爲らず、宣王の時嘗て將を遣り之を征す、亦自から往かず、初より幽王東して淮徐に至るの事なし、然らば則ち樂を淮上に作すことを得ず、當に其の未詳を闕くべし。嚴氏謂ふ、古事亦史に見えずして、經に因て以て見るものありと。詩は卽ち史なり、其の論固に當る、然れども二詩の文、亦其の幽王たるを明言せず、故に集傳に未詳と。又曰く、未だ敢て其の必ず然ることを信ぜずと。之を得たり。

楚楚者茨　言抽其棘　自昔何爲　我蓺黍稷　我黍與與　我稷翼翼　我倉既盈

我庾維億　以爲酒食」　以享以祀　以妥以侑　以介景福」

楚楚たる者は茨、言に其の棘を抽ふ、昔より何爲ぞ、我に黍稷を藝ゑしむ、我が黍興興たり、我が稷翼翼たり、我が倉既に盈ち、我が庾維億なり、以て酒食を爲り、以て享し以て祀る、以て妥んじ以て侑め、以て景福を介にせん、

【句釋】楚楚は盛密の貌。茨は「ムバラ」蒺藜なり、蔓生にして細葉、子に三角あり。言抽其棘、抽は抽除にて抽り除くなり。棘も「ムバラ」なり、茨も棘も田の害を爲す草、是れを抽除せずんば黍稷は實らざるを以てなり、茨も楚楚、棘も亦楚楚たり、然るに此の如く文字を使用するは之を互文の法と云ふ。自昔何爲、辛苦して茨棘を抽るは昔しより何を爲すや、何を爲す爲ぞや。我藝黍稷、藝は「ウウル」なり、黍稷は善なり、茨棘は惡なり、其の惡を抽除せずんば、善なる黍稷は穫られざるなり。我黍興興、我稷翼翼、與興も翼翼も共に蕃盛の貌。我倉既盈、倉庫に盈充するなり。我庾維億、露積を庾と曰ふ、億は多數を曰ふ、亦是八字一意にて互文の法。我が倉庫に盈ちて堆積し其の數億に餘るなり。以爲酒食、爲は作爲なり、黍稷を整理して酒食を爲る。以享、享は饗と同じ。以祀、神靈や祖先に供するを享祀と言ふ。以妥以侑、妥は音「ダ」訓「ヤスンズ」安なり、侑は音「イウ」、訓「ススム」勸なり。神靈を安んじ、神靈に勸めるなり。以介景福、介は大、神靈を慰するは卽ち我の景福を大にする所以。死者は靈にして、生者は益す富んで幸福を全うせんとなり。

濟濟蹌蹌　絜爾牛羊」　以往烝嘗　或剝或亨　或肆或將　祝祭于祊」　祀事孔明

先祖是皇　神保是饗　孝孫有慶　報以介福」　萬壽無疆

濟濟蹌蹌たり、爾の牛羊を絜ようし、以て往て烝嘗す、或は剝ぎ或は亨、或は肆ね或は將め、祝祊に祭る、祀事孔だ明なり、先祖是れ皇なり、神保是れ饗けん、孝孫慶あり、報ゆるに介福を以てし、萬壽疆なし、

【句釋】濟濟蹌蹌は『傳』に容あるを言ふとあり、先祖を祭る式に於て其の祭る人の威儀敬愼を言ふなり。絜は潔の正字。爾牛羊、先祖の靈に供する牛羊を極めて淸絜に料理するなり。以往烝嘗、冬祭を烝と曰ひ、秋祭を嘗と曰ふ。或剝、一人は其の牛羊の皮を解き剝ぐ也。或亨、一人は其の牛羊を煮熟する也。或肆、一人は其の骨體を區別して俎上に陳肆也。或將、一人は其の烹肉を神前に奉進する也。祝は祝人、我邦で所謂神官なり。祭于祊、祊は廟門內、主人が賓客を待する處。祀事孔明、『箋』曰く、孔は甚なり、明は備なり、孝子神の在る所を知らず、故に祝をして之を平生門內の旁、賓客を待するの處に求めしむ、祀の禮是に於て甚だ明なり。此の句に於て前六句を收結す。先祖是皇、神保是饗、皇は大なり、神靈來りて尊位に處るなり、神保は朱子曰く、尸の嘉號、楚詞に所謂靈保なり、亦巫を以て神を

降すの稱なり。今言ふ朱子は神保を以て巫者の類と爲す、何に據て言ふなるを知らず、楚詞は後世のものなり、何ぞ引て詩經を證するを得ん。何玄子曰く、神保是饗は先祖の神、之に安んず、是に於て其の祭祀を饗するを言ふなり。是の說當るが如し。神尸によりて祭をうけ玉はんと解したるは朱子の誤を知らざる人の言なれば用ふべからず。孝孫は正しく此の祭祀に當る主人公を言ふ。有慶、幸慶あるなり。報以介福、萬壽無疆、介福は卽ち萬壽なり、萬壽は卽ち介福なり。

執爨踖踖　爲俎孔碩　或燔或炙　君婦莫莫　爲豆孔庶　爲賓爲客　獻醻交錯
禮儀卒度　笑語卒獲　神保是格　報以介福　萬壽攸酢

爨を執ること踖踖たり、俎を爲ること孔だ碩なり、或は燔し或は炙す、君婦莫莫として、豆を爲ること孔だ庶し、賓と爲り客と爲り、獻醻交錯る、禮儀卒く度あり、笑語卒く獲たり、神保是れ格る、報ゆるに介福を以てし、萬壽酢ゆる攸ならん、

【句釋】爨音「サン」、訓「カマ」竈なり。踖踖は殷勤恭敬なり、祭祀の時、其の爨竈を執るの人、皆踖踖然として事に敬愼して容儀あるの謂ひなり。爲俎孔碩、俎は牲を載る器の名、而して俎上の牲肉は頗る肥大なり。或燔或炙、『傳』に曰く、燔は膟膋を取る、炙は炙肉なり。（腸間ノ脂ヲ膟膋ト言フ）朱子曰く、燔は燒肉なり、炙は炙肝なり。孔氏曰く、燔は火燒の名、炙は遠火の稱、熟し難きものは火に近く燒き、熟し易

きものは火に遠く燒く。遠火近火の說未詳なるも他に確說も見當らず、姑く是の說を存す。炙は多く炙と書す、炙は正しからず、肉を冠らして火に從ふを以て正しとす。君婦、『箋』曰く、君婦は后を謂ふ、凡そ適妻と稱するは舅姑に事るの稱なり。莫莫は其の主婦が淸靜にして敬至るを言ふなり。爲豆、俎と豆とは祭器に闕くべからざる具、俎は長さ一尺八寸、闊さ八寸、高さ八寸五分、豆は口徑四寸九分、高さ五寸九分、料理せし燔肉や炙肉を共に此の俎と豆とに載することを爲ると言ふ。孔庶、庶は衆なり、豆の數が多きか、肉の數が多きかは經文分明ならず、意ふに豆も多く從て肉も亦多きならん。爲賓爲客、異姓の人來りて、此の祭事を扶くるなり、賓と客とは同意義に用ふるも、賓は特殊に用ひ、客は一般に用ふ、是を以て賓重く、客は輕し。獻は主人が賓に酒を酌なり。醻は賓が主人に酒を飮しむるなり。交錯、互に酌み、互に飮むを交錯と言ふ。禮儀卒度、先祖を祭るに當り、主人は七日戒し、三日齋し、一人を丞して尸と爲し、而して出來せし料理は第一に神靈、第二に尸、尸に獻ずるに主人先づ獻じ、次に主婦、次ぎに賓客と順序す、而して尸は一一之に酬ゆ、而して後主人が賓の甲乙より次第して家兄家弟に及ぶ、是れ禮儀卒く法度ある所以。笑語卒獲、笑語も亦其の宜しき程度を得。神保是格、格は來格なり來至なり、先祖の神靈彷髣として格るなり、尸人が格るにはあらず。報以介福、萬壽攸酢、善事に報ゆるに善事を以てすとの意味、善因善果なるもの是れなり。

我孔熯矣　式禮莫愆　工祝致告　徂賚孝孫　苾芬孝祀　神嗜飲食　卜爾百福
如幾如式　既齊既稷　既匡既勑　永錫爾極　時萬時億

我孔だ熯矣、式禮愆る莫し、工祝致し告ぐ、徂きて孝孫に賚ふ、苾芬たる孝祀、神飲食を嗜ず、爾に百福を卜へて、幾の如く式の如く、既に齊ひ既に稷く、既に匡しく既に勑む、永く爾に極を錫ふ、時萬時億ならん、

【句釋】孔熯、熯音「セン、」訓「カワク」乾なり、火盛んにして乾なり、又「ツクス」竭と訓す。『毛傳』に熯は敬なり、熯に敬の義は決して含まず、然れども至誠にして恭敬を竭す意義なるに依て見れば敬と訓して亦妨げず。朱子曰く、筋力竭くと。至誠と筋力とを混同したる說なれば今取らず。式禮莫愆、式は法式、禮は禮儀、愆は過なり、終始至誠を以て竭くす、故に其の法過無きを自信して言ふ。工祝致告、工祝は祭祀に預かる人を稱す、工は其の事を專一にするより特に付けしなり、神事を致し、神事を告るなり、致告せらるる者は尸人と主人公なり。徂賚孝孫、工祝が神靈に代りて神意を尸人主人に致し告ぐ。神靈曰く、此の如くの至誠を以て爾等孝孫は神靈を祀る、神靈は爾等孝孫に福壽を賚ふとなり、起句の我は孝孫其の人なり、我の外の孝孫を言ふにあらず。苾芬は香氣なり。孝祀、孝心は至誠なり、至誠は邪氣にあらずして香氣なり。神嗜飲食、孝孫が至誠を以て供したる飲食、神は甘しとして之を饗ける、

非禮は乃ち饗けざること反對の理として明白なり。卜は豫定の義。爾百福、必ず爾孝孫に百福を卜へんとなり、富且壽あるの類を百福と泛稱す。如幾、幾は期なり、爾が心に期する所の如く、神は卜へん。如式、爾が至誠を以て爲す法式の如くにせん。既齊既稷、既匡既勑、齊は整、稷は疾、匡は正、勑は戒なり。神靈曰く、爾孝孫が爲す所、既に能く整うて紊れず、既に能く疾くして緩らず、既に能く正しうして曲ならず、既に能く戒めて慢ず。此の如くなれば神は永錫爾極、極は至極を言ふ、壽も長く、富も巨と總べて爾に幸福の最大を錫らんとなり。時萬時億、萬と曰ひ億と曰ふ數の最も極まるものなり。

禮儀既備　鐘鼓既戒　孝孫徂位　工祝致告　神具醉止　皇尸載起　鼓鐘送尸
神保聿歸　諸宰君婦　廢徹不遲　諸父兄弟　備言燕私

禮儀既に備はり、鐘鼓既に戒しむ、孝孫位に徂き、工祝致し告ぐ、神具醉止、皇尸載ち起つ、鐘を鼓し尸を送る、神保聿に歸る、諸宰君婦、廢徹すること遲からず、諸父兄弟、備はりて言に燕私せり、

【句釋】既備、既戒、祭祀の禮全く具備して聊かも缺處なし、而して其の式を終らんとし、鐘を鼓して式を閉づることを戒告するなり。孝孫徂位、自分の坐位に歸り徂く、其の位は堂下にて西面す。工祝致告、祝人は西階を出で東面す、而して供養の禮已に終りしことを致し告ぐるなり。祝が孝孫の意を致して、尸に告ぐるに利養成を以てするなり、尸は神を節する者と解して、祖先に象る人を作る、一時假設

する神人なり、祭祀には必ず之れあり、天子は卿を以て尸と爲し、諸侯は大夫を以て尸と爲し、卿大夫より以下は孫を以て尸と爲すなり。此の詩は定めて諸侯ならんか。神具醉止、具は皆、一神を祀るにあらず、多くの神を祀りしを以て皆醉と言ふなり。皇尸載起、尸を尊稱して皇尸と云ふ、祝に工を以てすると同じ。鼓鐘送尸、神保聿歸、尸醉ふは卽ち神が醉ふなり、尸が歸るは卽ち神が歸るなり、神の歸處は天なりと特に言ふの要無し。諸宰は膳夫、膳夫は宰の屬官。膳夫は上士二人、中士四人、下士八人、是を以て諸と言ふ、諸饌を徹去する人なり。君婦は卽ち主婦、主婦は以て俎豆を徹去するなり。廢徹不遲、俗語の愚圖愚圖するを遲と言ふ。祭事を徹去するには此の愚圖を許さず、疾を以て敬と爲す。朱子曰く、亦神意を留めざる意なり。中村惕齋曰く、神供のすべりは神の惠なれば、これを敬してはやくうけんがためなり。此の二說共に未詳。諸父兄弟、備言燕私、賓客を送り去て、後一家骨肉を以て私燕を設く。『毛傳』曰く、燕して其の私恩を盡くすなり。備は畢竟ずるに充分の意義なり。

樂具入奏　以綏後祿　爾殽既將　莫怨具慶　既醉既飽　小大稽首　神嗜飲食
使君壽考　孔惠孔時　維其盡之　子子孫孫　勿替引之

樂具入て奏し、以て後祿を綏んず、爾の殺既に將め、怨莫うして具慶べり、既に醉ひ既に飽き、小大稽首せり、神飲食を嗜しとし　君を壽考ならしむ、孔だ惠ひ孔だ時にして、維れ其れ之を盡せり、子子孫

孫、替つること勿くして之を引かん。

【句釋】樂具入奏、樂人が私燕の席上に入て具之を奏す。朱子曰く、凡そ廟の制、前廟以て神を奉じ、後寢以て衣冠を藏す、廟に祭りて、寢に燕す、故に此に於て將に燕せんとす、祭時の樂、皆入て寢に奏するなり。履軒先生曰く、此の說大に謬る。蓋し宗廟の制、一に人居と同じ、前堂を廟と爲し、後室を寢と爲す、以て神主を奉ず、外別に寢なるもの無し、別に一寢を起して、以て衣冠を藏する如きは是れ宋漢以後の制、古制に非ず、祭後同姓を燕す、當に前堂に在るべし。後寢既に神主を奉ず、燕處にあらず。其の樂入と云ふは、初め祭畢りて樂罷み、皆外に在て此に至るなり。安成の劉氏は朱子を奉ずる者なり曰く、廟の後、別に寢を爲り、以て祖宗の遺せる衣冠を藏す、祭時尸に授けて以て之を服せしむ。劉氏も亦其の後世の事たるを知らざるなり。履軒の說正しきが如し。以綏後祿、朱子曰く、祭に於て既に祿を受く、故に燕を以て將に後祿を受けて之を綏せんとするなり。履軒先生曰く、綏は安定の定、其の既に受くるの祿を謂ふのみ、後祿は卽ち前に受くる所の祿のみ、兩祿あるにあらず、蓋し前受くる所の祿、是れ今よりして後受用するもの故に之を後祿と謂ふ。何ぞ其の說の明解なる、巨眼猶ほ今に爛たるを覺ゆ。『毛傳』曰く、綏は安なり、安んじて然る後、福祿を受くるなり。『鄭箋』曰く、燕して祭る時の樂、復皆入て奏し、以て後日の福祿を安んずるなり、骨肉歡して君の福祿安し。履軒の發明せる所は

『傳』と『箋』とに在るなり。爾殽既將、將は行なり、行とは兄も弟も大も小も漏なく酒殽が行き度るを言ふ、酒は殽の中に含めり。莫怨具慶、兄弟大小皆歡慶の意を表す。既醉既飽、小大稽首、酒には醉ひ、殺には飽き、小は年少者大は年長者、稽首は首を地に俯す、拜の極なり。神嗜飲食、使君壽考、此の八字は稽首する者が言ふ、神は飲食を甘しとして之を受け、受くるに依て君に賜ふに壽且考を以てせんとなり。考は延年と注して命の長きこと、壽と同意義の字なり。又亡父を考と曰ふ。孔惠孔時、維其盡之、惠は順、祭禮が華に流れず、儉に失せず、洵とに其の禮式に順、是れ其の德之を盡くすの致す所なり。子子孫孫、勿替引之、君の子孫は宜しく君が意を體して、永く祭祀を懈らざれとなり、替は改、勿替は改めざるなり、引は長く此の祭祀を行ふなり。

【評論】楚茨は六章十二句を以て成る。幽王古禮を失し、徒らに政煩賦重なるを慨して詩人此を作り、以て古禮の正しきを示ししなりとの說あり、或は然らん。而して六章各の次第あり、『說通』聊か之を得、曰く廢徹不遲（第五章）より以上は神に事へ福を受くるの事、以下は則ち燕私して慶を稱ずる事なり、然れども燕亦祭中の事なり、首の三章、一時の事にして、酒食牛羊の禮を以て各の其の義を擧げ之を言ふ、皆三獻以前の事、四章は則ち平獻以後、祝類を致し報ゆるの時の事、五六の二章は皆祭終る時の事なり。

信彼南山　維禹甸之　畇畇原隰　曾孫田之　我疆我理　南東其畝

信に彼の南山、維禹之を甸めたり、畇畇たる原隰、曾孫之を田り、我が疆我理し、其の畝を南東とす、

【句釋】信は吾が信ずるなり。南山は終南山。維禹甸之、禹王は舜帝の後を受け帝と爲り、土木の天子と爲り車、舟、橇、樏の四載にて治平の功を奏せしなり、十七代の桀王なる愚天子に至り四百五十八年にして夏は亡び遂に殷と爲りしなり、南山地方が洪水の時、禹が之を甸めしを言ふ、夏書に五百里甸服と、王制に千里の內を甸服とあり、都を中心に此の里程を算し、其の里程內を畿甸と曰ふ、今は甸の言たる治なり、甸は田に從ふ勹、勹は裹なり。畇畇は『傳』に墾辟の貌とあり、土地を開墾したる形容なり。原隰は『公羊傳』に上平なるを原と曰ひ、下平なるを隰と曰ふとあり。曾孫田之、子より孫、孫より曾孫と爲る、而して曾孫の意義は曾祖より百年千年無窮に至るまで用ふるなり。禹王の曾孫は夏の六代の天子少康に當れども、此の詩意は少康を指すにはあらず、泛稱して殷も周も共に此の中に含む、周を本意に見るは上の禹に背かずや。禹が洪水を甸めし地を田るなり。我疆、彼と我と經界を畫するを疆と曰ふ。我理、土地を整理するなり、『傳』に分二地理一とあるは今用ひず。南東の字に拘泥して云云する者は意を得ず、南東でも南北でも東西でも非常の異あるにあらず。顧仲恭曰く、東南の二字、只縱橫二字の看を爲せと。洵とに我が意を得たり。其畝、畝は田隴なり。司馬法に六尺を步と爲し、百步を畝と

爲す。秦の孝公の制に二百四十步を畝と爲す、普通に百步制を取る、要するに農事に盡瘁するを言ふなり。顧夢麟は畝の事に千五百有餘言の注を費せり、知らんと欲する者は往て見よ。

上天同雲　雨雪雰雰　益之以霢霂　既優既渥　既霑既足　生我百穀

上天同雲、雪を雨すこと雰雰たり、之に益すに霢霂を以てせり、既に優かに既に渥く、既に霑ひ既に足る、我が百穀を生せり、

【句釋】上天は但上の天の意なるか、又春の天を上天と稱して名詞とするか、共に明白ならず、若し名詞とすれば、同雲も初春の雲を稱する名詞と爲すべし。朱子は曰く、雲の一色なるなり、天が一面に同じ雲に鎖さるるなれば朱子の言然らん。共に明白ならず。雨雪雰雰、雪が雨の如く降りて雰雰たるなり。益之以霢霂、細雨を形容して霢霂と曰ふ。『孔疏』に春日に至り又之れに益すに小雨を以てし、霢霂然として以て冬澤に接するなりと。履軒先生曰く、雪後又小雨なり、只是れ雨澤の饒きを狀する、是れ經文の雪字元冬春の別なし、然れども上の文に據れば、雪雨幷に春なり、若し冬雪春雪と作すときは益の字太だ閒なり、乃ち謂ふ是れ初春の期ならんか。然れども古來の說冬と爲すもの多し、多しと雖も從ふを用ひず。既優既渥、優洽饒渥と成語して土膏の潤澤なるを言ふ。既霑既足、霑は沾ふなり、足は十分なり。生我百穀、穀が生長するは卽ち國家が能く治まるなり、詩人此の詩を稱して成王の時と言ふ、或は

然らん、成王は周の二世、聖天子なりしことは史上に有名なり。

疆埸翼翼　黍稷彧彧　曾孫之穡　以爲酒食　畀我尸賓　壽考萬年

疆埸翼翼たり、黍稷彧彧たり、曾孫の穡なり、以て酒食を爲り、我が尸賓に畀へば、壽考萬年ならん。

【句釋】疆埸、疆は界の大、埸は界の小、田畔を言ふ。翼翼は其の疆埸の整飾せる貌を言ふ、長樂の劉氏曰く、八家一井、各の疆埸ありて、萬井縱橫、左右翼翼たるを謂ふ。黍稷彧彧は萬井棊布、廣野彧彧として文を成すを言ふなり、彧彧は茂盛の形容なり。曾孫之穡、彼の彧彧として茂盛なる黍稷は何人の畊作せしものぞや、是れ曾孫が努力の結果なり。以爲酒食、尸に獻じ、賓客に供し、諸兄弟と酒食するを得るは、畢竟勤勉の結果なり。畀は與なり。壽考萬年、是の意既に明白なり。

中田有廬　疆埸有瓜　是剝是菹　獻之皇祖　曾孫壽考　受天之祜

中田に廬あり、疆埸に瓜あり、是れ剝り是れ菹にし、之を皇祖に獻ず、曾孫壽考、天の祜を受けん、

【句釋】中田は田中。廬は廬屋なり。有瓜、是剝是菹、剝は削なり、瓜の皮を削て以て菹卽ち酢菜に料理し、以て獻之皇祖、第一番に之を皇祖の靈に供獻するなり。曾孫壽考、受天之祜、祜は福と同じ。徐光啓曰く、瓜は卽ち祭時、豆に登すの物、時に於て適ま瓜熟す、故に之を薦む、蓋し秋嘗なり、新を薦むるの謂にあらず。左氏曰く、溪澗沼沚の毛、神明に羞むべし。禮に曰く、凡そ天の生ずる所、地の長

ずる所、苟も以て薦むべきものは、咸在らずと云ふこと無し。物を盡すことを示すなり。外は則ち物を盡くし、內は則ち志を盡す、故に唯賢者のみ能く祭祀の義を盡くすと曰ふ。

祭以清酒　從以騂牡　享于祖考　執其鸞刀　以啓其毛　取其血膋

祭るに清酒を以てし、從ふに騂牡を以てし、祖考に享る、其の鸞刀を執り、以て其の毛を啓き、其の血膋を取る。

【句釋】清酒、『周禮』に曰く、酒に三酒あり曰く事酒、曰く昔酒、曰く清酒。『箋』に曰く、清酒は鬱鬯の酒を云ふ。朱子曰く、清酒は清潔の酒、鬱鬯の屬なり、鬱金香草の汁を以て鬯卽ち秬を釀して酒と爲すものに和したるを鬱鬯酒と稱するなり。履軒先生曰く、清酒は濁酒に對する稱にして澄し酒なり、鬯にあらず、鬯は灌ぎて以て神を降す、祭と曰ふ可らず。『箋』の說は破却せらる。從以騂牡、騂は赤、牡は牛、赤毛の牛の肉を享すると云ふか。生牛と云ふか。享于祖考、祖は先祖、考は先人なり。『箋』曰く、祭の禮、先づ鬱鬯を以て神を降し、然して後、牲を迎へ、祖考に享る。納享の時なり、生牛を享る說、『箋』に始まり而して朱子其の說に據れり。履軒先生曰く、若し牲を迎ふるとせば、未だ享と曰ふべからず。今謂く、生物には享と曰ふべからざる義も亦未だ分明ならず、例せば今日神祠に生馬生牛を獻じて、或は神馬と稱し、或は神牛と稱して、之を祠側に飼養するあり、此等も亦享と謂ふ可し、然らば死

肉にあらずとも享と稱して妨げなきは爭ふべからざる事實なり、然りと雖も、此は是れ後世の事にて、周代此の如き事なしと言はば、そは其れまでのことなり。蓋し享の字說に就ては余は履軒に服せざるも、生牛か死肉かに就ては猶ほ議論の餘地あり。執其鸞刀、以啓其毛、取其血膋、此れ等の字を普通の文法上より解すれば、前句の享于祖考は生牛にて、死牲にあらざる如く見えるなり。履軒先生曰く、鸞刀以下は其の宰割の初に繳して言ふなり、下に血毛と稱す、故に上に騂牡と題す、事先後あり、文則ち順ふ。『傳』に迎牲と云ふは、騂牡の兩字に泥むなり、遂に清酒を以て鬱鬯と作す。其の謬大なり。朱子を奉ずる中村惕齋曰く、鸞刀は鸞は鈴なり、鈴を付けたる刀を以て牲肉を切る時は拍子がよければなり、膋は腸の間にある脂、天子の祭禮は王自から牲の繩を取り、廟庭に引き入て、碑石に繫ぐ、卿大夫鸞刀を取つて、先づ牛耳の旁の毛を伐り取り、神に薦めて毛色の純なることを告ぐ、又血をさし出し、之を薦めて牲を新たに殺すことを告ぐ。而して牛を引き出し、打ち殺して切り解く、此の時に膋を取ると見えたり、是れまでは朝踐の禮にして、堂上の事なり、朝踐とは朝に牲を踐すことなり、此の後室中にて薦熟の禮を行ふ、此に及んで膋を黍稷に合せ、蕭に入れて是れを焫き、其の臭を墻屋に達して、神を陽に求む、是れ焫蕭の禮なり。凡そ祭には祼と焫蕭との二つをつつしむ。蓋し人死すれば、魂氣は天に歸し、形魄は地に歸す、よりて祭る時に、先づ神を陰陽に求めて來格を願ふなり。以上惕齋の獨斷にはあらず、

朱子を奉ずる學者は皆此の意を持す。『周禮祭義』の說は眞に此の如きなり。履軒の說全く牲の事を否定するにはあらず。文順にて所謂、執刀や啓毛や血膋は移して以て祭以清酒、從以騂牡、享于祖考の上に置いて見れば意義明白となるの謂ひなり。全體其の納享の時を言ふにあらずと爲すなり。然れども多くの學者は朱子に依て、履軒の說に從ふもの少なり。今案ずるに前章に中田有廬、疆埸有瓜、是剝是菹とあり、皆其の獻せんとする第一著手の事より言ふ、而して此の章に來りて、第一著手の事を言はずして、既に料理せる熟肉を言ふは頗る次第無きものの感を爲す。徐光啓曰く、祭以清酒は亦牲を迎ふる爲めに舉するなり、啓毛取膋は平看すべし、神を陰陽に求むるを以て眼目と作す可らず。是れ朱子の祭は諸を陰陽に求むるの義と云ふ說を破りし也。履軒は徐を信ずる人、此の徐說に對し何等の辨を爲さんとするや、死肉と生牲との說は余も亦朱子に據り、履軒に據らざるなり。「大雅」に清酒既載、騂牲既備は是れ熟肉なること明白、然らば雙方の意義を帶ぶるものか。

是烝是享　莤莤芬芬　祀事孔明　先祖是皇　報以介福　萬壽無疆

是れ烝し是れ享し、莤莤芬芬たり、祀事孔だ明なり、先祖是れ皇とし、報ゆるに介福を以てし、萬壽疆無けん、

【句釋】烝と享とは共に進獻なり。莤莤芬芬は肉の香氣を言ふ。徐光啓曰く、鸞刀の三句は牲を庭に用

ふるの謂ひ、是烝是享は首を堂に升すなり。是の徐說は生肉を言ふ。蓋し生肉にはあらざるべし、既に熟肉を言ふならん。專ら牲を以て言うて、酒を兼て說かず。蓋し上章清酒の句、只用ひて以て神を求む、此の一句を著て以て下牲を迎ふるの事を起す、三章尸に獻じて用ふる所の酒の若きにあらず、祭中酒を重んぜざるにあらず、章意各の主とする所あるのみ。祀事以下の四句解し易し、贅辨の要なし。

【評論】信南山は六章六句を以て成る。『毛傳』曰く、信南山は幽王を刺るなり、成王の業を修め、天下を疆理して以て禹功に奉ずること能はず、故に君子古を思ふ。徐光啓曰く、粢盛、瓜菹、犧牲は俱に一時奉祭の物、每段各の一義を發するのみ、先後の意あることなし。

小雅　北山

倬彼甫田　歲取十千　我取其陳　食我農人　自古有年　今適南畝　或耘或耔

黍稷薿薿　攸介攸止　烝我髦士

倬たる彼の甫田、歲ごとに十千を取る、我其の陳きを取て、我が農人を食ふ、古より有年なり、今南畝に適けば、或は耘り或は耔ふ、黍稷薿薿たり、介なる攸止なる攸、我が髦士を烝む、

【句釋】倬は明なる貌。甫田は『傳』に天下の田を謂ふと。履軒先生曰く、疑ふらくは地名と。今謂ふ、今日河南省開封府中牟縣に圃田あり、春秋には鄭邑なり。又今日の福建省興化府に莆田縣あり、此の莆

田は唐時置く所、全く今と關係無し、天下の田は恐らくは獨斷ならん。或は河南の圃田是れか。歲取十千、『傳』に十千は多きを言ふと。是の說甚だ當る。魏の曹子建の詩、歸來宴二平樂一、美酒斗十千、唐の崔敏童の詩、能向二花前一幾回醉、十千沽レ酒莫レ言レ貧、十も千も滿數なればなり。井田の法を知らんとする者は別に『毛傳』に就て見よ。我取其陳、我は田を領じ祭に主たる者の自稱。陳は古米を言ふ、今秋穫る者は新にして、來秋に及ぶ者は陳なり。食我農人、農人は今日の所謂小作人なり、地主は其の田を付與して、彼に作らしめ其の年貢米を受く。自古有年、案ずるに甫田の地は水害も旱害も無く、古來より收穫多くあるなり、有年は豐年と同じ。今適南畝、畝は多く故の俗字にて通用す、適は往なり、南畝特に肥田なるならん。或耘或耔、耘は草を伐除するなり、耔は本を雝なり。朱子曰く、后稷田を爲る一畝三畎、廣さ尺深さ尺、而して種を其の中に播す、苗葉以上、稍壠艸を耨る、因て其の土を壥して以て苗根に附す、壠盡き畎平らかなるときは根深うして風と旱とに能ふ。履軒先生曰く、田畝の制、古今必ずしも同じからず、且后稷の爲る所、其の詳を知るに由なし。『傳』は食貨志に本いて言ふ、是にあらず、乃ち其の詳は知る能はざるが信なり。黍稷薿薿は其の勞作の結果、黍稷の實りて茂盛なるを言ふ。攸介攸止、介は介大、止は止息、舒曠の地、止息すべき處を言ふ。烝我髦士、烝は進なり。髦士は秀才の士を言ふ、農民中より最も農事に盡瘁せし人を推薦して之を舒曠の地に置き以て其の勞を慰す。『通解』曰

く、獨髦士を勞するは衆人徧く及ぶと能はざるを以て、因て以て衆に諭すなり。此れ亦詩を說くの辭、甚だ重からず、勞は只勞者之を勞するの意、蓋し有年は天に出づと雖も、有年を致すは則ち農に由る、之を勞する所以を知らざら使むるときは、公卿情を昧故に垂れず、坐して其の成るを享く、其れ何を以て農人の心を慰せんや。故に我が髦士を進めて其の沾體塗足の勞を敍し以て之を勞苦するのみ。

以我齊明　與我犧羊　以社以方　我田既臧　農夫之慶　琴瑟擊鼓　以御田祖

以祈甘雨　以介我稷黍　以穀我士女

我が齊明と、我が犧羊とを以てして、以て社し以て方す、我が田既に臧き、農夫の慶なり、琴瑟鼓を擊ち、以て田祖を御へ、以て甘雨を祈り、以て我が稷黍を介にせん、以て我が士女を穀はん、

【句釋】齊明は『曲禮』に所謂明粢なり、粢は稷なり、俗語の御飯を神に供するなり。犧羊、純色の羊を云ふ、俗語の御菜なり、此の御飯と御菜とを神前に供して以社以方、社は土地神、俗に氏神なり、方は四方の神。朱子曰く、秋四方を祭りて萬物を報成すと。陳臥子曰く、此の社方は夏祭なり、秋は既に穀成る、甘雨を祈るの要無し。余も亦陳說に從ふ。我田既臧、農夫之慶、我が田に黍稷が薿薿たるは神に獲る所の幸福なり、因て以て農夫も亦慶するなり。若し此に於て農夫の勞に由るのみと解せば以て社し以て方するの文字徒爾と爲らずや。琴瑟擊鼓、以御田祖、御は迎なり、琴や瑟や鼓を擊ち或は鳴ら

し以て田を敎へし祖、卽ち神農氏を迎へるなり、所謂三皇の一神なり。以祈甘雨、以介我稷黍、以穀我士女、甘雨は淫雨の反對、五風十雨の語あるが如く、適宜に降る雨を稱して言ふ、此の甘雨が降れば稷も黍も成熟し、稷黍成熟するときは士女均しく情が穀なり、此の章中の我は前章の我と同じく地主なり。

曾孫來止　以其婦子　饁彼南畝　田畯至喜　攘其左右　嘗其旨否　禾易長畝

終善且有　曾孫不怒　農夫克敏

曾孫來止、其の婦子を以て、彼の南畝に饁す、田畯も至りて喜ぶ、其の左右を攘り、其の旨否を嘗む、禾易りて畝を長ふ、終に善くして且有からん、曾孫怒らずして、農夫克く敏なり、

【句釋】曾孫は前の信南山に曾孫田之とある曾孫と同じく祭を主どる者なり、『箋』には謂二成王一とあり、成王と假定するも亦妨げず。以其婦子、農民の婦女や子息を以て來るなり。饁は音「エフ」、訓「カレヒス」、田に餉る食と譯す。彼南畝、農民の婦子が南畝に饁するや曾孫適來りて其の左右に臨むなり。田畯は平たく言へば農業技師の事なり、官人にして穡を司どる人を言ふ。至喜、農民が耘耔の狀を見て喜ぶなり。攘は取なり。其左右、農民が饁する食を取て之を試驗するなり。嘗其旨否、『箋』は嘗める人を曾孫卽ち成王なりと謂ふ。朱子は乃ち曰ふ、田畯なりと。田畯の方眞に近し。或は左方の人の食を取り、或は右方の人の食を取り、孰れか旨く、孰れか否きやを試驗するなり。輔氏曰く、取と曰はずして攘と

曰ふは、公卿の貴を以て農者の粗糲を食ふ、彼必ず敢て獻ぜざる者あらん、故に攘て之を取る。輔氏は朱子を奉ずる人、而かも取る人の田畯にして王にあらざることを知らざるなり。禾易長畝は『傳』に易は治なり、長は竟なり、禾が平等に能く長じて畝の隅を竟るまで首尾一の如きなり。終善且有、今年も亦豐熟なるを知るなり。曾孫不怒、農夫克敏、此の如く善なるを見ては曾孫怒らず、怒らざるも農夫は怠惰せず、其の業に敏求なるなり。

曾孫之稼　如茨如梁　曾孫之庾　如坻如京　乃求千斯倉　乃求萬斯箱　黍稷稻粱　農夫之慶　報以介福　萬壽無疆

曾孫の稼、茨の如く梁の如し、曾孫の庾、坻の如く京の如し、乃ち千斯の倉を求め、乃ち萬斯の箱を求む、黍稷稻粱は、農夫の慶、報ゆるに介福を以てし、萬壽疆無けん、

【句釋】曾孫之稼、如茨如梁、曾孫が領地とする所の稼、高處より之を見れば茨卽ち草屋の隆きが如く、低處より之を見れば梁卽ち橋の如くなり、蓋し未だ刈らざる時なり。曾孫之庾、如坻如京、庾は露積、卽ち穡の已に刈りて地に積み、而して未だ倉に入れざるもの、水中の高地卽ち坻の如く、亦高丘卽ち京の如くに見ゆるなり。乃求千斯倉、乃求萬斯箱、倉は刈し穡を收藏せんが爲め求む。箱は卽ち穡を倉に運搬せんが爲めに求む。嚴粲曰く、先に倉を言ふは之を貯へんが爲めなり、後に箱を言ふは之を載せん

が爲めなり。黍稷稻粱、農夫之慶、報以介福、萬壽無疆、履軒先生曰く、年の豐熟は神が農夫に錫ふ所以にして、農夫の享る所なり、我乃ち旁より其の利を收め、而して其の休を享く、農夫に報ずる所以を思はざるべけんや。故に曰ふ報以介福、萬壽無疆と。而して此の壽福亦我が能く畀ふる所にあらず、宜しく之が爲め神に禱るべし、然れども詩意、上に報ずるに重くして、上に禱るにあらず、且是れ祝辭亦必ず實に神に禱るにあらず。之を要するに辭を以て意を害する勿くんば可なり、古は天子諸侯、年穀を祈るや必ず曰ふ民の爲め祈るなりと。蓋し自から祈るにあらず。是の詩豐熟の福を推す、農夫の慶を爲す、亦宜ならずやと。

【評論】甫田は四章十句を以て成る。徐光啓曰く、此の詩諸說紛紛たり、前面の三章を將て、時、月、次第相因んと要するに過ぎず、故に牽合附會を爲て以て其の所見を就す、詩人の詩を作る、史官史を作ると同じからざるを知らず、史家は編年敍事、錯亂を容さず、詩人の旨の若き、一章自から一義を爲す、或は時に順じ事を述べ、或は錯舉して文を成す、或は預じめ將來を道ふ、或は追て往昔を稱し、或は端を耍め別に敍べ、或は言を重ね復說し、或は枝に因て葉を振ひ、或は波に沿うて源を討め、章を換るときは事を換へ、韻を換るときは意を換へ、變化錯綜、春山夏雲頃刻態を異にし、拿理すべからざるが如く、初より拘拘として時月を以て先後を爲すにあらず、此の如き詩、本是れ報賽の樂、當に秋祭の時に

作るべし。首章は耘耔の勤を述ぶ、二章は報ずる所の禮を說く、三章は農の時を省して、上能く下に感ず、末章は收成の事、君民に報いんと欲す、各の一事を擧げ、各の一事を敍す、則ち次章を秋時の祭と爲す、義に於て既に通ず、三章、耘を省し穫を省すると爲すを論せざるも、都て不可無し、何ぞ必ずしも瑣瑣として傅會せん、凡そ詩を說く大旨を體會し、圓融活脫せんことを要するときは、觸處康莊なり、若し拘攣局促して舊聞に泥滯せば、脣腐り齒落つと雖も、葛藤の窠臼を出でず。

大田多稼　既種既戒　既備乃事　以我覃耜　俶載南畝　播厥百穀　既庭且碩

曾孫是若

小雅　北山

【句釋】大田多稼、田廣大なるが故に稼は多きなり。既種既戒、其の種を擇んで種る而して耒耜を修め、田器を具す、此を之れ戒と言ふ。既備乃事、其の地の宜しきを相て、種を下し、之に加ふるに耒耜の宜しきあり、農事に關する事備はらざるは莫し、乃ち以て農業を事とすべきなり、是れ將に耕やさんとするの時、孟春の候なり、季冬にはあらず。以我覃耜、覃は利、利は「トガル」、能く畊に供する耜なり。俶

は『箋』に熾とあり、朱子は始とあり、載は事、農事を南畝に始むなり。播厥百穀、播は播施、禾でも穡でも稻でも豆でも悉く播施するなり。既庭且碩、庭は直なり、碩は大なり、生ずる所の苗、直くして且大なるなり。曾孫是若、若は順なり、曾孫の欲する所に順がふなり。士女を養ひ、國用に供する願に順ふとなり。『箋』曰く、成王（曾孫）是に於て則ち力役を止め、以て民事に順ひ、其の時を奪はず。『箋』の意誤れるに似たり、今從がはず。三句一截の詩なること顧氏說く所の如し。徐光啓の通章一韻說は余信せず。

既方既皁　既堅既好　不稂不莠　去其螟螣　及其蟊賊　無害我田穉　田祖有神

秉畀炎火

既に方なり既に皁れり、既に堅く既に好くして、稂あらず莠あらず、其の螟螣と、其の蟊賊とを去り、我が田穉を害ふこと無けん、田祖神あり、秉りて炎火に畀へん、

【句釋】既方既皁、方は房なり、孚甲始めて生じて未だ合せざる時なり、皁は孚甲既に實りて而かも未だ堅からざるなり。既堅既好、既にして堅固と成り、既にして好穀と成るなり。不稂不莠、稂も莠も稻田を害する草なり、然るに今此の草無し、好禾盛んなる所以。去其螟螣、及其蟊賊、去は取り去るなり、螟螣は稻の害蟲、稻心を食ふもの螟にて、稻葉を食ふが螣なり、稻根を食ふが蟊にて、稻節を食ふが賊

なり、害苗の蟲を除去せずんば稻は實らず、心葉根節を悉く食ふは其の害の甚大なるを言ふ。『毛傳』には蟊と賊とを二蟲と爲すが如く見ゆれども、何玄子は曰く、蟊賊是れ一蟲、之に命じて賊と爲すは深く之を惡むなり。無害我田穉、穉は字の如く幼穉、稻の苗を言ふ、苗は冒され易し、稻の靑靑たるを害せらるるは猶ほ言ふまでも無きが、苗を害せらるるは最も畏る可し、是を以て彼の害蟲を去らば始めて以て其の秀實するを得ん。田祖有神、秉畀炎火、田祖に若し神靈あらば、庶幾は我を助けて是の蟲害を除き玉へとなり、田祖の力にて此等の害蟲を秉て、炎火に畀へ玉へとなり。朱公遷曰く、稂莠を去るは人に在り、蟲蝗を去るは神に在り、故に田祖に望むこと此の如し。此の意或は然らんか。

有渰萋萋　興雨祁祁　雨我公田　遂及我私　彼有不穫穉　此有不斂穧　彼有遺

秉　此有滯穗　伊寡婦之利

渰たるあり萋萋たり、雨を興すこと祁祁たり、我が公田に雨ふらし、遂に我が私に及べ、彼に穫らざる穉あり、此に斂めざる穧あり、彼に遺秉あり、此に滯穗あり、伊寡婦も之利とせん、

【句釋】有渰、『毛傳』に渰は雲の興る貌、萋萋は雲の行く貌とあり。朱子曰く、萋萋は盛んなる貌、今案ずるに『說文』に有渰淒淒は急雨來らんと欲するの狀、未だ嘗て風を兼て之を言はず。今詩有渰萋萋に作るは非なり。『呂覽』『漢書』『玉篇』『廣韻』皆淒淒に作る。渰は『漢書』黯に作る。黑雲曀の如く淒風

怒生す、此れ山雨來らんと欲して風滿レ樓ニの象なり。既にして白雲彌漫、風定まり雨甚し。則ち興雲祁祁、雨我公田なり。詩の物を體する、瀏亮是の如し。是に由て之を觀れば、萋萋は誤にして淒淒は正なりと知るべし。履軒先生曰く、萋淒通ずと、通ずと雖も淒字を用ふるの善に及かず。祁祁は『爾雅』に徐とあり、『毛傳』に徐靚とあり。『正義』に是れ行道の貌とあり。『廣韻』に盛とあり。朱子は徐の義を取て曰く、雲は盛んならんことを欲す、盛んなるときは多く雨ふる、雨は徐からんことを欲す、徐きときは土に入る。『箋』に曰く雨の來ること祁祁然として暴疾ならざるなり。二說共に明解、異議あるなし。公田、私田、周代の田制は今に於て明白に知り難きも、朱子は前章の倬彼甫田、歲取十千を注して曰く、甫は大なり、十千は一成の田を謂ふ、地方十軍を田九萬畝と爲す、而して其の萬畝を以て公田と爲し、百畝を以て私田と爲し以て公田を養ふ、蓋し九一の法なり。『鄭箋』に曰く、九夫を井と爲し、井一夫に稅すと。而して今の章に於て朱子曰く、公田は方里にして井す、井は九百畝、其の中を公田と爲し、八家皆百畝を私して同じく公田を養ふなり、乃ち公田よりの收穫を以て租稅と爲して納め、私田は以て私の利と爲す。周の制、人民二十二に達すれば田百畝を受け、次子は十六にして其の四分の一、卽ち二十五畝を受けて畊やす、年六十に至りて之を返す、百畝は我邦の一町七反餘に當れば、裕に六七人の家族を養ふを得べし、乃ち以て公田の潤澤を先きに願ひ、後に私田を願ふ。履軒先生曰く、私田は私曲を指すな

り、卽ち定名なり。曲と云ふにも及ばざるなり。『箋』曰く、民君德を怙み、其の餘惠を蒙むるを言ふ。彼有不穫穉、彼の處には猶ほ未だ穫入れざる穗の小なるあるなり。此有不斂穧、此の處には猶ほ未だ斂めざる禾穧あるなり。彼有遺秉、彼の處には已に遺棄られたる禾把あるなり。此有滯穗、此の處には滯漏たる禾穗あるなり。伊寡婦之利、夫の無き女を寡婦と言ふ、賴る者無き寡婦の利とするものは何ぞ、曰く穫り餘したる穉、取り斂めざる穧、遺棄したる秉、刈り漏したる禾穗、此の四つのもの卽ち寡婦の收めて以て我が命を保つものなり、豐年にして其の餘りあるを言ふ。朱子曰く、既に以て不費の惠を爲すに足て、亦地に棄てられざるを見る、然らざるときは粒米狼戾して天物を輕視して、漫に之を棄つるに殆からずや。

曾孫來止　以其婦子　饁彼南畝　田畯至喜　來方禋祀　以其騂黑　與其黍稷
以享以祀　以介景福

曾孫來止、其の婦子を以て、彼の南畝に饁す、田畯至りて喜ぶ、來りて方に禋祀す、其の騂黑と、其の黍稷とを以てし、以て享し以て祀す、以て景福を介にす、

【句釋】曾孫以下四句十六字は前に出せる甫田章と全く同じ、其の意義も全く異ならず。來方禋祀、朱子曰く、方は四方の神を禋祀して賽禱す。朱公遷曰く、來方禋祀は來禋祀四方なり、語倒なること此の

如し。要するに朱子一派の學者は皆四方と見るなり。而して朱子は『鄭箋』に據ること勿論なり。然るに履軒先生曰く、方は猶ほ將のごとし、方祀にあらず、是の章禋祀は乃ち秋成報賽、古人既に必報を祈る、前篇言ふ以社以方と、知る可し此の禋祀、乃ち方社並びに其の中に在り、但經文方字を以て方祀と爲す可らざるのみ、舊解の若きは文既に順せず、且方を擧げ社を遺す、輕重を失するに似たり。嗚乎此の神解古今の暗雲を一掃し去れり。乃ち「來ッテ方ニ」と訓す、禋祀、禋は朱子曰く、精意以て享す、之を禋と謂ふ。履軒先生曰く、精意以享謂二之禋一、是れ相傳の說と雖も從ひ難し。夫れ祭祀は精ならずして享く可き者あらんや、蓋し漢儒字義を失す、姑らく臆度の解を作すのみ。今謂く段氏の『說文解字注』に禋字を解して曰く、禋は絜祀なり。韋昭注『周語』同じく『釋詁』に禋は祭なり。孫炎曰く、絜敬の祭なり。一に曰く、精意以享爲レ禋と、段氏曰く。凡そ義に兩岐あるもの一曰の例、山海經韓非子に出づ、故に訓傳皆然り、但「說文」多く淺人あり、其の不備を疑うて而して周語に竄入する者、內史過つて曰く、精意以享禋也、絜祀の二字已に之を苞む、何ぞ必ず端を耍め偁引せんや、此を擧げ以て隅反すべし。(以上)履軒の說準據する所、此に在るなり、『周禮』春宮の注に禋の言は煙なり、周人臭を尙ぶ、煙氣の臭聞ゆる者、又芬芳の祭、是の故に禋祀は絜祀卽ち「キヨクマツル」と解して可なり、精意を以て解したる者は全然臆斷なり。絜は潔の本字なり。以其騂黑、與其黍稷、朱子曰く、四方各の其の方色の牲を用ふ。

此に騂黑を言ふは、南北を擧げ以て其の餘を見はすなり。呂東萊も略ぼ此の說と同じ。履軒先生曰く、騂黑は特に其の色を稱するのみ、猶ほ玄黃と稱するが如きなり。『禮』に諸侯四方を祀るを得ず、唯當方を祀る、則ち斷斷騂黑を以て東北の牲と爲す可らず、所謂南方か北方か或は東方か或は西方か其の當りし一方を祀るなり。已に四方を否定す、此の說を爲す所以。『箋』も朱子も亦破却され畢る。騂は赤牛、黑は羊と豕となり。以享以祀、以介景福、祀は祭と同じ、然れども和訓に「ヤシロ」を以てするときは祖先の神位を置き、屋樹ある者の稱なり、享は亨と同じ、祭なり受なり。孔安國曰く、上に奉るを之を享と謂ふ、又薦の義を有す、今は上に奉るの義なり。介も景も共に大なり、大なる幸福を子孫は受くべしとなり。朱公遷曰く、甫田の章と略同じ、但彼は君上農を勸め、而して農夫の勤を見る、此は農夫相勸めて以て君上の心を慰す、一は耘耔の時たり、一は收斂の時たり。

【評論】大田は四章。二章は八句、二章は九句を以て成る。『毛傳』曰く、大田は幽王を刺るなり、矜寡自から存する能はざるを言ふ。『鄭箋』曰く、幽王の時政煩賦重、農事を務めず、蟲災穀を害し、風雨時ならず、萬民饑饉、寡を矜で活を取る所なし。故に時臣古を思うて之を刺る。是の解然るや否やは知らず、姑らく記して後賢に問ふ。

瞻彼洛矣　維水泱泱　君子至止　福祿如茨　韎韐有奭　以作六師

彼の洛を瞻れば、維水泱泱たり、君子至止、福祿茨の如し、韎韐奭たること有り、以て六師を作せり、

【句釋】瞻彼洛矣、洛は和本の『集注』雒に作る、無用の字なり洛を以て可とす、即ち東周の都城にして洛邑とす、今日の河南省河南府なり。維水泱泱、洛水は源を陝西省の洛南縣より發し河南を貫通して以て黄河に合す、河南に在て特に大河とす、泱泱は水の深廣なる貌。君子至止、『箋』曰く、來りて爵命を受る者即ち君子なり、天子を指して言ふなり。福祿如茨、茨は音「シ」前に屢辨せり。茅茨と熟語して以て屋を覆ふものなり、爵命を福と爲し、賞賜を祿と爲す、其の福祿の多きを譬ふるに草屋の隆高を以てするなり。韎韐は俗に云ふ「アカネゾメノカハ」即ち蒨なり茅蒐なり、染めて以て絳色を出すもの。韋昭曰く、急疾に茅蒐を呼んで韎と成る、故に因て以て其の染むる所に名く、韐は韠なり、是れ膝を蔽ふの衣なり。李氏曰く、韋を合せて之を爲る、故に之を韐と謂ふ、軍士の膝を蔽ふの具と知らば可なり。有奭、奭は「セキ」、又は「キョク」の音あり、盛なり赤なり赩なり、韎韐を形容しての語なり。以作六師、六師は六軍なり、一萬二千五百人を一軍とし、六軍は總て七萬五千人なり。『箋』曰く、此れ諸侯の世子なり、三年の喪を除き、士服を服して來る、未だ爵命に遇はざる時、時に征伐の事あり、天子其の賢なるを以て、任じて軍將と爲し、卿士に代らしめ、六軍に將として出づ。朱子曰く、此れ天子諸

侯を東都に會して以て武事を講じ、諸侯天子を美むるの詩、言ふこころは天子此の雒水の上に至り、戎服を御して六師を起すなり。『箋』も朱子も暗中摸索の說、分明に據る所あるにあらざるも、朱子の說を以て近きと爲すもの多し、姑らく從ふ可し。

瞻彼洛矣　維水泱泱　君子至止　鞞琫有珌　君子萬年　保其家室

彼の洛を瞻れば、維水泱泱たり、君子至止、鞞に琫と珌あり、君子萬年、其の家室を保たん、

瞻彼洛矣　維水泱泱　君子至止　福祿既同　君子萬年　保其家邦

彼の洛を瞻れば、維水泱泱たり、君子至止、福祿既に同まれり、君子萬年、其の家邦を保たん、

【句釋】鞞は容刀の鞘なり。琫は或は韡に作る、鞘の上方の飾の名。珌は和訓「コジリ」、鞘の下方の飾の名。『毛傳』に曰く、天子は玉琫にして珧珌、諸侯は盪琫にして鏐珌、大夫は鐐琫にして鏐珌、士は珕琫にして珕珌なり、珧は蜃の屬、盪は黄金なり、鏐は白金なり、珕も亦蜃の屬なり。君子萬年、保其家室、『箋』曰く、德是の如くなるときは、能く長く其の家室の親を安んず、家室の親之に安んずるは尤も難し、安んずるときは簒殺の禍なし、腐語に近き說明なれども要亦此の如きなり。同は聚まる也。瞻彼洛矣は三章六句を以て成る、別に評論するの深義を有せず。

裳裳者華　其葉湑兮　我覯之子　我心寫兮　我心寫兮　是以有譽處兮

裳裳たる者は華、其の葉湑、我之の子を覯れば、我が心寫せり、我が心寫せり、是を以て譽ありて處る、

【句釋】裳裳は『毛傳』曰く、猶ほ堂堂のごとし。履軒先生曰く、蓋し美盛の貌、堂堂と同じからず、裳と堂と元同字、常に作る義同じ、董氏の古本常常に作ると云ふは說通せざる甚し、下文に芸其黃矣とあり、常棣花、豈芸黃なるものあらんや。今謂ふ朱子は『毛傳』の說を信じて裳裳は常棣花なりと云ふ、嚴粲も朱子を是とする者の如し、乃ち言ふ所謂裳裳者華は亦當に衣裳の穠厚の如くなるべしと。履軒云ふ、常棣豈芸黃のものあらんやと。常棣は白もある黃もある、斷じて黃色無しとは何に據て言ふなるやを知らず。今舊說に從つて履軒に從はず。其葉湑兮、湑は元來零露を形容する字、今假借して葉の美盛を形容するなり。我覯之子、覯は音「コウ」訓「ミル」見なり、遇て見るなり、宋儒多く「アフ」遇と讀む、高宗の諱を避くればなり。我が日本人は「アフ」と讀むの要無きなり。『箋』に曰く、之子は古の明王を謂ふ。我心寫兮、『箋』に曰く、我が心の憂ふる所、寫して去るなり。朱子曰く、其の心傾寫して之を悅樂するなり、朱說非にして、箋說是なり、我が憂除き去るなり。我心寫兮、前語を重用して其の意を重からしむ。是以有譽處兮、『箋』に曰く、是れ則ち君臣相與に聲譽常に處なり、我が憂と

は何ぞ、讒諂並びに進むことなり、此の讒諂の者無きときは、憂無し、憂無きときは聲譽あるなり、處を朱子は安なりと訓す。『通解』曰く、我之子を覯は、蓋し之を洛水の上に見るなり、說て上篇と相關することを要す。顧氏曰く、華榮なるときは葉盛ん、臣遘ときは君悅ぶ、興意大段是の如きなり。

裳裳者華　芸其黃矣　我遘之子　維其有章矣　維其有章矣　是以有慶矣

裳裳たる者は華、芸として其れ黃なり、我之の子を遘れば、維其れ章あり、維其れ章あり、是を以て慶あり、

【句釋】裳裳者華は古來より「裳裳たる華」と讀む、今裳裳たる者は華と讀む、唯我が讀法に從ふのみ。芸は芸然なり、黃色の盛んなる形容字。其黃矣、常棣の黃色は普通なるに履軒之無しと云ふ、見尋を失するの說なり。我遘之子、遘は覯と同じ。維其有章矣、章は文章の章なり、君子の威儀、野ならず卑ならず、自から粲然として章あるなり。維其有章矣、是以有慶矣、『箋』曰く、章は禮文なり、言ふこころは我古の明王を見ることを得ば、賢臣無しと雖も、猶能く其の政をして禮文法度あらしむ、政に禮文法度あるは是れ則ち慶賜の榮あるなり。朱子曰く、文章は德の容貌に見はるるものなり、和順中に積で、英華外に發す、交際の頃、儀に愆たざるときは、上君に得て、福を獲ること必然なり。前章は兮字、此の章は矣字を以てす、意を要する所なり。

裳裳者華　或黃或白　我覯之子　乘其四駱　乘其四駱　六轡沃若

裳裳たる者は華、或は黃或は白、我之の子を覯れば、其の四駱に乘れり、其の四駱に乘り、六轡沃若たり、

【句釋】四駱は四頭の馬にて引く車を言ふ、駱は白馬にして鬣黑色なるを言ふ。六轡、轡は「クツワ」なり、此の轡字は車が主か糸が主か或は口が主か車と糸と口と三字結合してある、而して主とする所は中を串く車が主たることと知るべし。沃若は轡の新にして美なるを形容す。『傳』曰く、是れ祿を世にするを言ふ。『箋』曰く、我明王の德の駿なる者を見ることを得ば、慶譽無しと雖も、猶能く讒諂の害を免かれ、我が先人の祿位を守り、其の四駱の馬、六轡沃若然たるに乘るなり。華の色は黃白齊しからず、之子の馬は則ち其の色齊し、此れ其の意を反して以て興を爲すなり。(朱公遷)明王の德は花の如く駿あり純あり、然るに之子は其の祿を世にす、小人輩が讒諂の結果、或は伯爵と爲り、或は公爵と爲り、其の祿を子孫に至るまで傳ふ、詩人の刺意言外に彰然たり。

左之左之　君子宜之　右之右之　君子有之　維其有之　是以似之

之を左し之を左す、君子之に宜し、之を右し之を右す、君子之を有てり、維其れ之を有てり、是を以て之に似げり、

【句釋】左は宜と言ひ、右は有と言ふ。宜と有に就て何等か意義の異なりあるかの如く思惟するが、宜しきは卽ち有つなり、有つは卽ち宜しきなり、前之後之の文句を挾入するとも、意義に於て惡きにあらず、要するに君子は左するも、右するも、或は前、或は後、皆宜しからざるは無く、皆有たざるは無しとなり。維其有之、是以似之、子孫が先人の宜しく有つ所の心を以て我も亦之を有つ、是を以ての故に之に似ぐ、似は嗣なり。『毛傳』曰く、左は陽道にして朝祀の事、右は陰道にして喪戎の事。『箋』曰く、君子は先人を指す、多才多藝にして朝に禮あり、國に功あり、維我が先人是の二德を有す、故に先王之をして祿を世にし、子孫之を嗣がしむ、讒諂竝進に遇て、棄絕せらるる也。『傳』曰く、此の四章は幽王を刺るなり、古の仕る者祿を世にす、小人位に在れば則ち讒諂竝進す、賢者の類を棄て、功臣の世を絕つ。別に評論を設けず、四章六句なり。

桑扈の什二の七

交交桑扈　有鶯其羽　君子樂胥　受天之祜

交交たる桑扈、鶯たる其羽あり、君子樂み胥ふ、天の祜を受けん、

【句釋】交交は鳥の飛で來去する形容。桑扈は『爾雅』に桑鳸に作る、竊脂なり。鳥の名。有鶯其羽、鶯は鳥の鶯を言ふにあらず、桑扈の羽の色鶯然として文章あるを言ふなり、文法にて言へば、名詞の實字を變じて形容詞の虛字と爲すなり、人が此の鳥の文章の美を見て以て君子の禮法威儀見るべきあるを興するなり。君子樂胥、受天之祜、君子は諸侯を言ふ。胥は朱子曰く、胥は語の詞。『毛傳』曰く、胥は皆なり。『箋』曰く、胥は才知ある者の名なり。履軒先生曰く、胥は相なり、淪胥の胥と同じ、淪胥は「オチイリアフ」卽ち相牽引なり、然らば則ち樂み相なり。『傳』の皆說是に近し、朱子の語詞は破れ了る。祜は福と同じ。天子諸侯と燕飲す、其の時の樂歌是れなり。

交交桑扈　有鶯其領　君子樂胥　萬邦之屏

交交たる桑扈、鶯たる其の領あり、君子樂み胥ふ、萬邦の屏なり、

【句釋】領は頸なり。長樂の劉氏曰く、領は首として身に出る所以のもの、作爲するあらんと欲すれば、

未だ其の羽を動かさずして、先づ其の領を奮ふ、文彩四に張る、鶯然として愛すべきなり。萬邦之屏、屏は蔽なり、屏の用たる物たる、外を禦ぎ以て內を蔽ふ。『箋』曰く、王者の德、賢知位に在るを樂しむ、則ち能く天下の爲めに四表の患難を蔽捍す、之を蔽捍するは蠻夷率服して侵畔せざるを謂ふなり。

之屏之翰　百辟爲憲　不戢不難　受福不那

之屏たり之翰たり、百辟憲と爲す、戢めざらんや難まざらんや、福を受くること那からざらんや、

【句釋】之屏之翰、『傳』に曰く翰は榦なり、牆の兩邊に當つて板にて塞ぐ所以のものなり。顧夢麟曰く、之屏之翰は蓋し上文を承て猶ほ萬邦之屏、萬邦之翰と云ふが如し、假樂、之綱、之紀と一例、萬邦の二字を忘了すべからず。百辟は百侯なり、辟の本義は法なり、理なり、其の法を行ふ者は君主なるを以て之を君侯の意味に代用するなり。爲憲、憲も法なり。顧夢麟曰く、百辟は卽ち萬邦の諸侯を謂ふ、但し法と爲すは、又其の屏翰を法とするにあらず、只屏翰の中に在て、每事之を以て法と爲すのみ、翰は榦なり。榦字木に從うて干（幹）に從はず。『釋詁』に曰く、楨は榦なり、然らば則ち楨榦と言ふは皆牆を築くを以て喩と爲す、榦は是れ牆の主、但字彙に據るに楨榦は築牆の版なり、兩頭を楨と曰ひ、兩邊を榦と曰ふ、則ち義又小辨す。不戢不難、戢音「シフ」、訓「ヲサム」斂なり、（斂ハ音カン斂ト異ナル）聚斂せざらんや、聚斂するは君たるの務なり。難は畏愼の意、君たる者は畏愼せざるべからざるなり。受福不那、那は多

なり。福を受ること多きを貴ぶなり。王臨川曰く、戢るときは肆ならず放逸ならず、難ときは易からず、傲慢ならず、然らば則ち福を受くること豈多からざらんや。

兕觥其觩　旨酒思柔　彼交匪敖　萬福來求

兕觥其れ觩り、旨酒思れ柔かなり、彼の交り敖れるに匪ず、萬福來り求めん、

【句釋】●兕觥は前に辨ぜる如く兕にて製せる爵なり。其觩、觩は曲なり。『箋』曰く、古の王者、羣臣と燕飲するに、上下禮を失する者無し、其の罰爵徒に觩然として陳設するのみ。觩は餠を以て正字とす。觩は俗字宜しく觝に改書すべし、旨酒は美酒。思柔、思は語助なり、「オモフ」にあらず、柔は人の和柔を言ふにあらず、美酒を形容して言ふと解す可し、彼交匪敖、彼は此に會する君子を指す、君子の交りや禮を守る、是を以て敖慢なる者無しとなり。萬福來求、我に守る所あり、我萬福を求めず、萬福來りて我に求むるものの如きを言ふ。

【評論】桑扈は四章四句を以て成る。『傳』曰く幽王を刺るなり、君臣上下動て禮文無きなり。『箋』曰く、動て禮文無しとは事を擧て先王の禮法威儀を用ひざるなり。詩の旨、善を擧げて以て惡を諷するなり。

鴛鴦于飛　畢之羅之　君子萬年　福祿宜之

鴛鴦于に飛ぶ、之を畢し之を羅す、君子萬年、福祿之に宜うす、

【句釋】●鴛鴦は中村惕齋曰く、鳧の類、色をしどりに似て、首に長き白毛あり、今のたかべと云ふ鳧、これにちかし。何に據て言ふやを知らず。『傳』に鴛鴦は匹鳥なりとあるを信じて、「ヲシドリ」と卽ち是れなり、をしどりに似たるにはあらず。●畢は小罔にして柄の長き器。●羅は大網なり。乃ち張て以て鳥を待つ、鴛鴦の飛ぶあらば、之を畢し之を羅し。●君子萬年なるときは福祿宜之、徒らに萬年なるべからず、萬年ならば福祿も之に添ふべし、福祿添ふときは必ず萬年なり、君子は天子を指す、鴛鴦を羅するを興として、天子の萬年を頌するの意、如何なる所に味の存するや分明ならず、卽目卽景を興として、深き意味は無かるべし。

鴛鴦在梁　戢其左翼　君子萬年　宜其遐福

鴛鴦梁に在り、其の左翼を戢む、君子萬年、其の遐福に宜しからん、

【句釋】●●●戢其左翼、戢は斂なり。朱子は張子の說を引て曰く、禽鳥竝棲む、一正一倒、其の左翼を戢めて以て內に相依る、其の右翼を舒て以て患を外に防ぐ、蓋し左は不用にして、右は便なる故なり。履軒先生曰く、左翼を戢むは右も同じ、詩人偶ま其の一を擧ぐるのみ、且一翼を舒るは以て風寒を遮ぎりて而して自から覆ふなり、鳥の竝び棲む、亦必ずしも一正一倒ならず、其の便に任すのみ、此を以て定則

と爲す者は拘す。若し夫れ右傴にして左不用なる者は人なり、禽鳥豈左右の辨あらんや、且右翼能く防ぐ所、未だ知らず何の患なるを、張說斷斷從ふべからず。羽翼と言はずして左翼と言ふ所より、朱子張子は字に拘して彼の如き說を爲ししならん、小兒の見解、履軒の爲め破却せらる。遐福は久福なり。『通解』曰く、上章は其の福祿竝得を言ひ、此の章は其の自然に必得を言ふ、鳥の翼を戢むるは、君の遐福を得るも亦自然なり、自若として懼るる無し。

乘馬在廄　摧之秣之　君子萬年　福祿艾之

乘馬在廄　秣之摧之　君子萬年　福祿綏之

乘馬廄に在り、之に秣かひ之に摧かふ、君子萬年、福祿之を綏ぜん、

【句釋】乘馬は明王乘る所の馬。廄は和訓「キザヤ」「ウマヤ」、卽ち馬屋なり。摧は莝なり、草を斬る之を莝と謂ふ。是を以て摧ると讀したる本もあり。今摧かふと讀む、生芻と見て支障あるなし。秣は粟なり、無事なるときは廄に繫ぎ、之に委するに莝を以てし、有事なるときは之に粟を與ふ、國用を愛するを言ふなり、艾は老なり、養なり、人の馬を飼ふを與として、天の君子を養ふの自然なるを言ふなり。綏は安なり。

【評論】鴛鴦は四章四句を以て成る。『傳』に曰く、幽王を刺るの詩なり、古の明王萬物に交はるに道あり、自から奉養するに節あるを思ふなり。朱公遷曰く桑扈は君を以て臣を禱る、故に頌禱の餘、戒敕を致す、此は臣を以て君を祝す、唯反覆頌禱して敢て其の德を擬議せず、敬の至なり。

有頰者弁　實維伊何　爾酒既旨　爾殽既嘉　豈伊異人　兄弟匪他　蔦與女蘿

施于松柏　未見君子　憂心奕奕　既見君子　庶幾說懌

頰たる者弁あり、實に維伊何ぞ、爾の酒既に旨く、爾の殽既に嘉し、豈伊異る人ならん、兄弟他に匪ず、蔦と女蘿と、松柏に施へり、未だ君子を見ず、憂心奕奕たり、既に君子を見る、庶幾くは說び懌ばん。

【句釋】有頰者弁、頰は「カシラアグル」と訓して頭を擧る貌、今以て弁を著る貌を言ふ。實維伊何、頰たる弁を著け傲然たる者は實に維何者ぞやと疑問を發する詞なり。乃ち答ふ、爾酒既旨、爾殽既嘉、酒は美なり、殽は佳なり、此の酒を飲み、此の殽を食ふもの。豈伊異人、此の席上には異人種は居ざるなり。兄弟匪他、水入らずの骨肉なり。蔦與女蘿、蔦は『毛傳』に寄生植物とあり。陸璣曰く、蔦一名寄生、葉當盧に似、子覆盆子の如し、本草經に桑上の寄生、一名寓木、一名宛童。按ずるに寓木、宛童は釋木に見る、艸に從ふ蔦と、木に從ふ樢と二種あり。『說文』明白に二種を說く、乃ち「ツタ」「ホヤ」「ヤ

ドリギ」と訓す。寄生にせよ木類にせよ、共に施蔓の草なり。女蘿は『毛傳』に兎絲なりと言ふ。非常に誤る。范泓曰く、女蘿は色青くして紬長し、帶の如く松上に浮蔓す。履軒曰く、女蘿は蓋し根生に屬す、兎絲に非ず。『本草綱目』に兎絲は田野荒園に多く之あり、其の子地に入て初めて生ず、根あり細絲の如く、自ら起つこと能はず、他草の梗を得て纏繞して生ず、其の根自から斷て、葉無く花あり、要するに類似のもの、仔細にすれば別種のものたる也。『淮南子』に曰く、下に茯苓あり、上に兎絲あり。又曰く、兎絲根無くして生じ、蛇足無くして行き、魚耳無くして聽き、蟬口無くして鳴く皆自然なりと。新學說に依れば魚も耳あるなり、蟬は羽にて鳴くなり、兎絲も最初は根あり、後に根が斷えるなり。施于松柏、施は寄生する意義、自から立つ能はざる物は他の松や柏に就て生を寄す。松柏は松柏なる一種の樹もあり、松と柏との二種もある、今は松及び柏の二種ならん、此の蔦の二句八字に就て、『毛傳』の解する所は曰く、此れ諸公の自から尊あるにあらず、王の尊に託するに喩ふ、諸公は蔦と女蘿の類、王は松柏の類なり。『箋』は此の意を敷延して曰く、王の尊に託するは王明なるときは榮え、王衰ふるときは微、王九族に親しまず、孤特自から恃み、己が將に危亡せんとするを知らざるを刺る、是れ蔦と松柏とを區別して解釋頗る明白なり。然して朱注を見んか、曰く蔦蘿木上に施り、以て兄弟親戚纏綿依附の意に比す、是を以て未だ見ずして憂へ、既に見て喜ぶなり。是れ『毛傳』に對して新說ならんも、兄

弟は蔦の如く纏綿なるは可なり、松柏の字を解して何に喩ふるや、蔦や女蘿は兄弟にて、松柏は父母に喩ふるや、解釋は人に在り、詩を作りし者の自注あらざるより、詩人の心は何處に在りしや毫も知るを得ず。朱子を喝破して堂堂たる履軒先生も、此の解釋に於ては頗る徹底せず。余は新說の不徹底を嫌ふ故、全く『毛傳』の意に從がつて此の詩を釋なり。未見君子、朱子曰く、君子は兄弟の賓と爲るものなり。『箋』曰く、君子は幽王を斥すなり、幽王久しく諸公と宴せず、諸公未だ幽王に見ゆることを得ざるの時、其の將に危亡せんとし、己依怙する所無きを懼る、故に憂心奕奕たるなり。既見君子、庶幾說懌、『箋』曰く、我若し已に幽王を見ることを得て之を諫正せば、庶幾はくは其れ變改して意解懌せん。朱子の說に從ふ人は曰く、兄弟相見ざるときは、憂心奕奕として靜まる無きも、今幸に寄り合ふ、こひねがはくは、相共に宴飲して懽を盡さんとなり。履軒曰く、未見君子の四句、初め未だ見ざる時の事情を述べ、既見は虛擬なり、庶幾の二字、豈敍喜の語を容んや、下章此に倣へ。既見は若見なり、見ざれば憂ふ、若し見れば喜ぶなり、既に見たり故に直に喜ぶの意にあらざるなり。朱子を破したるは可なり、幽王を指すなりや、又文字に表はれたる如く單に兄弟飲燕なるやを辨ぜざるは不徹底なり。

有『頍者弁』　實維何期　爾酒既旨　爾殽既時　豈伊異人　兄弟具來　蔦與女蘿

施于松上　未見君子　憂心怲怲　既見君子　庶幾有臧

頍たる者弁あり、實に維何期や、爾の酒既に旨く、爾の殽既に時し、豈伊異る人ならんや、兄弟具に來れり、蔦と女蘿と、松上に施り、未だ君子を見ず、憂心怲怲たり、既に君子を見る、庶幾くは臧あらん、

有頍者弁　實維在首　爾酒既旨　爾殽既阜　豈伊異人　兄弟甥舅　如彼雨雪
先集維霰　死喪無日　無幾相見　樂酒今夕　君子維宴

頍たる者弁あり、實に維首に在り、爾の酒既に旨く、爾の殽既に阜し、豈伊異る人ならんや、兄弟甥舅なり、彼の雪を雨とする如く、先集るは維霰、死喪日無くして、幾も相見ること無けん、酒を今夕に樂んで、君子と維宴せん、

【句釋】二章も三章も大意は一章と異ならず、但字句に就て言へば、何期は今體詩に用ふる「何ゾ期セン」にはあらず、「何ゾ」にて期は辭なり、誰ぞやなり。既時は既善なりと注すれども時字に善字の意を帶ぶる理由なし、然れども正しく是の時なぞと用ふる場合は善の意味にして、惡の意味は曾て無し、慶源の輔氏曰く、時を以て善と爲すは何ぞや、蓋し物其の時を得るときは善し、維其時矣の時と同じ、解し得て分明とす。具は皆なり俱なり。怲怲は憂の盛んなる形容。臧は善なり。（以上二章）在首は弁の頭上に在るを言ふ。阜は本義は大陸なり、或は山無ㇾ石也となり、盛也肥也厚也長也と訓す。『箋』に多也と注し

て以來今此の詩は殺の多くして阜の如くなるを言ふ。兄弟甥舅、此の四字の中には姊も妹も子も孫も盡收むるものと知る可し、甥は「ヲヒ」なり、舅は「ヲヂ」「シウト」なり。外甥、外舅、小舅の別あり。

如彼雨雪、先集維霰、天の將に雪を雨らさんとする始め必ず微溫、雪上より下る溫氣に遇て搏す、之を霰と言ふ、久しうして寒勝るときは大雪す、以て幽王の九族を親まざるも、亦漸あり、微より甚だしきに至るは、先に霰後に大雪に喩ふるなり。死喪無日、無幾相見、無日は餘日の多く無きなり、死し喪ぶる遠きに非ざるの謂ひなり、今後相見る幾許の日も無きなり。樂酒今夕、君子維宴、『箋』曰く、王政既に衰ふ、我依怙する所無し、死亡日數あることなし、能復幾何ぞ王と相見ん、且今夕此の酒を喜樂す、此れ乃ち王の宴禮なり、幽王將に喪亡せんとするを刺り之を哀むなり。朱子は前に同じく幽王には何等の關係なく、但普通文字上の兄弟親族の會合して、久しく相見ること能はず、但當に飲を樂み以て今夕の懽を盡し、親を親とするの意を篤くすべしと解す。

【評論】頍弁は三章十二句を以て成る。『毛傳』曰く、諸公幽王を刺るなり、暴戾にして親無く、同姓を宴樂し、九族を親睦すること能はず、孤危將に亡びんとす、故に是の詩を作る。

間關車之舝兮　思變季女逝兮　匪饑匪渴　德音來括　雖無好友　式燕且喜

間關として車の聲兮、孌たる季女を思うて逝兮、饑うるに匪ず渴するに匪ず、德音來り括ふ、好友無しと雖も、式て燕し且喜ばん、

【句釋】間關は車の轄を打つ響を形容す。聲は音「カツ」、訓「クサビ」、車軸の端鐵と注す、或は曰く、車の輾る聲と。今舊說に從がはず車の輾る聲を取る。車を馳て何處に向ふや。思孌季女逝兮、車を馳するは他にあらず、孌卽ち孌然たる季女卽ち處女を思うて逝かんと欲するなり。『箋』曰く、褒姒が惡を爲すを憎む、故に車を嚴にし其の聲を設け孌然たる美好の少女、齊莊の德ある者を得んことを思ふ、往て之を迎へ幽王に配し褒姒に代んと欲するなり、既に幼にして美、又齊莊、其の王意に當るを庶ふ。朱子曰く、此れ新昏を燕樂するの詩、故に言ふ間關然として此の車聲を設る者は蓋し彼の孌然の季女を思ふ、故に此の車に乘り、往て之を迎ふるなり。朱子に從ふ者は新說を取るべし、余は舊說に從ふ者なり。匪饑匪渴、德音來括、括は會なり、會合なり。『箋』曰く、時に讒巧國を敗り、下民離散す、故に大夫、季女を迎へんと欲するに汲汲、行道饑うと雖も饑ず、渴すと雖も渴せず、之を得て來り、我が王をして德教を修め、離散の人を會合せしめんと欲するなり。朱子曰く、其の德音來括を望んで、心饑渴の如くなるのみ、匪饑と如饑とは大に異なるべし、朱注の何とも辨ぜざる所、舊說以外に新說無ければなり。雖無好友、式燕且喜、『箋』曰く、式は用なり。我德音を得て來る、同好の賢友無しと雖も、我猶ほ是を用

て燕飲し、相慶し相喜ぶ。

依彼平林　有集維鷮　辰彼碩女　令德來教　式燕且譽　好爾無射

依たる彼の平林、集るあるは維鷮、辰たる彼の碩女、令德來り教へよ、式て燕し且譽あり、爾を好して射ふこと無し、

【句釋】依は『傳』に茂木の貌とあり。平林は字の如く林木の平地に在るなり。鷮は雉、翟より微小にして、鳴きつつ走る、其の尾長うして肉は甚だ美なり、贄に雉を以てするは其の耿介を取る、耿介は「イサギヨキ」なり、一矢に首を授け曾て生を欲するの念無し之を耿介と言ふ。辰彼碩女、令德來教、『箋』曰く、王若し茂美の德あれば其の時賢女來り配し、與に相訓告し德教を政修するに喩ふ。式燕且譽、好爾無射、碩女は女を敬稱しての言、大夫を碩人と稱するが如し、爾は此の碩女卽ち季女を指す、射は厭なり。『箋』曰く、我碩女の來り教ふるに於ては則ち是を用て燕飲し、且王の聲譽を稱し、我王を愛好して厭ふこと有ること無けん。

雖無旨酒　式飲庶幾　雖無嘉殽　式食庶幾　雖無德與女　式歌且舞

旨酒無しと雖も、式て飲まんことを庶幾ふ、嘉殽無しと雖も、式て食はんことを庶幾ふ、德の女と與にする無しと雖も、式て歌ひ且舞はん、

【句釋】此の章は一句一字に就て辨せざるも明白とす。『箋』曰く、諸大夫、賢女を得て以て王に配せんと覬ふ、是に於て酒美ならずと雖も、猶ほ之を用て燕飲し、殽美ならずと雖も、猶ほ之を食ふ、必ず皆王の變改して之を輔佐することを得んことを庶幾す、其の德無しと雖も、我女と與に是を用て歌ひ舞うて相樂まんとなり。『通解』曰く、式飲は酋を合して飲み。式食は牢を同じくして食ふなり。

陟彼高岡　析其柞薪　析其柞薪　其葉湑兮　鮮我覯爾　我心寫兮

【句釋】陟は登と同じ。岡は平地より高きものを總稱して言ふ、千仞岡と言へば非常に高きが如きも、彼の高岡に陟り、其の柞薪を析く、其の柞薪を析けば、其の葉湑兮、鮮我爾を覯れば、我が心寫兮、臥龍岡と言へば平地よりは稍や高き地たりしなり、然らば常識を以て解すべし、兒童の解を爲すべからず。析其柞薪、析は伐と同じ、柞は「ニレ」と訓する樹。『箋』曰く、其の柞を析て以て薪と爲す。其の柞を析て薪と爲す所以は、其葉湑兮、湑は盛なり、葉の茂盛ならずして朽木の如きは析くも功なし、是を以て葉の盛んなる柞を伐るなり。『箋』曰く、此れ賢女王后の位に在ることを得ば、則ち必ず嫉妬の女を辟除するに喩ふ、其の君の明を蔽ふが爲めなり。鮮我覯爾、我心寫兮、『箋』曰く、鮮は善なり。朱子曰く、鮮は少なり。錢氏曰く、鮮は希有なり。履軒曰く、鮮は無なり。今曰く各の義あり、而して履軒の如く解するを以て第一義とす。曰く若し我爾を相覯ること無きときは、我の憂心豈寫除するを得んやと。希有の解に從ふものは曰く、我爾に逢ふを以て希有なることとして喜び、心にのこることなきなり。意互に通ずと知る可し。

高山仰止　景行行止　四牡騑騑　六轡如琴　覯爾新昏　以慰我心

高山は仰止、景行は行止、四牡騑騑たり、六轡琴の如し、爾の新昏に覯うて、以て我が心を慰せん、

【句釋】高山仰止、字の如く高山は仰ぎ見ずんば能はず、止は語助のみ。景行は大道なり、又明道なり、道にあらずんば行く能はず、故に行を道と訓す。行止の行は「ユク」なり。『箋』曰く、諸大夫以爲らく賢女既に進むときは王も亦古人の高德ある者は則ち之を慕仰し、明行あるものは則て之を行ひ、其の羣臣を御する之をして禮あらしむること四牡を御して騑騑然たる如く、其の教令を持し、之を調均せしむること、亦六轡の緩急和あるが如きを庶幾なり。如琴は六轡の整齊絃條の如きを言ふなり。朱公遷曰く、四牡騑騑は是れ往て迎るの物、覯爾新昏は是れ成禮の後なり、是を以て朱子始終を擧ぐと曰ふ。徐光啓曰く、四牡以下の四句、始終の意ありと雖も文義斷えず、宜しく一直に說下すべし、始終意總見して可なり。覯爾新昏は令德來敎を謂ふ、以慰我心は饑渴の望を釋き、歌舞の樂を遂ぐるを謂ふ。車舝は五章六句を以て成る、毛傳と朱子との相違する所、大體辨じ終る。

營營青蠅　止于樊　豈弟君子　無信讒言

營營たる青蠅、樊に止まる、豈弟の君子、讒言を信ずること無かれ、

【句釋】營營は朱子曰く、往來して飛ぶ聲人聽を亂すに喩ふ。止于樊は之を外にし物に遠ざからしめんと欲め、黑を汙して白たらしむ、佞人善惡を變亂するなり。今言ふ遠ざからしめんと欲するも、樊は藩なり其の近きを如何せん、細木を以て作る牆を樊と言ふ。豈弟君子、豈弟の君子は幽王を指して言ふ。無信讒言、讒人は畢竟營營として食を求むる青蠅の如き者なり、黑白を變化して以て物を害す、君子は決して讒言を信じて善人を舍る勿れと戒むるなり。

營營青蠅　止于棘　讒人罔極　交亂四國

營營たる青蠅、棘に止まる、讒人極むこと罔し、交四國を亂す、

營營青蠅　止于榛　讒人罔極　構我二人

營營たる青蠅、榛に止まる、讒人極むこと罔し、我二人を構せり、

【句釋】棘、榛、共に諧韻の上より來る、棘は國、榛は人に對する韻のみ、樊なることは一なり。罔極、讒人の他に對して害を及ぼす究極する所罔きを言ふ。構我二人、構は「ヒク」牽なり結構なり、二人の間に何の隔無き所へ隔つるものを結構せしなり、以て讒人の讒人たる所以を發揮せり。

【評論】青蠅は三章四句を以て成る。大夫幽王を刺るの詩なり、幽王は在位十一年、昭王、厲王の在位五十一年に比すれば短なりと雖も、惡政を取て十一年、永からずとせんや、毛公の以て大夫が幽王を刺る詩と爲す、或は然るものならんか。

賓之初筵　左右秩秩　籩豆有楚　殽核維旅　酒既和旨　飲酒孔偕　鐘鼓既設
舉醻逸逸　大侯既抗　弓矢斯張　射夫既同　獻爾發功　發彼有的　以祈爾爵

賓の初めて筵につく、左右に秩秩たり、籩豆楚なること孔だ偕ふ、鐘鼓既に設けて、醻を舉ぐること逸逸たり、大侯既に抗げ、弓矢斯に張る、射夫既に同じく、爾の發功を獻ず、彼の有的に發して、以て爾に爵せんことを祈む、

【句釋】賓之初筵、客の來りて席に卽くなり。左右秩秩、左に坐する者、右に坐する者、各の次第あるを言ふ、秩秩は次第ありて亂雜ならざるなり。『箋』曰く、先王將に祭らんとす、必ず射て以て士を擇ぶ、大射の禮、賓初めて門に入る、堂に登り席に卽く、其の趨翔の威儀甚だ審らかに知て禮を失はず、射禮に三あり、大射、賓射、燕射なり。籩豆は祭具、前に辨あり。有楚、楚は列るなり。殽核、殽は豆に盛る菹醢の類を言ふ、核は籩に盛る桃梅の類を言ふ、他に種種の物を盛るも、且く其の一端を擧ぐる也。

酒既和旨、和は和調、旨は旨美、俗語の酒既に美にして、調子が善きなり。飲酒孔偕、賓客の飲酒する、威儀偕齊にして紊亂せざるなり。鐘鼓既設、鐘鼓は射禮に於て缺くべからざる樂器、之を中庭に設くるなり。舉醻逸逸、醻は酬と同じ、主人先づ賓に獻じ、賓酢して後、主人自から飲む、而して又賓に酬ゆ、賓之を席前に置き、未だ舉ず、旅酬の時之を舉ぐるなり。逸逸は『傳』曰く往來次第あるなり。一獻一酬之を往來と言ふ、起て往來する故に之を旅酬と言ふ。大侯は名詞にあらず、君の侯を言ふ、君の射る所を以ての故に之を大と言ふ、君臣と侯を別にすと言ふにあらず。大射禮に大侯は九十弓、彼三侯を張る其の九十弓は最高大なり。故に曰く、大侯と名くと、侯は射の的を付る幕なり、天子は熊侯白質、諸侯は麋侯赤質、大夫は布侯虎豹を畫く、士は布侯鹿豕を畫く、此れ謂はゆる獸侯なり、燕射は則ち之を張る、白質赤質は其の地を采るなり、白布は虎豹鹿豕の頭を正鵠(的)の處に畫く、君は一を畫し、臣は二を畫す、陽は奇、陰は偶の數なり、燕射は熊虎豹を射る、上下相犯すことを忘れず、侯は高さ一丈、其の正中三分して一に居るなり。既抗、抗は舉なり。朱子曰く、凡そ射侯を張て左下の綱を繫がず、中之を掩束す、將に射んとするに至り、司馬命じて侯を張る、弟子束を脱し、遂に下綱を繫ぐなり、侯既に抗ぐるを見て。弓矢斯張、『箋』も朱子も斯字を亦と爲して見たるは甚だ服し難し、侯の抗たるを見て、弓矢斯に於て張るなり。射夫既同、大射禮は羣臣を選んで三耦と爲す、若し大夫足らざれば士を以て之

に充つ、三耦の外、其の餘衆士、射者と各自に匹を取る之を衆耦と言ふ、而して今此の章は大射禮なるや、燕禮なるや分明ならず。王逢曰く、或は此を以て大射と爲し、或は燕射と爲す、竊かに意ふ此の章の旨、但射に因て之を飲むに禮節あるのみ、必ず拘して某射と爲さず。王說從ふべきに似たり。獻爾發功、的に命中したる事を奏獻するなり、奏獻する者は臣なり、奏獻せらるる者は君なり。發彼有的、以祈爾爵、有は付字何の意味なし、祈は求なり。『箋』曰く、射の禮、勝者、勝ざる者に酒を飲しむ、病を養ふ所以なり、爾は勝ざる者を指す、勝者先づ堂に上り、不勝者北面に進んで坐す、堂上に豐を置く、(爵ノ臺ヲ豐ト云フ)勝者の子弟、酒を觶に酌み豐下に置く、勝ざる者進んで自から飲む、而して勝者は其の勝ざる者に爵せんことを求むるなり。朱公遷曰く、觶は罰爵なり、豐は罰爵を承る所以、(臺ノ事ナリ)形豆に似て卑し、將に射んとする時禮節詳明、人心勉飭此の如し、其の酒を飲む者、威儀を正す所以なり。寧ろ亂に至らんや。

籥舞笙鼓　樂既和奏　烝衎烈祖　以洽百禮　百禮既至　有壬有林　錫爾純嘏
子孫其湛　其湛曰樂　各奏爾能　賓載手仇　室人入又　酌彼康爵　以奏爾時
籥舞笙鼓、樂既に和奏す、烈祖に烝め衎ましめ、以て百禮に洽す、百禮既に至り、壬なることあり林なることあり、爾に純嘏を錫ふ、子孫其れ湛めり、其れ湛んで曰に樂し、各の爾能を奏せり、賓は載ち手

ら仇み、室人入りて又す、彼の康爵を酌み、以て爾時を奏せり、

【句釋】籥舞は羽籥の舞、卽ち文の舞なり、籥を秉て舞ふ、笙鼓と相應ず。『箋』曰く籥は管なり、殷人先づ諸を陽に求む故に祭祀先づ樂を奏す、其の聲を滌蕩するなり。樂既和奏、先儒曰く、文舞あるときは干戚を以て舞ふ武樂もあるなり、笙鼓を言ふときは八音皆備はることも知るべし。烝は進なり。衎は樂むなり。烈祖、烈は祖に對しての美稱なり、又烈は功業の義で、功業ある祖先を言ふなりと。以洽百禮、洽は合なり、樂鼓は祖先の靈に進樂せしむるのみならず、是を以て百の禮に和合せしむるなり。百禮既至、至は至極、徹底的に至るなり。有壬有林、壬は大なり、林は盛なり、百禮の盛大なるを言ふ、『傳』に林は君なり、天下徧く至り、萬國の懽心を得るを言ふ。是の義亦通ず。壬の本義は十幹の名、「ミヅノエ」と訓す。終、侯、任、大の多義を帶ぶと知るべし。錫爾純嘏、『傳』に嘏は大なり。朱子曰く、嘏は福なり。『箋』曰く、純は大なり、天爾に大福を錫ふなり。子孫其湛、湛は湛樂なり。其湛曰樂、『說文』に依れば湛に樂の義あるを示さず、寧ろ『傳』の大と訓するを以て可とせん。然らば純も嘏も湛も皆大、是を以て正面の本義に依らずして樂と解す、亦可なり。各奏爾能、爾は「ナンヂ」にあらず、「ソノ」なり、各自に其の得意の能技を奏す、或は舞ひ、或は歌ひ、或は絃、或は吹く等なり。賓載手仇、『箋』に曰く、仇讀て斟と曰ふ。履軒先生曰く、仇と又と諧韻のみ、讀んで斟音と作すべからず、賓

が自から酌むなり。室人入又、室人は杯盤の間を周旋する人を言ふ。『傳』に主人なりと。『箋』は室中の事ある者を言ふと。『箋』に從ふべし。一杯一杯と賓も挹み、室人も復酌なり。酌彼康爵、以奏爾時、康は安康と熟語す、酒は體を安んずる所なればなり、時は時祭、爾の時節時節の祭を奏すとなり。朱子曰く、室人は食を佐くる人、主人の尸（尸ハ神靈）に饌を供ふることを佐くる者なり、主人の獻終りて後に賓の長者、手づから酒を酌みて尸に獻ず、之を加爵と言ふ。履軒曰く、賓の手づから酌み、室人の又入、皆酒酣にして相勸むるの狀なり、加爵酌尸の謂にあらず。尸に獻ずること絶無と言ふべからず、然れども此の章の意或は履軒に從ふべし。

賓之初筵　溫溫其恭　其未醉止　威儀反反　曰既醉止　威儀幡幡　舍其坐遷

屢舞僊僊　其未醉止　威儀抑抑　曰既醉止　威儀怭怭　是曰既醉　不知其秩

賓の初めて筵につく、溫溫として其れ恭し、其の未だ醉はざれば、威儀反反たり、曰に既に醉止、威儀幡幡たり、其の坐を舍てて遷り、屢ば舞うて僊僊たり、其の未だ醉はざれば、威儀抑抑たり、曰に既に醉止、威儀怭怭たり、是曰に既に醉ひぬれば、其の秩を知らず、

【句釋】溫溫其恭、此の章も初筵を言ふ、溫溫は『箋』に柔和なり、憤愼の反對なり、其恭は禮を亂さざるなり。止は語助。威儀反反、『傳』曰く、反反は重愼を言ふ。幡幡は威儀を失なふなり。舍其坐遷、

醉ふに從がつて己が坐を舍て他處に遷るなり。屢舞僊僊、僊僊は舞ふ貌。朱子曰く、軒擧の狀と、抑抑は『傳』に曰く慎密なり。怭怭は媟嫚なり。秩は常なり、反反と抑抑が慎重にて、幡幡と僊僊と怭怭とは不謹慎なり、凡そ飲酒者の常態として禮に始まり不禮に終る、治に始まり亂に終る。『箋』曰く、此れ賓初めて筵に卽くの時、能く自から勑戒するに禮を以てし、旅酬に至りて小人の態出るを言ふ、王既に君子を得て以て賓と爲し、又恆あるの人を得ず、天下を敗亂する所以率ね此の如きを言ふなり。

賓既醉止　載號載呶　亂我籩豆　屢舞僊僊　是曰既醉　不知其郵　側弁之俄
屢舞僊僊　既醉而出　竝受其福　醉而不出　是謂伐德　飲酒孔嘉　維其令儀

賓既に醉止、載ち號び載ち呶し、我が籩豆を亂し、屢ば舞うて僊僊たり、是れ曰に既に醉ひぬれば、其の郵を知らず、側弁の俄たる、屢ば舞うて僊僊たり、既に醉うて出づれば、竝に其の福を受く、醉うて出でずんば、是を伐德と謂ふ、酒を飲んで孔だ嘉きは、維れ令儀なり、

【句釋】號は呼號なり。呶は諠呶なり、大人と雖も、醉ば多少心理狀態の變を來す、況や小人に於てをや。亂我籩豆、籩豆は禮に禮を加ふるもの、然るに醉人は往往にして之を亂す。僊僊は『傳』に舞うて自から正しきこと能はざるなり。僊僊は止ざるなり。履軒曰く、僊僊も僊僊も竝に舞ふ貌、唐詩に花下に僊僊軟舞來と。郵は過なり、側は曲るなり。弁は冠。俄は俄然、俄然として冠の曲るも知らずに舞ふな

り。醉而出、竝受其福、『箋』曰く、出は出去なり。醉而不出、是謂伐德、賓辭して出づ、主人と俱に美譽あり、醉うて此の若くなるに至りて出ざるは是れ其の德を誅伐するなり。履軒先生曰く、受福とは福祿を神に受るなり、主人敬祭固より宜しく福を受くべし、賓の禮ある亦宜しく同じく福を受くべし、古人祭祀に於て必ず受福を云ふ、此亦必ず然らん、美譽の謂にあらず。履軒は『毛傳』に反對して美譽を福の外に於て見るものの如きも、要するに美譽も亦福なり、福と言はば物質的金銀米穀に限らざる可し。『詩』に曰ふ美譽は是れ福なりと。蓋し出と入に就て過と福との相違明白ならず、出づれば福を受けて出でざれば過を受く、何に因て然るや經文徹底せず、注疏亦一言の辨なし、屋外にては禮を失なはず、屋內にては禮を失なふに因て此の過福の相違を爲すものならんか、他に何等の妙解も發見せず。飲酒孔嘉、維其令儀、朱子曰く、飲酒の甚美なる所以は、其の令儀あるを以てのみ、今此の若くなるときは復儀あること無きなり。履軒曰く、令儀は飲酒の嘉なる者、以て儀軌と爲すべきを謂ふなり。孔嘉は令儀に出るにあらず。朱子は飲酒其のものが令儀なることに氣が付かざりしなり。

凡此飲酒　或醉或否　既立之監　或佐之史　彼醉不臧　不醉反恥　式勿從謂
無俾大怠　匪言勿言　匪由勿語　由醉之言　俾出童羖　三爵不識　矧敢多又

凡そ此の飲酒、或は醉ひ或は否らず、既に之が監を立て、或は之を佐くる史あり、彼醉うて臧からず、

醉はずんば反つて恥づ、式從つて謂ふこと勿れ、大に怠らしむること無かれ、言ふべきにあらざるは言ふこと勿れ、由ふべきにあらざることは語ることなかれ、醉の言に由はば、童羖を出でしめん、三爵だも識らず、矧や敢て多く又せんや、

【句釋】凡此飲酒、或醉或否、酒を飲んで醉ふ者と醉はざる者とある。既立之監、或佐之史、監は非違を視るの役なり、監視の語は不正の事にのみ對してあり、正事に監視は無用とす、然るに酒燕の席に之を置くは、酒席と雖も亂れざらんことを欲すればなり、其の監司を補佐するに書記官あり、之を史と言ふ。彼醉不臧、不醉反恥、醉者は縱令ひ惡事を爲すも、自から知らず、醉はざる者をして反て羞恥せしむ。式勿從謂、無俾大怠、勿は禁止の辭、醒者を戒しめて醉人を避けよとなり、醉人の旁に處して之を善導するは極めて善なるに相違なし、然りと雖も、彼既に醉ふ、縱令ひ之に告ぐるも、愼儀を以て聽かず、或は更に大に怠たるに至らん、宜しく姑らく之を避けて、抗すること勿れとなり。匪言勿言、匪由勿語、言はざるべからざることは言ふべし、言ふべからざることは言ふこと勿れ、由らしむべきことは語るべし、由らしむべからざることは決して語ること勿れ。由醉之言、俾出童羖、羖は「ヒツジ」なり、『毛傳』に童羖は羖羊童せざるなりと。童子は總角と稱して、頭髮を左右に結び恰かも角の如し、是を以て角の無き羊を稱して、羖羊不童と注したるものなり。醉人の言は本より理無し、必無の物を求め、

或は必無の事を欲す、譬へば人に請うて天下に斷じて無き無角の羊を出せと言ふにも至らん、是を以て與に語るべからざるなり。三爵不識、矧敢多又、『玉藻』曰く、君子の酒を飲むや、一爵を受けて色酒如たり、二爵にして言言斯禮のみ、三爵にして油油然として退く、其の三爵にだも昏迷して識らざる者、矧て其の上に多く飲むべけんや。徐光啓曰く、其の惡を監察し、史其の過を書す、一察一書、副貳を相爲す故に佐と曰ふ、醉人の言に繇て童羖を出さしむとは、蓋し人醉に至るときは、監史二官と雖も、以て其の失を糾すに足らず、凡そ諸義理の言、皆入ること能はず故に必無の物を設言して以て之を恐る、卽ち此の兩言、分明に是れ醉人に對する說話、見るべし古人、情境を模寫す、分明に是れ傳神肖象なり、詳らかに此の旨を諷す、亦醉人をして淫淫として汗下らしむ、式勿以下の句、皆上の反恥に本づきて來る、都て是れ不醉者が意中の事、持して以て之を醉者に告ぐと欲すとも得べからず、它羞愧の情狀を想見するに、目視るに忍びず、中安んずること能はず、分明に拊心趺足の態、宛然として目に在り、此れ等皆實話にあらず、全く意況を模寫せんと要す、若し認て實境と作さば、傳ち大旨を失す、不醉の狀を形容して、正に醉の恥べきを見る、數句一直に說下して斷せず。

【評論】賓之初筵は五章十四句を以て成る。『毛傳』曰く、衞の武公時を刺るなり、幽王荒廢し、小人を蝶近し、飲酒度無く、天下之に化す、君臣上下、沈湎淫液す、武公既に入て是の詩を作るなり。『箋』曰

く、淫液とは飲酒の時の情態なり。武公既に入るとは入て王の卿士と爲るなり。朱子の『集注』曰く、韓氏序に曰く、衞の武公酒を飲み、過を悔ゆ。今案ずるに此の詩意、大雅抑戒と相類す、必ず武公自悔の作ならん、當に韓が義に從ふべし。

安成の劉氏曰く、此の詩の意以て自警せんと欲す、抑の詩意亦以て自警なり。此の詩の意、酒に醉うて德を伐ふことを恐る。猶ほ抑の詩所謂、顚ニ覆厥德一荒ニ湛于酒一なり。此の詩の意反覆し威儀を以て言を爲す。猶ほ抑の詩、抑抑威儀、敬ニ愼威儀一、敬ニ爾威儀一、不レ愆ニ于儀一の如し。此の詩に、載號載呶、勿言勿語の意は、猶ほ抑詩に愼ニ爾出レ語、無ニ易由レ言の如し。此の詩童羖の語あり、抑詩亦彼童而角の喩あり、其の語意多く相類す。然れども抑の詩は凡そ女と言ひ爾と言ふ。『集傳』以爲らく武公詩を誦する者をして己に命ずるの詞と。今案ずるに此の詩凡そ賓と言ひ爾と言ふは亦武公自から謂ふならん、酒誥、酒を謹むの意を言ふ、以て父母慶克羞考羞饋祀則ち皆酒を用ふべしと爲るときは、乃ち反て飲酒の端を開く者の若し、亦武公酒を謹み、射に因て飲み、祭に因て飲むの意の若し、夫酒の禍を爲す、內は則ち人の德を喪し、外は則ち人の威儀を喪す、謹酒の要、亦唯力を二者に致すのみ、故に此の詩德を言ふもの一にして、威儀を言ふもの五、酒誥、德を言ふもの八にして威儀を言ふもの一、詳略互に相備ふ可し、武公此の詩、其れ眞に武王康叔の家法に得ることあるか。

魚在在藻　有ニ頒其首一　王在在鎬　豈樂飲酒

魚在り藻に在り、頒たる其の首有り、王在り鎬に在り、豈み樂んで飲酒せり、

【句釋】魚在在藻、魚在は魚が在るなり。在藻は魚が在る所の處を示すなり。藻は水草なり。『箋』曰く、魚の水草に依る、猶ほ人の明王に依るが如きなり、明王の時、魚何の處る所ぞ、藻に處る、既に其の性を得れば、則ち肥充して有頒其首あるなり。頒は魚首の大なる形容、頒は墳なり、字異なるも音と義は同じ、此の時人物皆其の所を得、正に魚を言ふもの、潛逃の類を以て其の著見を信にす。王在在鎬、王在は王が在るなり、在鎬は王が在る所の處を示すなり。『古義』曰く、在字を兩言するは、詩を作る者、自から詳審の辭を爲すと。鎬は今日の陝西省西安府、卽ち西周の都、武王殷を滅し、此に王位に卽きしより、成王、康王、昭王、穆王、共王、懿王、孝王、夷王、厲王、宣王、幽王、共に十二王、三百五十二年間は此の鎬に都す。幽王の子、平王に至りて始めて洛邑、卽ち河南省河南府に移る。王は周祖の武王なり。豈樂飲酒、『箋』曰く、豈も亦樂なり、天下平安、萬物其の性を得、武王何の處る所ぞ、鎬京に處る、八音の樂を樂しみ、羣臣と酒を飲むのみ。今幽王、褒姒に惑ひ、萬物其の性を失ふ、方に危亡の禍あり、亦鎬京に豈樂し飲酒して、悛心無し、故に此を以て刺る。豈は愷と同じ、『通解』曰く、

唯其れ鎬に在り、則ち中に宅り大を圖るなり、重に居て輕を馭す、此の飲酒の樂ある所以なり。

魚在在藻　有莘其尾　王在在鎬　飲酒樂豈

魚在り藻に在り、莘たる其の尾あり、王在り鎬に在り、酒を飲んで樂み豈めり、

魚在在藻　依于其蒲　王在在鎬　有那其居

魚在り藻に在り、其の蒲に依る、王在り鎬に在り、其の居に那んずることあり、

【句釋】莘は魚尾の長き貌。那は安なり。居は處なり。『箋』曰く、天下平安にして王四方の虞無し、故に其の居處那然として安きなり。『通解』那居の下、今日飲酒の樂を點出せんことを要して方に好し。顧氏曰く、既に在藻と曰ふ、又依蒲と曰ふ、藻は內に在り、蒲は外に在るなり。藻は鎬京を興し、那居は自から天下を合して說く、此の理易らず。

【評論】魚藻は三章四句を以て成る。毛傳曰く、魚藻は幽王を刺るなり、言ふ萬物其の性を失ふ、王鎬京に居て、將に以て自から樂しむこと能はざらんとす、故に君子古の武王を思ふ。慶源の輔氏曰く、此の詩鴛鴦と相類す、辭簡なりと雖も、意則ち切なり、其の德を頌せざるは、德盛んにして、言の能く盡す所にあらず、亦尊敬の至りにして、敢て以て形容を加へず、但其の樂飲安居を美むるのみ、則ち盛德にあらずんば、其れ孰か之を能くせん。

采菽采菽　筐之筥之　君子來朝　何錫予之　雖無予之　路車乘馬　又何予之

玄袞及黼

菽を采り菽を采る、之を筐にし之を筥にせり、君子來朝すれば、何をか之に錫ひ予ふ、之に予ふること無しと雖も、路車乘馬あり、又何をか之に予へん、玄袞及び黼、

【句釋】采菽采菽、菽は大豆、之を采るは其の葉を采て以て藿と爲し、三牲牛羊豕、芼にするに藿を以てす、王賓客を饗するに生俎あれば、乃ち鉶羹を用ふ、故に之を采らしむ。筐は方なる「バコ」、筥は圓なる「バコ」。君子は諸侯を謂ふ、來朝は字の如く王庭に朝謁するなり。何錫予之、錫は賜、予は與なり。雖無予之、路車乘馬、路車と乘馬を以て諸侯に錫ふ、而かも之を予ふる無しと雖と言ふは、猶ほ其の錫の薄きを言ふ也、路は金路、車の飾なり。又何予之、玄袞及黼、『傳』曰く、玄袞は卷龍なり、白と黑とを之を黼と言ふ。『箋』曰く、及は與なり、玄袞は玄衣にして、畫くに卷龍を以てするなり。黼は黼黻絺衣を言ふなり、諸公の服は袞冕より下、侯伯は鷩冕より下、子男は毳冕より下、王の賜ふもの、維文章あるものを用ふ、出るに路車乘馬を錫ひ、服るに玄袞黼黻を錫ふ、恩と賜と厚しと謂ふ可きなり。

鬱沸檻泉　言采其芹　君子來朝　言觀其旂　其旂淠淠　鸞聲嘒嘒　載驂載駟

君子所ノ屆

鬻沸たる檻泉あり、言に其の芹を采る、君子來朝す、言に其の旂を觀る、其の旂淠淠たり、鸞聲嘒嘒たり、載ち驂載ち駟、君子屆れる所なり、

【句釋】鬻沸は泉の湧出する形容。檻泉は正出の貌。其芹、芹は水草、卽ち「セリ」一名水英、又水葵なり。君子來朝、言觀其旂、旂音「キ」、訓「ハタ」、來朝の諸侯が車上に樹たる旂なり、芹の采るべきを以て旂の觀るべきを興するなり。其旂淠淠、『傳』に淠淠は旂の動く貌、水に從ふ畀、旂に何の關係がある、淠彼涇舟は舟の行く貌なれば、要するに左右定まらず、旂のひらめくを言ふなり。鸞聲嘒嘒、嘒嘒は鸞聲の形容、聲の細くして響くを言ふ、蟬聲を嘒嘒と稱するにて知るべし。載驂載駟、驂は三なり、駟は四なり。履軒先生曰く、諸侯固より四馬に駕するなり、三馬の禮無し、但詩之を咏じて載驂載駟と云ふのみ、猶ほ鄘風に良馬五ノ之六ノ之の類なり、是れ之を詩の文と謂ふなり、兩驂の驂と爲すものは非なり。君子所屆、屆は至なり、諸侯の來朝する衣服車馬の威儀を觀るに旂は淠淠たり、鸞は嘒嘒たり。『箋』曰く、此等服飾は君子法制の極なり、其の尊うして王今尊からざるを言ふなり。

赤芾在ノ股　邪幅在ノ下　彼交匪ノ紓　天子所ノ予　樂只君子　天子命ノ之　樂只君子

福祿申ノ之

赤芾股に在り、邪幅下に在り、彼の交り紓からず、天子の予ふる所、樂只君子、天子之に命ず、樂只君子、福祿之を申ぬ、

【句釋】赤芾は『箋』曰く、芾は大古膝を蔽ふの象なり、冕服之を芾と言ふ。其の他之を韠と謂ふ、韋を以て之を爲る。其の制上の廣さ一尺、下の廣さ二尺、長さ三尺、其の頸五寸、肩革帶博二寸、脛本を股と曰ふ、乃ち赤色の膝蔽なり。邪幅は足より膝に至るまでを偪束する布なり、故に在下と言ふ。彼交匪紓、天子所予、彼は諸侯を言ふ、交は交際なり。匪紓は緩怠ならざるなり、緩怠の反對は恭敬なり、天子に交はり、諸侯互に交はる、恭敬ならざるべからず。『說通』曰く、芾以て膝を衞るは拜跪を謹しむなり、幅以て脛を束ぬるは趨蹌を便にするなり、此の二者を擧げて以て其の餘を見はすのみ、是れ皆天子の予ふる所なり、邪の字は不正を意味すること勿論なり、足を纏ふものなるが故に邪の字を用ひしなり、法に違ふの邪にはあらず。樂只君子、只は樂の字を助くる詞。天子命之、福祿申之、『箋』曰く、古は天子諸侯に賜ふや禮樂を以て之を樂ましめ、乃ち後に之を命予するなり、天子之を賜ひ、神則ち福祿を以て之を申重す、所謂人謀鬼謀なり、今王然らざるを刺るなり。

維柞之枝　其葉蓬蓬　樂只君子　殿ノ天子之邦ノ　樂只君子　萬福攸ノ同　平平左右

亦是率從

維柞の枝、其の葉蓬蓬たり、樂只君子、天子の邦を殿む、樂只君子、萬福の同る攸、平平たる左右も、亦是れ率ひ從へり、

【句釋】維柞之枝、車攀の篇に已に辨ず。蓬蓬は葉の茂盛を形容す。殿天子之邦、殿は鎮なり、君子の諸侯は何事を爲すやと言はば天子の邦を鎮護するを以て其の職とす。萬福攸同、同は聚同なり、諸侯克く邦を鎮護すれば、邦治まる、邦治まれば天子喜ぶ、天子喜べば萬福の諸侯に聚まり來ること亦柞の葉の蓬蓬たる如く盛んなりとなり。平平は整齊の意。平平凡凡の平平にはあらず。左右の臣、卽ち諸侯の部下の大夫等が威儀整齊として、亦是率從、大夫が諸侯に率從して王朝に來ることを言ふ、平は韓詩に優に作る由なれども、韓詩は今傳はらざるを以て其の眞想を知るに由なし。

汎汎楊舟　紼纚維之　樂只君子　天子葵之　樂只君子　福祿膍之　優哉游哉、亦是戾矣

汎汎たる楊舟、紼纚之を維げり、樂只君子、天子之を葵れり、樂只君子、福祿之を膍うせり、優なる哉游なる哉、亦是れ戾れり、

【句釋】汎汎は水に浮んで輕き貌。楊舟は楊にて製せし舟、又は江岸の楊の樹に繫ぐ舟とするも可なり。紼纚は二字にて「ツナモテ」と訓む「ツナモテツナギ」と訓むの古訓は取らず。維之、維は繫と同じ、舟

は諸侯に喩へ、紼は天子に喩ふ、明王能く諸侯を維持するや舟人の紼を以て舟を維ぐが如し、繫ぎて以て之を制行す。天子葵之、葵は揆なり、度なり、天子が諸侯の爲め何を揆るやと言はば、諸侯の德を揆るなり。福祿膍之、膍は音「ヒ」訓「キブクロ」胃膀なり、然れども今は「アツシ」厚の訓を取る、諸侯を揆るは其の福祿を膍うせんが爲めなり。優哉游哉、此の四字を六字に改むれば、卽ち優游哉優游哉となるなり、心に憂へ關する所無く、我が自適を取る之を優游と言ふ。亦是戾矣、戾は至なり。『箋』曰く、諸侯盛德あるもの亦優游して自から是に安止すとなり。

【評論】采菽は五章八句を以て成る。『毛傳』曰く、采菽は幽王を刺るなり、諸侯を侮慢す、諸侯來朝すれども、錫命禮を以てする能はず、數ば之を徵會して信義なし、君子微を見て、古を思ふなり。

小雅　桑扈

騂騂角弓　翩其反矣　兄弟昏姻　無胥遠矣

騂騂たる角弓、翩として其れ反へる、兄弟昏姻、胥遠ること無かれ、

【句釋】騂騂は『毛傳』曰く調和なり、朱子も曰く調和なり。履軒曰く、調和にあらず、赤色を言ふなり。角弓は朱子曰く角を以て弓を飾るなり。履軒曰く、角は弓の軀を爲す所以なり、徒らに之を飾るにあらず。履軒の說是なるが如し、從ふ可し。翩其反矣、『傳』曰く、善く紲檠巧用せざれば則ち翩然とし

て反す。今謂く緝は長き繩なり、檠は弓を藏し體を定むるの器、未だ弓を成さざる時檠中に內るを謂ふ、此の弓已に調和して檠を言ふは、蓋し用ひ訖りて、竹閉の中に內れ、其の體を損するを恐る、亦之を檠と謂ふ。朱子曰く、弓の物たる、之を張るときは內に向つて來り、之を弛うするときは外に反して去る。兄弟昏姻、親疏遠近の意に似たることあり、此王の九族を親まずして、讒佞を好み、宗族をして相怨しむることを刺るなり。辟辟たる角弓は既に翻然として反る、兄弟昏姻は豈以て相遠ざかるべけんや、兄弟とは父の族、昏姻とは母の族、父の族は四、親と從と及び再從、三從兄弟叔伯、母の族は三、母の父の族、母の族、及び姊妹の族。

爾之遠矣　民胥然矣　爾之教矣　民胥傚矣

爾の遠矣、民胥ひ然矣、爾の教矣、民胥ひ傚矣、

【句釋】爾は王を指す、卽ち幽王なり。九族を親しまずして遠れるや、民胥然矣、王既に九族に親しまず、其の國民も亦之を然りとして九族に親しまざるに至る。爾之教矣、民胥傚矣。『箋』曰く、善なりとも、惡なりとも民は傚ふを以て、今王惡に近きことを爲す、民亦之に傚ふべしとなり。上の下を化するを言ふ、愼しまざるべからず。

此令兄弟　綽綽有裕　不令兄弟　交相爲瘉

此の令き兄弟は、綽綽として裕なることあり、令からざる兄弟は、交瘉ましきことを相爲せり、

【句釋】令は『箋』曰く善なり。綽綽は『傳』曰く寬なり。裕は饒なり。瘉は病なり。朱子曰く、王化の善ならずと雖も、然も此の善兄弟は則ち綽綽として裕なることありて變せず。彼の不善の兄弟は則ち此れ由して交も相病む、蓋し己を讓する人を指して言ふなり。『孔疏』曰く、天下善人少なく、惡人多し。

民之無良　相怨一方　受爵不讓　至于己斯亡

民の良きこと無き、一方に相怨めり、爵を受けて讓らずんば、己も斯れ亡ぶに至らん、

【句釋】民之無良、無智の民、各の自我を主張するを以て、己に利あらざるときは是非善惡の理を判斷せず、直ちに相怨一方、怨む程の理なきも、己に不利なるを以て之を怨むに至る。受爵、朱子曰く爵は爵位なり。不讓は謙讓卽ちへりくだる德、此のへりくだる德を持せざる人は縱令ひ爵位を受けたりとも其の爵位を守る能はず。至于己斯亡、遂に其の身も亡ぶに至るとなり。徐光啓曰く、一方の字佳甚し己斯亡の己字亦佳なり。交傾互軋、同じく盡に歸す、今人兄弟財產を分爭して、兩俱に破敗す、所謂爵を受て讓らず、己も斯に亡ぶに至るの者か。故に曰く、兩人相讓るときは、則ち俱に食を得、兩人相讓らざるときは、則ち俱に食を得ず、正しく此の意なり。何玄子曰く、爵は位にあらず酒爵なり。人情往往、積然たる深讐あるに非ざるも、一爵の酒之を受け讓らざれば、遂に忿を逞くし、以て其の身を亡すに至

る、朱子の爵を位と解したるは『毛傳』に爵縢不二以相讓一とあるに依てなり。今考ふるに雙方共に理は成立するも、今の詩としては何玄子に從うて爵は酒爵と見るべきか。況や此の一經中位の爵を用ふる場合少なく、爵の場合多ければなり。『古義』曰く、一方は猶ほ一隅と言ふが如し、各の執る所あり、自から其の是を見て、敢て相下らず、所以に每に相怨むに至る。

老馬反爲レ駒　不レ顧二其後一　如二食宜饂一　如二酌孔取一

老馬反て駒と爲る、其の後を顧みず、食はば宜しく饂きなん如く、酌まば孔だ取るが如し、

【句釋】老馬反爲駒、『傳』曰く、己老ぬ而して幼童之を慢る。『箋』曰く、此れ幽王、老人を見て反て之を侮慢し、之を遇すること幼稚の如くなるに喩ふ。朱子曰く、但人を讒害して以て爵位を取るを知て、而かも其の任に勝へず老馬の憊るるが如くなるを知らず、反て自から以て駒と爲す。履軒先生曰く、老馬にして駒の任に任ず、是れ駒たるなり。老より壯に反る、故に之を反と言ふ、字法尤も味ふ可し。朱子の反自以爲レ駒と言ふは、詩意を失す。履軒の說是ならん。不顧其後、駒は壯健なり、重荷に堪ふる力を有す、老馬は決して重荷に堪ふる力は無し、而かも其の力を計らずして重荷を負ふ、其の後の患を顧みざればなり。如食宜饂、如酌孔取、鄧潛谷曰く、飲食過ぐるときは反て吐く之を饂と曰ふ、饂は歐同じ、飽て饂吐するなり、十分に食はんと欲する人、酌は十分に飲んと欲する人、暴食暴飲の身體に害あ

るを知らざる也。『講意』曰く、上の二句小人の力を量らざるを喩へ、下の二句小人の足るを知らざるを喩ふ。『毛傳』は幽王を刺りて言ふと解すれども、一般の小人に通ずる詩なり、何ぞ獨幽王のみならん。

毋教猱升木　如塗塗附一　君子有徽猷一　小人與屬

猱に木に升ることを敎ふる毋れ、塗に塗を附するが如し、君子徽猷あらば、小人與に屬かん、

【句釋】毋は勿と同じ、猱は猿猴の一名、猱は升木を以て其の天性とす、敎を待たずして能くす、敎へざるも能くする者に之を敎ふれば、其の敎に從ふことや必せり。如塗塗附、塗は泥塗なり、塗を以て塗に附す、是れ亦其の用を同じくするもの附著せざらんと欲するも得ず、小人に向つて小人の事を敎ふるは、猱に升木を敎ふる如く、塗に塗を附するが如しとなり。君子は王を指す。有徽猷、徽は美なり、猷は道なり、美道を以て位に在る人が、小人に敎ふることあらば、或は敎へずとも我に自然と其の示すべき徽猷あるときは。小人與屬、不善人も自然と善人の道を學ぶに至らん、小人と君子とは德を以て區別せしに非ず、位を以て區別せし也。慶源の輔氏曰く、君は民の表、上は下の倡、民の善惡は、亦唯上の道とする所のみ、罪民に在らず、上に望む者切にして、人に責る者恕なり、詩人の情當に理なるべし。

雨レ雪瀌瀌　見レ晛曰消　莫肎下遺一　式居婁驕

雪を雨らすこと瀌瀌たり、晛を見れば曰に消ゆ、肎て下し遺つること莫うして、式て居て婁ば驕る、

【句釋】雨雪瀌瀌、雪の雨りて盛んなる貌を瀌瀌と言ふ。見晛曰消、『傳』曰く、晛は日氣なり、雪盛んなるも日氣に觸るるに於ては忽ち消融するなり。莫肯下遺、式居婁驕、『傳』曰く、今王、讒言を信じて、彼の小人卽ち讒する人間を下し遺ることをせず、夏に其の驕慢を增さしむる也。『箋』に曰く、莫は無なり、遺は隨なり、式は用なり、婁は斂なり、今王善政を以て小人の心を啓かずんば、則ち肯て謙虛禮を以て相卑下し、人を先にして己を後にし、此を用て自から居處し、其驕慢の過を斂る者無し。此の兩說要するに其の義略同じ、王若し惡ければ小人も惡し、王若し善なれば小人も亦善と爲るなり。

雨雪浮浮　見晛曰流　如蠻如髦　我是用憂

雪を雨らすこと浮浮たり、晛を見れば曰に流る、蠻の如く髦の如し、我是を用て憂ふ、

【句釋】浮浮は雪の飛ぶ貌、瀌瀌と大底同じ。流は雪が日光の爲め融けて流るるなり。蠻は南蠻、八蠻、荆蠻なり。髦は夷髦、今日の所謂突厥と見て可なり。我是用憂、『箋』曰く、今小人の行ひ、夷狄の如し、而かも王之を變化すること能はず、我是を用て大憂と爲すなり。我は此の詩を作る人なり。

【評論】角弓は八章四句を以て成る。『毛傳』曰く、角弓は父兄幽王を刺るなり、九族に親まず、讒佞を好み、骨肉相怨む、故に是の詩を爲るなり。

有菀者柳　不尙息焉　上帝甚蹈　無自暱焉　俾予靖之　後予極焉

菀たる者柳あり、息ふことを尙がはざらんや、上帝甚だ蹈く、自から暱くこと無けん、予をして之を靖んぜしむとも、後予に極めん、

【句釋】有菀者柳、菀は茂れる形容、柳陰が菀茂たるなり。不尙息焉、尙は庶幾なり。『箋』曰く、菀然として枝葉茂盛の柳あり、行路の人、豈之に就て止息することを欲するを庶幾はざらんや、興する者、王に盛德あれば天下皆庶幾して往て朝することを喩ふ、而して今然らざるを憂ふ。上帝甚蹈、朱子曰く、上帝は王を指す。履軒曰く、上帝は天帝なり、借りて以て王を指す、王を謂つて上帝と爲すにあらず。蹈は『傳』に曰く動なり。『箋』曰く、蹈讀んで悼と曰ふ、上帝は之を愬ふなり、今幽王暴虐以て朝事すべからず、甚だ人をして心中悼病せしむ。朱子曰く、蹈は當に神と作すべし。威靈畏る可きを言ふ。履軒曰く、蹈は字の如く踐蹂なり、乃ち暴戾の意、蹈と柳と諧韻なり。以上四家の說、蹈に對し悉く異なる、動と病と神と暴戾と四樣に見を異にす。今謂ふ『說文』足に從ふ酋の聲、踐なり、蹂なり、詩の序に足を動かして履むなり、乃ち暴戾の狀、上帝が怒りて動くなり、朱子の神と解す、臆斷も亦極まれり。然れども、王者暴虐なりと解したる所に依て見れば、朱子の神と爲したるは其の中に暴虐の意を含んでのことならん。無自暱焉、暱音「チツ」、訓は「チカヅク」、近なり、幽王の暴虐、以て近づき親しむ可ら

ざるを言ふ。俾予靖之、後予極焉、他の諸侯多く王に背きて朝せざるに、我獨王家を靖安せしむるも、後に至りて禍の來る時我獨責めを負はん、是れ良とに極まれるとなり。菀たるの柳陰は息はんと欲す、是れ人の常情なり、仁政を布く王の爲めには依賴せんとする、是れ亦民の常情、然るに王は暴虐にして、柳に陰なき如く、何人も遂に此の下に息はんと欲するの念あらざるを謂ふなり。『史記』に魯仲連曰く、齊の威王周に朝す、居ること歳餘、周の烈王崩ず、齊後れて往く、周、齊に怒りて曰く、天崩地坼、天子席を下る、東藩の臣、田齊後れて至る、則ち斬んと。威王怒つて曰く、叱嗟而が母は婢なり、卒に天下の爲めに笑はる。故に生けるときは之に朝し、死するときは之を叱す、誠とに其の求に忍びざるなり。序でに言ふ天子席を下るとは、其の苦に寢、廬に居るを言ふなり。

有菀者柳　不尚愒焉　上帝甚蹈　無自瘵焉　俾予靖之　後予邁焉

菀たる者柳あり、愒はんことを尚がはざらんや、上帝甚だ蹈く、自から瘵ましむること無けん、予をして之を靖んぜしむるも、後予に邁さん、

【句釋】愒音「ケイ」、訓「ムサボル」貪、「イコフ」息なり。無自瘵焉、瘵音「サイ」、訓「ツカレヤマヒ」勞病なり、心神を過度に勞して病むに至るなり。後予邁焉は後予極焉と殆んど同じ。

有鳥高飛　亦傅于天　彼人之心　于何其臻　曷予靖之　居以凶矜

鳥あり高く飛んで、亦天に傅る、彼の人の心、于何か其れ臻らん、曷ぞ予をして之を靖んぜしめ、居くに凶矜を以てす、

【句釋】有鳥高飛、亦傅于天、字の如く鳥は飛ぶを以て本性とす、乃ち飛ば天に傅るなり、傅は至なり。彼人之心、人は王を指す。于何は云何と同じ。其臻、王は何に依て臻るを得るや。曷は何なり。予靖之、居以凶矜、予は到底此の暴虐の王を靖んぜしむる能はず、是を以て王は王自から居ながら此の凶矜を取るのみ、所謂自業自得ならずや。『箋』曰く、王何爲ぞ我をして之を謀らしむ、隨て我を罪し、我を居くに凶危の地を以てす、我を危凶の地に居らしむと言ふ反面には王も亦凶危なり。自業自得の結果なり。

【評論】菀柳は三章六句を以て成る。『毛傳』曰く、菀柳は幽王を刺るなり、暴虐親無うして、刑罰中らず、諸侯皆朝するを欲せず、王者の朝事すべからざるを言ふなり。

桑扈の什十篇四十三章二百八十九句

都人士の什二の八

彼都人士　狐裘黃黃　其容不改　出言有章　行歸于周　萬民所望

彼の都の人士、狐裘黃黃たり、其の容改めず、言を出すに章あり、行いて周に歸らば、萬民の望む所、

【句釋】彼都人士、都は周都、彼周の都城の人士と呼び出すなり。然れども此の都は西周の都か、東周の都か、其の孰れを指すや。朱子曰く、鎬京なりと。乃ち朱子は西周と見たるなり。慶源の輔氏曰く、或曰く先生(朱子)此の詩を以て亂離の後作る所と爲す、此の如くなるときは東遷後の詩なり、厲王、幽に流死するの後、都邑豈能く舊の如くならんや、何ぞ必ずしも東遷後の作ならん、故に先生但周を以て鎬京と爲す也。徐光啓曰く、作者亂離の後に于て往事を追ひ意ふ、蓋し其の目及び見る所なり、文武成康の盛を謂ふに非ず、東漢の光武、司隷たるの時、洛陽に入る、吏士其の僚屬を見て、皆懽喜して勝へず、老吏涕を垂て曰く、圖らざりき今日、復漢官の威儀を見んとは、卽ち此の詩の意なり。輔氏は西周の詩と爲し、徐氏は東周の詩と爲す、前漢亡びて後漢興りし時の事を以て比較す、卽ち西周亡びて東周興る後の作とす。徐氏又曰く、行歸の二句深く見んことを願ふの意を致す、言ふこころは昔時の美、此の如くにして今や一たび往て復見るべからず、倘し周に行歸して再び昔時の盛を睹ることを得ば、豈萬民の

望む所爲らざるを得んや、久しく慕うて忽ち見る、昔出て乍ち歸るが如し、故に行歸于周と曰ふ、句法妙品と。周は鎬京と見るべきなり。狐裘黃黃、狐の皮衣の色黃黃然たるなり。昔時周都の人士は此の狐裘を著して紳士の態度を備へしを言ふ也。其容不改、不改は俗語の容をくづさざるを言ふ。不改は有常なりと注するも、意は容をくづさざるに在り。出言有章、言語の優美なるを言ふ。紳士は紳士の言語あるなり。行歸于周、萬民所望、履軒曰く、行歸は其の往來を謂ふ、泥む勿れ、舊都に向つて往來することは、萬民共に皆望む所であるなり。

彼都人士　臺笠緇撮　彼君子女　綢直如髮　我不見兮　我心不說

彼の都の人士、臺笠緇撮せり、彼の君子の女、綢直なること髮の如し、我見ずんば、我が心說びず、

【句釋】臺笠は臺皮を以て笠を爲るなり。臺は薹の正字、蕓薹、一名夫須草と稱する草の名、又薛卽ち「スゲ」なり、緇撮は傳に緇布冠とあり、撮は取と同じ、緇色の冠以て其の髮を撮持するなり、『傳』曰く、臺は暑を禦ぐ所以、笠は雨を禦ぐ所以、古の明王は儉を守りて奢を禁ず、故に都人士の風俗も亦極めて簡疎なり、儉を言ふを主旨とす、禮にも平居にも郊居にも關するにあらず。彼君子女、城中、中流乃至上流の家庭の女子を指す。綢直如髮、『箋』曰く、彼の君子の女は情性密緻、操行正直、髮の本末隆殺無きが如きなり。朱子曰く、綢直如髮は未だ其の義を詳らかにせず、然れども四章五章を以て之を

推すに亦其の髪の美を言ふのみ。朱公遷曰く、如髪の如は其字ならん、其の髪を綢直にすとの意ならん、朱公遷は箋の義に依て發明せしなり。『說文』に綢は密なりと。嚴粲曰く、密は其の髪生ずるの密、直は亦髪の本性、緊梳は其の髪性の直に順ふ、故に密直如髪と曰ふ、今言ふ此の中、朱公遷が『疏義』の說可なるが如し。我不見兮、我心不說、以上の如き士女を見ざるに於ては、我が心不愉快たるなり。

彼都人士　充耳琇實　彼君子女　謂之尹吉　我不見兮　我心菀結

彼の都の人士、充耳琇實せり、彼の君子の女、之を尹吉と謂ふ、我見ずんば、我が心菀結す、

【句釋】充耳は冠弁に垂れたる耳の玉なり。琇實は美石なり、美石を以て瑱と爲し、耳を瑱塞するを言ふ。謂之尹吉、『箋』曰く、尹は正なり、吉は姞なり、尹氏姞氏は周の昏姻舊姓なり、人都人の女を見て、咸尹氏姞氏の女、其の禮法あるを言ふなり。履軒に說無きを見れば、先生も亦朱子が說を是認するものならん。『古義』曰く、唐の宰相世系に云ふ吉氏は姞姓より出づ、黃帝の裔伯鯈、南燕に封じて姓を姞と賜ふ、又后稷の妃家なり、或は郅と作す。『潛夫論』に云ふ郅と姞と同うして字異なる、又姚寬云ふ吉尹の二姓、俱に尹吉甫の後に出づ。『元和姓纂』に曰く、尹吉甫の後、王父の字を以て氏と爲す、漢に漢中の太守吉恪あり是れなり、二說竝に之を存す。我不見兮、我心菀結、此の如き古の美にして且婉なる女を見ざるときは、我が心菀結して解けずとなり。菀は鬱なり、積なり、菀は以て其の思の已ざるを言ふ。

結は以て其の思の解ざるを言ふ。

彼都人士　垂帶而厲　彼君子女　卷髮如蠆　我不見兮　言從之邁

彼の都の人士、帶を垂れて厲たり、彼の君子の女、卷る髮蠆の如し、我見ずんば、言に之に從うて邁ん、

【句釋】垂帶而厲、『毛傳』曰く、厲は帶の垂るる貌。『箋』曰く、厲は擊厲の如きなり、擊は必ず厲を垂れて飾と爲す、厲字當に裂に作るべし。『古義』曰く、大帶の垂るもの之を名けて紳と爲す、復名けて厲と爲すは、紳は是れ帶の名、厲は是れ垂る貌、季本に云ふ其の垂下に從うて、將に之を履とする如く、危厲の意あり。乃ち厲然と垂れたる形容なり。卷髮如蠆、卷は鬈の本字、蠆は和名「サソリ」長尾を蠆と稱し、短尾を蠍と稱す、卽ち螫蟲なり、女の髮の、卷て以て飾と爲すの狀、此の蟲の尾末捷然として髮の曲り上る者に似たるを以てなり。我不見兮、言從之邁、此の如き女子を見ば、我言に之に從うて邁き、以て盛周の文物を見んとなり。『箋』曰く、邁は行なり、我今士女の此の飾を見ず、心之を思ひ之に從て行んと欲す、言已て憂悶、自殺して古人に從はんことを求めんと欲す。今曰く經文に自殺の意義曾て無し。『箋』は言を誇大にせるものなり。

匪伊垂之　帶則有餘　匪伊卷之　髮則有旟　我不見兮　云何盱矣

伊之を垂るるに匪ず、帶則ち餘あり、伊之を卷くに匪ず、髮則ち旟あり、我見ずんば、云何ぞ盱まん、

【句釋】匪伊垂之、帶則有餘、帶を故に垂すに非ず、帶長ければ自ら垂るるなり。匪伊卷之、髮則有旟、髮を故に卷に非ず、髮自ら旟なり。共に是れ自然に一任を言ひたるに非ず、其の姿態自然にして美、修飾を假らざるを言ふなり。旟は揚なり。我不見兮、云何盱矣、然りと雖も得て見る可らず、云何ぞ盱まざるを得ん、盱むも能はざるを知る、而かも盱むは情の致す所なり。『箋』曰く、盱は病なり、之を思ふこと甚し、我今已に病むなり。『說文』に盱は目を張なりと、朱子の望と訓するを切とす、病の義は今用ひず。

【評論】都人士は五章六句を以て成る。『毛傳』曰く、都人士は周人、衣服常なきを刺るなり、古は民に長たる、衣服貳にせず、從容常あり、其の民を齊うして則ち民德一に歸す、今復古人を見ざるを傷むなり。

終朝采綠　不盈一匊　予髮曲局　薄言歸沐

終朝綠を采る、一匊に盈たず、予髮曲り局けり、薄らく言に歸り沐せん、

【句釋】終朝は旦より食時に及ぶ間を言ふ、今日の午前中と言ふが如し。不盈一匊、匊は兩手なり、其の少少なること知る可し。綠は菉なり、一名王芻、黃色を染むるの草。予髮曲局、局は『毛傳』に卷なり、惕齋曲と同義に解したるは其の祖(朱子)の說に背く。朱子も『毛傳』の卷を信ずればなり。薄言歸沐、『箋』曰く、禮に婦人夫家に在れば象笄を笄す、今其の髮を曲卷す、憂思の甚だしきなり、君子將に

歸らんと云ふ者あらば、則ち沐して以て之を待たん。

終朝采藍　不盈一襜　五日爲期　六日不詹

終朝藍を采る、一襜に盈たず、五日を期と爲し、六日まで詹えず、

【句釋】采藍、藍は染草なり。襜は衣の前を蔽ふもの、膝を蔽ふもの所謂「ヒザカケ」「マヘダレ」なり、一襜に盈たず、僅僅なるを言ふ。五日爲期、六日不詹、詹は瞻の本字、五日と六日に就て二三說あるも、要するに夫が歸期を誤つて之を待てども瞻えずとなり。

之子于狩　言韔其弓　之子于釣　言綸之繩

之子于に狩す、言に其の弓を韔にせん、之子于に釣す、言に之が繩を綸らん、

【句釋】之子は婦より其の夫を稱するなり。綸は絲を理するなり。『箋』曰く、君子往て狩せば、我當に之に從うて、之が爲めに弓を韔にすべし、其の往て釣するときは、我之が爲めに繳を繩にすべし、今怨曠自から恨む、初め行くときは然らざるなり。張七澤曰く、後の二章蓋し言ふ、其の歸りて狩に就くときは之が爲めに弓を韔にし、釣には則ち之が爲めに繩を綸り、而して獲る所あるなり、則ち我亦君子と共に之を觀、相親しみ相暱るるを得、如今の怨曠に至らざるなり。然而して君子の歸何れの時ぞ、只是の如く說き得て、僾ち是れ思望の切、若し往て之と與にせざること無らんと欲す(朱子ノ言)と言はば、則ち俚

に近し、殊に詩人溫厚の旨を失す。

其釣維何　維魴及鱮　維魴及鱮　薄言觀者

其の釣れるは維何ぞ、維魴と鱮、維魴と鱮ならば、薄らく言に觀者、

【句釋】●其釣は婦より其の夫の釣するを言ふ。『箋』曰く、其の君子の技藝あるを美むるなり。●魴は赤尾の魚、和名「ナヨシ」なり。●鱮は和名「ハソ」なり、我が夫が釣する必ず嘉魚を釣る、是を以て觀者は多しと其の夫を美むること明明たり。

【評論】采綠は四章四句を以て成る。傳曰く怨曠を刺るなり、幽王の時、怨曠の者多きなり。『箋』曰く、怨曠とは君子行役し、時を過すの由る所、而して之を刺る者、其の但憂思のみにあらず、君子に外に從がはんと欲する非禮を譏るなり。徐光啓曰く、此の詩、卷耳載馳と同體、俱に是れ托言、一も事實なし、古人の含情寄況、大都此の如し。

芃芃黍苗　陰雨膏之　悠悠南行　召伯勞之

芃芃たる黍苗、陰雨之を膏せり、悠悠たる南行、召伯之を勞せり、

【句釋】●芃芃は『傳』に長大の貌、黍の苗が芃芃と長大なり、其の長大なる所以は陰雨膏之に依てなり、

陰雨は後世久雨の意に用ふるも、此の章に於ては嘉雨の意味なり。『箋』曰く、天下の民は黍苗の如く然り、宣王能く恩澤を以て之を養育し、亦天の陰雨の潤あるが如くなるに興す。●悠悠は行く貌。●南行、●召伯勞之、『箋』曰く、宣王の時、召伯をして謝邑を營せしめ、以て申伯の國を定む、徒役を將ゐて南行す、衆く從ふ者悠悠然たり、召伯則ち能く之を勞す、此の詩を作る者は卽ち行者なり。『講意』曰く、地遠くして時久し、故に悠悠と曰ふ、謝邑は周の南に在り、故に南行と曰ふ、崧高に南邦南土と云ふを觀て見る可し。召伯は召康公の子、穆公虎なり。『魯詩世學』に召伯は穆公の本爵とあり。

我任我輦　我車我牛　我行既集　蓋云歸哉

我が任我が輦、我が車我が牛、我が行既に集れり、蓋し云に歸らんや、

【句釋】●任以下の語に就て『傳』に曰く、●任は任者、●輦は輦者、●車は車者、●牛は牛者。『箋』曰く、●集は猶ほ成の如し、●蓋は皆の如し。謝を營すゝ轉運の役、任を負ふ者あり、輦を輓く者あり、車を將る者あり、傍牛に牽く者あり、其の南行の爲めにする所の事、既に成る、召伯則ち皆之に告げて云ふ、歸るべきや、今王、民をして行役せしむるに曾て休止の時無きを刺るなり。之を要するに行役の任務終へたるに由て歸休せんとなり。

我徒我御　我師我旅　我行既集　蓋云歸處

我が徒我が御、我が師我が旅、我が行既に集れり、蓋し云に歸處せん、

【句釋】●●我徒以下の語に就て『傳』に曰く徒行者と、御車者と、師者と、旅者となり。『箋』曰く、步行を徒と曰ふ、召伯財邑を營す、兵衆を以て行く、其の士卒步行の者あり、兵車を御する者あり、五百人を旅と爲し、五旅を師と爲す。『春秋傳』に曰く、諸侯の制、君行く師從ふ、卿行く旅從ふ、謝邑の經營終りたるを以て旅團も師團も皆歸休せんとなり。『古義』曰く上章、任、輦、車、牛は工作の器を載を以て言ふ、此の章、徒、御、旅、師は工役を受るの人を以て言ふ、蓋し皆周より調發して以て謝民を勞せざるなり。

肅肅謝功　召伯勞之　烈烈征師　召伯成之

肅肅たる謝の功、召伯之を營めり、烈烈たる征師、召伯之を成せり、

【句釋】●●肅肅は嚴正の貌。●●謝功は謝邑の功なり。●營は治なり。●●烈烈は威武の貌。●征は行なり。謝邑の宮廟城池の制作、皆召伯能く之を營治せり、其の師旅は威武にして召伯の命を奉じ、事悉く成れるを美むるなり。『古義』曰く、謝は申伯今改封する所の國、郡國志に云ふ南陽郡の宛縣、本申伯の國、棘陽縣の北百里に謝城あり。按ずるに棘陽は今日の河南省汝寧府信陽州是れなり。

原隰既平　泉流既清　召伯有成　王心則寧

原隰既に平らぎ、泉流既に清めり、召伯成せることあり、王の心載ち寧し、

【句釋】●原はヤヤ高き處。●隰はヤヤ卑き處、其の高卑を安排せしが●●既平なり。●●泉流既清、前は土の治まるなり、此の句は水の治まるなり。『箋』曰く、召伯謝邑を營し、其の原隰の宜しきを相、其の水泉の利を通じ、此の功既に成り、宣王の心則ち安きなり、又今の王臣成功無くして亦心安きを刺るなり。朱公遷曰く、當時宣王、申伯の土田を徹するを以て命と爲す、故に云ふこと然り。徐光啓曰く、建國は土地を以て重しと爲す、故に原隰泉流特に謝功の中に于て抽出して之を言ふ、高きに因て高うし、下きに因て下うし、各の其の宜しきを得、是を既平と謂ふ。

【評論】黍苗は五章四句を以て成る。『毛傳』曰く、黍苗は幽王を刺るなり、天下を膏潤する能はず、卿士召伯の職を行ふこと能はざるを刺るなり。詩卽ち宣王の時の作なり。朱子曰く、此れ宣王の時の詩、大雅の崧高と相表裏す。『古義』曰く、鄒忠胤云ふ崧高何を以てか之を大雅に繫け、黍苗何を以てか之を小雅に繫くる、固より體裁音律、自爾等しからざるを知る、蓋し黍苗は卽ち行役の士庶を作るに非ず、行役の士庶に代つて言ふ、崧高の若き鋪敍宏闊、自から是れ名公の鉅章、此れ大小雅、繇て別るる所、愚案ずるに崧高は意申伯を重んず、此の意召公を重んず、命旨各の別なり。

隰桑有阿　其葉有難　既見君子、其樂如何

隰桑阿たること有り、其の葉難たること有り、既に君子を見れば、其の樂み如何ぞや、

【句釋】隰は下溼の地、桑に宜し、阿は阿然、美なる貌。難は難然、盛なる貌。『箋』曰く、隰中の桑、枝條阿阿然として長美、其の葉茂盛。『孔疏』曰く、桑は水に能るの木にあらず、而かも隰桑美なりと言ふは、桑、停水の地に宜しからざるを以てなり。隰の近畔、或は水無うして桑に宜し。既見君子、其樂如何。『箋』曰く、桑陰の人を庇ふは時の賢人君子、用ひられずして野處し、覆養の德あるに喩ふ、正に隰桑を以て興するは、反つて此の義を求むれば則ち原上の桑、枝葉然る能はず、以て時の小人位に在り、民に德無きを刺るなり。此の如く一詩一詩皆時を諷刺すと定むるが『毛傳』の宗にして此の宗旨を布延する者が『鄭箋』なり。然りと雖も、此の詩を此の如くに解す、作者の意果して然るや否やは容易に斷じ難し。朱子曰く、詞意大槩菁莪と相類す、然して所謂君子は則ち其の何の指す所を知らず、或は曰ふ比なり。徐光啓曰く、其樂如何とは自から言はんと欲すれども、言語の能く形容する所に非るなり。履軒先生曰く、此れ相思の詩なり、既見君子、其樂如何とは、是れ量度の語、下章皆此れに倣へ、文字の表面より之を見るときは履軒の所謂男女相思の詩なること明白なり、卽ち桑の葉の美なるを以て、君子の顏色威儀の美盛なるに比するなり、當面の解釋此の如きも風刺の意あるものと解する者は『箋』に從ふも亦可ならずや。故に『傳』既見君子、其樂如何を解して、在野の君子を思ふ、而して其の位に在

るを見ば喜樂度ること無けんと。

隰桑有阿　其葉有沃　既見君子　云何不樂

隰桑阿たること有り、其の葉沃たること有り、既に君子を見れば、云何ぞ樂まざらん、

隰桑有阿　其葉有幽　既見君子　德音孔膠

隰桑阿たること有り、其の葉幽たること有り、既に君子を見れば、德音孔だ膠し、

【句釋】沃は『傳』に柔なり。朱子曰く、光澤なる貌。柔も光澤も共に此の字の具する所なり。云何不樂、徐光啓曰く、自から止まんと欲すれども、我が能く遏抑する所に在るにあらざるなり。幽は深綠にして黑色に似たるなり。孔は甚なり。膠は固なり。顧氏曰く、德音孔膠は注に明文無きに因て其の解一ならず、然れども其の德音の相契を喜んで、固結して能く之を間隔すること無しと作すの義、較勝るに似たり。呂東萊曰く、是の詩の三、隰桑を以て興を爲す、皆賢者を見んとの精神情意を見ることを樂しむなり、意亦此の如し。

心乎愛矣　遐不謂矣　中心藏之　何日忘之

心に愛す矣、遐ぞ謂げざらん、中心之を藏す、何れの日か之を忘れん、

【句釋】心乎愛矣、誠心誠意を以て我は我が君子を愛すとなり、此の用字法は多く類無し。余は謂ふ乎